

# 日本語とペルシア語の構文並列の 対照研究

Jahedzadeh Shorblagh Behnam

励ましてくれた父に，言葉を教えてくれた母に，そして，父親である私の問いかけに  
いつもニコニコ笑ってくれる息子のアランに捧げる。

## 省略記号

ACC: accusative

AP: adjective phrase

Arb: Arabic

BG: backward Gapping

CCA: closest conjunct agreement

CON: conjunctive

EZ: ezafe (Genitive)

FG: forward gapping

GEN: genitive

INDF: indefinite

N: noun

NP: noun phrase

O: object

PASS: passive

PAST: past

Per: Persian

pl: plural

POSS: possession

PRES: present

Prt: particle

QUAN: quantitative

REF: reflexive

S: subject

sg: single

SUBJ: subjunctive

SVA: subject-verb-Agreement

TOP: topic

V: verb

VP: verb phrase

Ø: zero marker

# 目次

## 第一章 序論

1. はじめに.....	5
2. 用語の定義と説明.....	6
2. 1. 線条性(linearity)とは.....	6
2. 2. 言語における並列.....	7
2. 3. 並列により起きる省略(Ellipsis).....	7
2. 3. 1. 省略された情報は復元可能でなければならない。.....	8
2. 3. 2. 省略される情報には参照する要素がなければならない。.....	10
2. 3. 3. 省略は他のシンタックスのルールに違反してはいけない。.....	11
2. 3. 4. 省略は経済的であるが曖昧性を高めてしまう。.....	12
2. 3. 5. 省略の普遍性と個別性.....	13
2. 4. Gapping とは.....	15
2. 5. 並列詞と類似事態との関係.....	16
3. 先行研究.....	17
4. 研究の意義に関して.....	20
5. 方法論.....	20
6. 本論文の構成.....	21
7. 本章の考察とまとめ.....	23

## 第二章 ペルシア語と日本語の構造概説

1. ペルシア語の概説.....	24
1. 1. 系統と話されている環境.....	24
1. 2. ペルシア語の歴史.....	24
1. 3. 表記法.....	24
1. 4. 統語法.....	25
2. 日本語の概説.....	28
2. 1. 系統と話されている環境.....	28
2. 2. 日本語の歴史.....	29
2. 3. 表記法.....	29
2. 4. 統語法.....	30
3. 本章の考察とまとめ.....	34

### 第三章 日本語の「も」とペルシア語の ham の並列方法

1. はじめに.....	35
2. ペルシア語における ham の用法.....	35
3. ham の先行研究.....	36
3. 1. 代名詞.....	37
3. 2. 接頭辞.....	37
3. 3. 並列詞.....	37
4. 本論文で指摘する ham の用法.....	37
4. 1. 「基本の ham」.....	38
4. 2. 「因果関係の ham」.....	38
4. 3. 「補足の ham」.....	39
4. 4. 「単純並列の ham」.....	39
4. 5. ham の用法のまとめ.....	41
5. 「も」の先行研究.....	41
6. ham と「も」の基本的と周辺的な意味の場合.....	43
7. 「も」と ham の対応.....	43
8. 類似事態による「も」の生起.....	46
8. 1. 「補足の ham」の場合.....	46
8. 2. 「因果関係の ham」の場合.....	46
8. 3. 「単純並列の ham」の場合.....	46
9. 本章の考察とまとめ.....	48

### 第四章 「て」の並列方法とそれに対応するペルシア語の用法

1. はじめに.....	49
2. 「て」に関する主な先行研究.....	51
3. 「て」の意味.....	53
3. 1. 付帯状態.....	53
3. 2. 因果関係.....	54
3. 3. 継起・順序.....	56
3. 4. 並列.....	56
3. 5. 対比.....	57
3. 6. 手段・方法.....	57

3. 7. 逆接.....	57
3. 8. 結果・評価.....	58
<b>4. ペルシア語における構文の並列.....</b>	<b>58</b>
4. 1. 先行研究.....	58
4. 2. -oによる並列方法とその意味.....	59
4. 2. 1. -oの統語的な並列方法.....	59
4. 2. 2. vaによる並列と-oとの相違点.....	60
4. 2. 3. -oの表す意味.....	62
4. 2. 3. 1. 並列.....	62
4. 2. 3. 2. 継起・順序.....	62
4. 2. 3. 3. 因果関係.....	63
4. 2. 3. 4. 対比.....	64
4. 4. Øマーカによる並列方法.....	65
4. 4. 1. 「並列」の用法.....	65
4. 4. 2. 「継起」.....	65
4. 4. 3. 「因果関係」の用法.....	66
4. 4. 4. 「対比」の用法.....	66
4. 5. hamの用法.....	66
4. 5. 1. 「並列」の用法.....	66
4. 5. 2. 「因果関係」のham.....	67
4. 5. 3. 「因果関係」のhamにおける主語の問題.....	67
4. 5. 3. 1. 異主語の例.....	68
4. 5. 3. 2. 同一主語の例.....	68
4. 5. 4. 「補足のham」.....	69
4. 5. 5. 「単純並列のham」.....	69
<b>5. 「て」に対応するペルシア語の並列方法.....</b>	<b>69</b>
<b>6. 否定文における並列.....</b>	<b>71</b>
6. 1. 肯否文における並列.....	71
6. 2. 否肯文における並列.....	72
6. 3. 否否文における並列.....	72
<b>7. 本章の考察とまとめ.....</b>	<b>75</b>

## 第五章 日本語とペルシア語における Gapping の仕組み

1. はじめに.....	76
2. Gapping における先行研究.....	76
3. ペルシア語における Gapping.....	77
3. 1. ペルシア語での BG における制限.....	80
4. Agreement と Gapping の問題.....	82
4. 1. Agreement の問題.....	82
4. 1. 1. SVA 規則.....	82
4. 1. 2. CCA 規則.....	84
4. 2. 語順の問題と Gapping の出現.....	87
4. 2. 1. 語順に関する先行研究.....	88
4. 2. 2. SOV から逸脱するケース.....	89
4. 2. 2. 1. ke 節による SVO.....	89
4. 2. 2. 2. tā 節による SVO.....	90
4. 2. 2. 3. 一部の知覚動詞による SVO.....	90
4. 2. 2. 4. ムードを表す動詞の上昇.....	93
4. 2. 2. 5. 掻き混ぜ文で上昇する動詞.....	93
4. 2. 2. 6. 枠外配置が可能または不可能な目的語.....	94
5. 日本語での Gapping.....	96
5. 1. 日本語における非一致的な BG.....	97
5. 1. 1. 感情動詞と S との一致.....	97
5. 1. 2. 授受表現における S と V の一致.....	98
5. 1. 3. ムードを表す動詞と主語との一致.....	99
5. 1. 4. 敬語動詞と主語との一致.....	100
5. 1. 5. 掻き混ぜ文における語順.....	101
6. 本章のまとめ.....	103

## 第六章 結論.....104

## 参考文献.....107

## 謝辞.....114

# 一章

## 序論

### 1. はじめに

本論文はペルシア語の構文並列と日本語の構文並列の対照研究であり、具体的にはペルシア語の連結詞 **ham** と日本語の副助詞「も」、日本語の接続助詞「て」とそれに対応するペルシア語の連結詞 **ham**, **-o**,  $\emptyset$  マーカー、さらに、ペルシア語と日本語における動詞の省略(Gapping)を統語論(Syntax)及び意味論(Semantic)の立場から考察するものである。

統語論ではそれぞれの語がペルシア語や日本語でどのような統語的機能を持ち、どのような規則や条件の下で使用されているのかを解明する。意味論ではペルシア語の **ham** の持つ意味を考察し、**ham** に対応する日本語の「も」の指し示すスコープと対照する。日本語における「も」の意味のスコープを実際に把握するためにアンケートも用いる。さらに、日本語の接続助詞「て」の指し示す意味と、それに対応するペルシア語の **ham**, **-o**,  $\emptyset$  マーカーの意味を明らかにし、意味の一致やずれに着目する。

言語は線条的な現象であることから、語彙や構文を羅列する際に、並列を余儀なくされる。そこで、並列された語彙や構文の統合関係などが絡み、様々な処理の仕方が生じることになる。その処理方法は語彙レベル(Noun phrase)と構文レベル(Verb phrase)によって異なる。本論文ではペルシア語と日本語の構文レベルを扱う。並列は構造を組み立てるメカニズムの中で処理プロセスとして重要な役割を果たしている。並列はシンタックスに影響を与え、並列詞の出現や省略の一因となる。さらに、並列詞や類似する要素の省略は意味に影響を及ぼすことになる。このプロセスは普遍的であるが、言語によって個別的であり異なるストラテジーが取られる。

Kayne(2005)は、近い方言同士や統語的に近い言語同士の比較を **microcomparative**、統語的に遠い言語同士の比較を **macrocomparative** と名付けている。この定義に従えば、本論文が対象としているペルシア語と日本語の比較は **macrocomparative** に当たる。

また、**macrocomparative** であればあるほど、比較する要素やパラメーターには類似性が少なく、相違点が多くなると予想される。



## 2. 用語の定義と説明

### 2.1. 線条性(linearity)とは

ある構文中の前件と後件がお互いに論理的な関係になれば、それらは時間軸上に単に配列されるのみである。日本語では「て」、ペルシア語では ham, -o, Ø マーカーなどが前件と後件の統語的なつながりを担う。これらは語彙的に特別な意味を持たない機能語に分類される。このように、二つの事柄は同時に述べられないことから、どちらかが先に、それ以外は後に置かれることになるが、これは言語の普遍的な特質である線条性(linearity)からくる制約に由来するものであり、論理的な理由を持たない。

- (1) 息子は若くて、背が高い。
- (2) 警察に届けてて病院にも行ってください。
- (3) ジェームズはイギリス人で英語の先生だ。

上記の例では二つの構文が「て」によって繋がれている。前件と後件は論理的につながっておらず、それらが前後しても意味が変化しない。

しかし、前件と後件が前後することによって意味が変化する構文の方が大半を占めている。例えば「ご飯を食べて歯を磨いた。」の構文と、「歯を磨いてごはんを食べた。」では行為の順序が全く異なる。Martinet(1967)は言語の線条性について以下のように述べている。

どんな言語も発音するさいには、だから、言表の線の形をとり、言表はよく発音連鎖 chaîne parlée と呼ばれるものを代表する。人間の言語活動がこのように**線の形 forme linéaire**をとることは煎じつめていくと声による性格 **caractère vocal**をもつことからきている：声による言表は必ず時間のなかで発展し、聴覚によって必ず一つの継起として知覚される。

(Martinet 1967, 三宅訳 1970:17)

また、加藤(2006)は言語における線条性について、「音素が時間軸上に配列されて形態素をなし、形態素がさらに時間軸上に配列されて統語的な単位をなすと考えれば、それぞれのレベルにおいて線条性の制約がある」としている。加藤(2006)はまた、従来線条性と呼ばれてきた言語の時間軸の配列を「複線条性(polylinearity)」と呼び、厳格な提案をしている。

## 2.2. 言語における並列

上でも述べたように、言語は線条的な現象であることから情報伝達のために発せられる構文はすべて一定の時間軸に沿って配列される。言い換えれば、言語は時系列的な現象であり、同時に二つの音声、語彙や構文を発することができない。したがって、言語における並列は強制的である。並列されることによって構文に類似事態が出現し、繰り返す必要のない情報が省略される<sup>1</sup>。同時に並列詞が現れ、前件と後件が効率よく繋がれていく。並列は言語のもっとも小さい単位である音素から談話のレベルまで適用される。

語形成ではどの音素がどの音素の後に来るかによって異なった語が形成される。また語彙の並列では「若い男と女」と表現するのかあるいは「若い女と男」と表現するのかで表す意味が異なってくる。「太郎は花子と結婚した。」と「太郎と花子は結婚した。」という構文の意味も同一ではない<sup>2</sup>。

## 2.3. 並列により起きる省略(Ellipsis)

われわれ人間は世界の現象を言葉で表現する場合、伝えたい情報を一定の時間軸に沿って述べる。言語の最も小さい単位である音素から最も大きい単位の談話まですべて一つ一つ線条的に並列される。

Marjorie(2005)が述べているように、「統語的な省略は、本来構文の統語構造に参与する可能性のあった語や節の非符号化行為である」<sup>3</sup>。これは自然言語でなにもかも符号化する必要がないという言語の効率性からくる特性である。並列される構文は統語的・意味的な関係によって結び付けられる。また、並列詞が出現し、二つの構文を繋ぎ合わせる。並列は言語の線条性からくる特性であり、省略は並列によって生じる。これらの概念の関係を図1(p.8)のように示すことができる。

どの意味を表したいかにより、要素をどの要素の後に述べるかが決まり、統語的な規則が意味を支配する。「屋根から落ちてけがをした。」と、「けがをして屋根から落ちた。」は同じ要素が前後した構文であるが、表す意味が異なる。図1では本論文で扱う線条性、

---

<sup>1</sup> 省略は先行事態がなくても可能である。特に新聞の見出しでは述語や助詞の省略が頻繁に行われる。

<sup>2</sup> 「太郎と花子は結婚した。」という構文は二通りに読み取ることが可能である。まず、「太郎と花子と一緒に結婚して夫婦になった。」という解釈と「太郎と花子がそれぞれ別々の相手と結婚した」という解釈である。並列詞のこのような二重解釈は collective (集合的) と distributive (分配的) 解釈に分類される。上記の解釈の前者は集合的解釈、後者は分配的解釈となる。

<sup>3</sup> “Syntactic ellipsis is the nonexpression of a word or phrase that is, nevertheless, expected to occupy a place in the syntactic structure of a sentence.”

(Marjorie 2005:3)

並列，省略の関係が示されている。

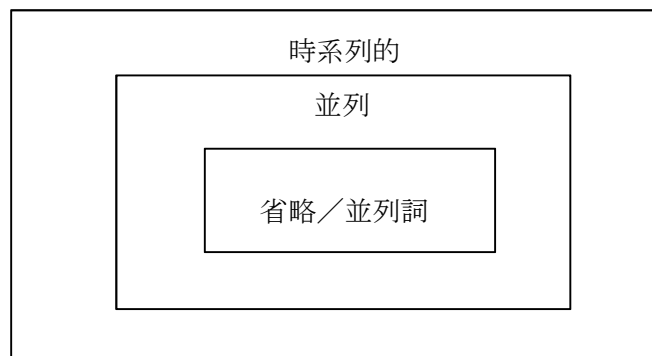


図 1. 省略に関するルールの優先順位

Marjorie(2005)は Ellipsis が普遍的な言語現象だと述べている。また，言語によってその範囲が異なるとし，以下のように定義している。

“Syntactic ellipsis is the nonexpression of a word or phrase that is, nevertheless, expected to occupy a place in the syntactic structure of a sentence.”

(Marjorie 2005:3)

ただし，省略は無規則に働くのではなく，言語内の一定の規則によって統御されている。省略される情報は以下の三つの条件 (2.3.1., 2.3.2., 2.3.3.) を満たさなければならない。

### 2.3.1. 省略された情報は復元可能でなければならない。

Marjorie(2005)は省略には復元可能性と言語設定の中の許可という二つの条件の下で可能になると述べている。

In order for syntactic ellipsis to be possible, two conditions must be met: the language must license (permit) ellipsis in the given configuration, and the content of the elided category must be recoverable (understandable).

(Marjorie 2005:16)

(4) “If you are going to **procrastinate**, I will  $\emptyset$ , too.

(5) [The speaker, eyeing two slabs of chocolate cake] Shall we  $\emptyset$ ?

(6) By midnight Joan **had finished** her term paper and Jason  $\emptyset$  his math homework.

(ibid.)

さらに、日本語は主語の省略が可能であり、その構文や場面によって主語や主題の復元が可能である。例えば、「行く」という構文が発せられたときに、復元可能となる構文の可能性は少なくとも以下ようになる。これらの省略は文脈(context)に頼る省略である。

- (7)行く {
- a. 私 (達) は行く
  - b. あなた (達) は行く
  - c. 彼 (女) (ら) は行く

共格の「と」によって並列された「若い男と女」からは二つの句が復元可能となる。

- (8)若い男と女 {
- a. 若い男と若い女
  - b. 若い男と (ある) 女

また、久野(1978)は『談話の文法』の中で「省略の根本原則」として次のことを述べている。

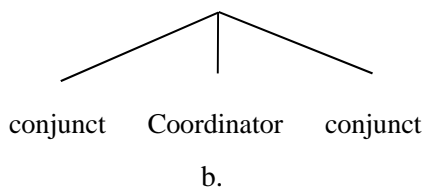
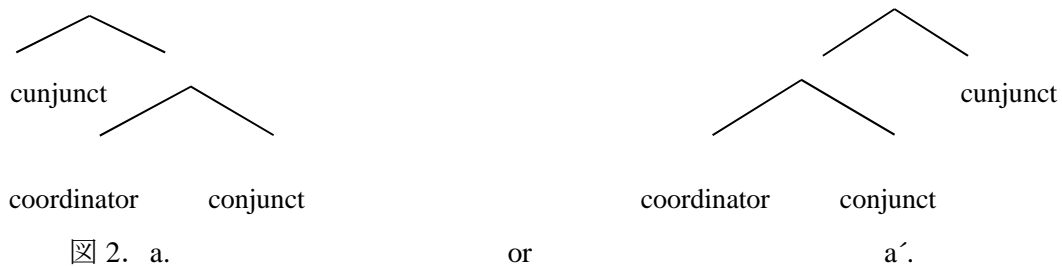
「省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能(recoverable)でなければならない」

(9)A： 君ハ、昨日、三時頃、花子ト神田ヲアルイテイタカ。

B： ウン、[Ø] アルイテイタ。

(久野 1978:8-9)

並列詞によって並列された要素の構造は以下のように示される。



(Zhang 2010:10)

### 2.3.2. 省略される情報には参照する要素がなければならない。

ペルシア語も日本語のように主語省略が可能な言語である。動詞には人称代名詞が接尾し、主語を省略しても人称代名詞によって主語を指し示す要素を参照することができる。

(10) raft-am → man raft-am  
 went-1sg I went-1sg  
 (I went.)

さらに、先ほどの例(8)でも見たように、一つの要素が省略されているが、参照される要素は存在している。

(8)若い男とφ女  
 ↑

また、複数の参加者による談話の中での省略も頻繁に起こる。談話の参加者の発言に出現し、なおかつ繰り返す必要のない要素が省略される。

(11) A: Hi! How are you?  
 B: Hi! I am fine thanks. And (~~how are~~) you?  
 A: Not so bad.

(12) A: 海に行きたいなあ。

B: 私も海に行きたい。

### 2.3.3. 省略は他のシンタックスのルールに違反してはいけない。

省略は自由自在にできるものではなく、その言語の中の規則に従って行われなければならない。

(13) \*Man raft.

I went

(Intended meaning: I went.)

上記の例では、主語の *man* は一人称代名詞であるが、動詞は三人称の人称語尾( $\emptyset$ )で生起している。V は自らの S と一致しなければならないという Subject-Verb-Agreement (SVA)に違反し、非文となっている<sup>4</sup>。

また、以下の日本語の例は構文の最後に動詞が生起する日本語の SOV 語順を満たしていないことから非文となる。

(14) \*私はコーヒーを注文した、友達は紅茶を $\emptyset$ <sup>5</sup>。

久野(1978)は、省略順序の制約に関して以下のことを述べている。

「省略は、より古い（より重要度の低い）インフォメーションを表わす要素から、より新しい（より重要な）インフォメーションを表わす要素への順に行く。即ち、より新しい（より重要な）インフォメーションを表わす要素を省略して、より古い（より重要度の低い）インフォメーションを表わす要素を残すことはできない。」

(久野 1978:15-6)

---

<sup>4</sup> 言語における Agreement は普遍的な現象であり、様々な形で現れる。アラビア語、フランス語、スペイン語などのように修飾語と被修飾語の性の一致、英語のように修飾語と被修飾語の数の一致が求められるなど、言語によってその範囲が広がったり狭かったりする。Agreement に関して、詳しくは Corbett(2006)を参照。

<sup>5</sup> Kuno(1978)も日本語における Forward Gapping の例を非文としている。しかし、特に音声言語ではこのような FG が承認される可能性がある。音声言語では、その場面で言い直されたり確認したりすることが可能であることから書き言葉より柔軟性があると思われる。第五章も参照されたい。

(15) A: Were you born in 1960?

B: \*Yes, I was born  $\emptyset$ .

(ibid: 16)

久野(1978)は、Bの答えが単に Yes の場合、他の部分が復元可能であり、その場合は非文にならないとしている。

#### 2.3.4. 省略は経済的であるが曖昧性を高めてしまう。

省略は極めて効率的且つ経済的である。しかし、省略によって効率性が高まる一方、曖昧性も高まる。「若い男と女」の例をもう一度参照されたい。「若い男と女」は「若い男と若い女」より効率的であるが曖昧性が高い。また、省略は少なければ少ないほど言語の精密性が高まるが省略のない表現は非効率的且つ非経済的である。「若い男と若い女」は「若い男と女」より経済的ではないが精密性が高い<sup>6</sup>。

さらに、「叱られた」という例文では、話し手と聞き手との間に相互認識がなければ、誰に叱られたのか理解できない。そこで「先生に叱られた」になれば、精密性が上がるが、この段階では話し手がどの先生を指しているか理解できない。「山口先生に叱られた」ではその曖昧性がぐっと下がる<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> 日本語における省略(Ellipsis)に由来する曖昧性については Nariyama(2003)も議論している。

<sup>7</sup> Shibatani(1990)は日本語における曖昧性の原因の一つは格の省略から来ているとしている。

(1) Omission of the accusative *o*

a. *ima kono hon yonderu nen.*

Now this book read FP

'Now (I'm) reading this book.'

b. *ima kono hon o yonderu nen.*

ACC

(2) Omission of nominative *ga* (and *o*)

a. *Taroo  $\emptyset$  kaetteru no  $\emptyset$  sitte iru?*

Return-be that know be

'Do (you) know that Taro's back?'

b. *Taroo ga kaetteru no o sitte iru?*

(3) Omission of the topic *wa*

a. *kimi  $\emptyset$  dare ga suki?*

You who NOM like

'Who do you like?'

b. *kimi wa dare ga suki?*

TOP

(Shibatani 1990:367-8)

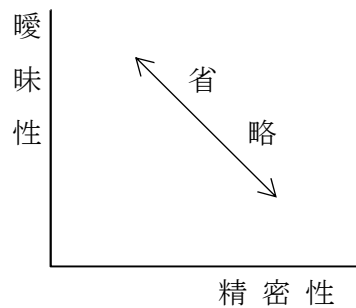


図3. 省略の有無は精密性と曖昧性に影響を与える

### 2.3.5. 省略の普遍性と個別性

言語原則は普遍的であっても、言語内部の規則は言語によってそれぞれ個別的であり、必ずしも同じ規則を他の言語でも確認できるとは限らない。たとえば、下記の英語の例では対比の意味があるにも関わらず **Gapping** が可能となっている。同じく対比の意味を想定して作る日本語やペルシア語の構文では **Gapping** が許されない。

(16) Sara entered The University of Tokyo, but John  $\emptyset$  Kyoto University.

(17) サラは東大に入学したけれども、ジョンは京大に入学した。

上記の英語の例が示している対比の意味を **Gapping** によって日本語で表現することはできない。それは、助動詞の「けれども」が常に動詞に接尾するので、前件の動詞を省略すると非文になるからである。このように、言語内の規則違反となる省略は実行されない。

(18)\*サラは東大に入学したけれども、ジョンは京大に入学した<sup>8</sup>。

さらに、以下の英語の例では **Gapping** による動詞の省略が可能となっている。それは助動詞 **do** の機能による英語の統語的特性によるものである。このような否定の構文では日本語の場合 **Gapping** による省略は不可能である。

(19) Max left for Rio, although Mary didn't <sub>VP</sub>e.

(Lightfoot 2006:53)

<sup>8</sup> 「サラは東大だけれども、ジョンは京大に入学した。」のようにした場合対比を示すことは可能である。



(20)メアリは出かけなかったにも関わらず、マックスはリオデジャネイロに出かけた<sup>9</sup>。

ペルシア語でもこの種の動詞の **Gapping** は、英語の **do** に対応する助動詞がないために、不可能である。

(21) *bā inke Maks be Riodozaniro raft, vali Mari na-raft.*

Although Maks to Rio went, but Mari NEG-went.

また、中国語でも **Gapping** が限られていることを Tang(2001)が報告している。

(22) \**Wo mai-le hongse de hua, ta lanse de.*

I buy-Perf red Mod flower he blue Mod

(I bought red flowers, and he blue flowers.)

(23) *Wo yao hongse de hua, ta lanse de.*

I want red Mod flower he blue Mod

(I want red flowers, and he blue flowers.)

(Tang 2001:206-7)

さらに、Marjorie(2005)はロシア語と英語の **Gapping** の現れ方に相違点があることを指摘している。

(24) *Мама попросила Мишу спеть, а отец ∅ — сыграть на гитаре.*

Mama **poprosila** **Mišu** spet', a otec ∅ — sygrat' na gitare.

\*Mom **asked** **Misha** to sing and Dad ∅ to play the guitar.

'Mom asked Misha to sing, and Dad asked Misha to play the guitar.'

(Marjorie 2005:139)

このように、言語における省略は多くの場合個別的であり、その言語の統語システムによって処理されることが分かる<sup>10</sup>。

<sup>9</sup> なお、「マックスはリオデジャネイロに出かけたが、マリはそうしなかった。」ならば「出かけた」の省略は可能となる。

<sup>10</sup> これらの規則はあくまでも生成文法でいう言語能力に基づくものであり、言語運用では Chomsky(1965)が指摘するように、話し言葉のデータはエラーやノイズによって結果が異なることが予想される。また、本来なら繰り返す必要のない、省略すべき類似事態は主張などによって

## 2.4. Gapping とは

Gapping とは、並列された構文の同一の動詞の中で、その一つを省略する処理プロセスである。Gapping は等位性があるからこそ初めて生じる現象である。したがって、Mary studies literature and John  $\emptyset$  linguistics は等位的で正しい構文であるが、Mary studies literature and John  $\emptyset$  riding bike は等位性がなく非文である。

言語によって Gapping は forward gapping (FG)であったり、backward gapping (BG)であったりする。「も」や ham による省略と同様、Gapping も任意的である。また、Gapping はテキストよりも会話で頻発する傾向が強い。以下英語の例を見てみよう。例えば以下の構文では reads が省略されている。

(25) John reads a newspaper.

(26) Maria reads a book.

(27) John reads a newspaper, Maria ( $\emptyset$ ) a book.

$\emptyset$  = reads

上記の例文からも分かるように、英語では FG が生じる。BG と FG の樹形図はそれぞれ以下の通りである。

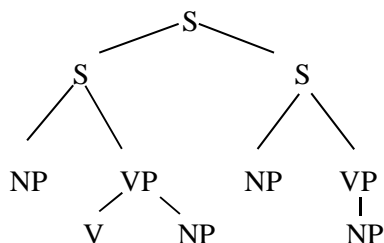


図 4. FG の樹形図

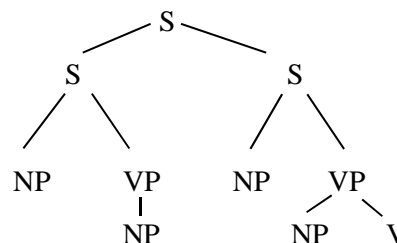


図 5. BG の樹形図

(Wesche 1995:26-7)

ほとんどの言語では一種類の Gapping しか許されない。上記の例からも分かるように、英語は FG が唯一可能な Gapping である。ペルシア語では基本的に FG であるが一致的な BG も可能である。日本語では BG しか許されない。

---

故意に符号化される場合もある。

(28) man čāy sefāreš dād-am dūst-am qahve.

I tea order gave-1sg friend coffee

(I ordered tea, and my friend coffee.)

(29)私は紅茶を，友達はコーヒーを注文した。

尚，第五章では日本語とペルシア語における Gapping についてさらに詳しく分析する。

## 2.5. 並列詞と類似事態との関係

類似事態の出現が省略を導くとともに，並列詞の生起にもかかわる。構文に現れる類似事態を繰り返すと効率性が低くなるので繰り返す必要のない要素が省略される。参照を表す「も」や ham のような並列詞は省略された要素を参照し，それを復元する機能を持つ。

このような機能語は省略と密接な関係にある。例えば，以下の例において Gapping と「も」の関係は明らかである。

(30)東京にも〇京都にも行きました。

省略なしの場合，上記の例は「東京に行きました。京都に行きました。」のような非効率的な構文となる。従って，上記のような例では Gapping が関わってくるのである<sup>11</sup>。

また，「も」や ham は前にあげられた情報を参照することによって，構文の理解プロセスを容易にする。談話では参照を示す「も」が生起することによって構文の多くの部分が省略されることがある。**2.3.2.** で挙げられた以下の例(12)を再度見られたい。

(12) A: 海に行きたいなあ。

B: 私も海に行きたい。

上記の例では B が「も」を持ち込むことによって A の発話を参照し，自らも同様な気持ちであることを示している。

---

<sup>11</sup> Gapping の詳細に関しては第五章を参照されたい。

### 3. 先行研究

日本語とペルシア語の並列方法に関する先行研究は皆無である。日本語とペルシア語の対照研究自体ほとんど例を見ない。本論文は日本語とペルシア語の構文並列に関する最初の研究である。そこで、本章ではまず言語一般における並列に関する先行研究に触れておきたい。

Mithun(1988) は諸言語における並列の仕組みや文法化を観察し、語彙や構文における様々な並列の方法を指摘している。Mithun は、言語における並列という現象が普遍的でありながらも、それぞれの言語がそれを異なった方法で文法化するとしている。また、一部の言語において並列詞がマークされないのに対して、他の言語ではそれが規則的に発展し、義務化されていると述べている。

Stassen(2003)は諸言語における並列を類型論的に捉え、世界の 260 言語を観察し、一部の言語では comitative strategy (共格を用いる並列方法) のみで並列が示されるのに対して、他の言語では coordinative strategy (等位的な並列方法) が用いられるとしている。Stassen(2003)は、coordinative strategy を持っている諸言語を And-Languages と名付け、comitative strategy, つまり共格を用いる諸言語を With-Languages としている。Stassen(2003)によると、And-Languages は数的に With-Languages の二倍にも上る。Stassen(2003)の類別では日本語は With-Languages に、ペルシア語は And-Languages に属している<sup>12</sup>。

表 1：共格を用いる並列方法と等位的な並列方法の相違点

COORDINATIVE STRATEGY	COMMITATIVE STRATEGY
NPs have same structural rank	NPs differ is structural rank
Unique coordinative partical	Unique commutative partical
NPs form a constituent	NPs do not form a constituent
Plural/dual agreement on verbs	Singular agreement on verbs

(Stassen 2000:21)

Gross(2002)は言語における並列の出現と進化に注目し、「並列」と「代名詞」の出現

---

<sup>12</sup> With-Languageである日本語では構文の接続に接続助詞の「て」が、名詞句の接続に接続助詞の「と」が用いられる。この「と」は基本的に名詞句の接続に用いられるが、限られた場面で構文の接続にもかかわることがある。なお、「と」の機能や意味について、豊田(1978.a), 豊田(1978.b), 豊田(1979), 豊田(1982), 豊田(1983)を参照されたい。

(1) 窓をあけると、寒い風が入る。

(豊田 1978.a:32)

によって言語の表現がスピードアップしたとしている。Gross(2002)のいう並列は二つの構文の統合と並列詞の導入，それに，類似事態の省略で可能になる<sup>13</sup>。

- (31.a) I drink tea.
- (31.b) I drink coffee.
- (31.c) I drink tea and I drink coffee.
- (31.d) I drink tea and ~~I drink~~ coffee.

(Gross 2002:48)

さらに，興味深いことに，Gross(2002)は一つの構文の中の名詞句の並列も二つの構文の統合と構造崩壊によってできたと論じている。そのような意味で，I like beer and wine. という構文は[I like beer]と[I like wine]のコンビネーション，類似する要素，like の省略と and の導入によってできたとしている。また，Haspelmath(2004)は言語における並列の仕組みを観察し，並列を以下の大きな枠に分類した。

- A) Syndetic (並列詞を用いた並列。並列詞使用)
- B) Asyndetic (並列詞を用いず，羅列で並列を示す。並列詞省略)

Haspelmath はさらに，並列詞使用を以下の二つに分類した。

- B-1) monosyndetic (一つの並列詞で並列を示す。並列詞一語使用)
- B-2) bisyndetic (二つの並列詞で並列を示す。並列詞二語使用)

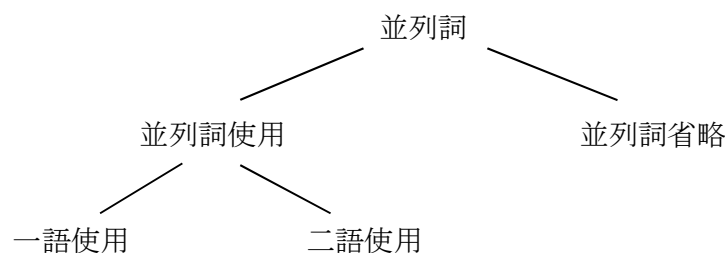


図 6. 並列詞の種類

<sup>13</sup> Coordination procedure (hypothesis):  
1) Combine: Combine two sentences and insert a coordinator.  
2) Collapse: Delete any element that is located between non-identical elements that bracket the coordinator if it is also present outside this bracket.

(Gross 2002:48)

また, Syndetic という並列詞を prepositive (並列する要素に前置される。前置並列詞) と postpositive (並列される要素に後置される。後置並列詞) に類別している。

表 2 : Haspelmath(2004)による諸言語における並列の仕組み

NP	VP	clause	English	
NP	AP	VP	Japanese	
NP	AP	VP	Chinese, Chechen	
NP	AP <sub>1</sub>	AP	VP <sub>2</sub>	Hausa

(Haspelmath 2004:9)

また, Wesche(1995)は言語における並列を以下のように種別している。

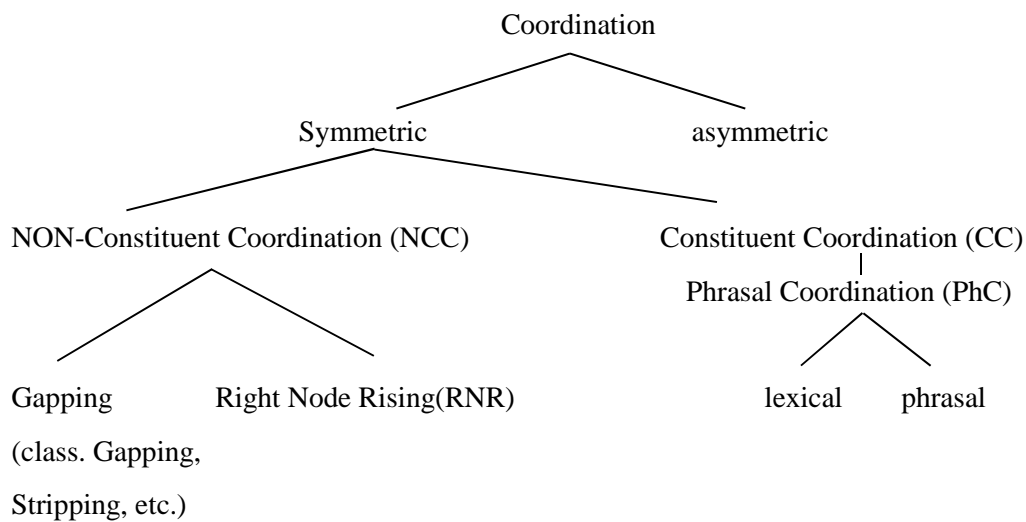


図 7. Coordination の種別

(Wesche 1995:16)

Wesche(1995)の種別では Left Node Rising は挙げられていないが, Yatabe(2001)は日本語では英語と対照的に Left Node Rising が生じるとしている。

中俣(2009)は日本語における並列表現を, 並列助詞, 接続助詞, 接続詞という三つの

異なる品詞カテゴリーに分け、コーパスを用いて「網羅的」かつ「体系的」な観点からそのつながりを明らかにしている。

ペルシア語の並列表現について体系的な研究を行ったのは Stilo(2004)である。

Stilo(2004)は西イラン語派のヴァフシュ語、ペルシア語やギラキ語における並列の研究を行い、それぞれの言語における並列の特徴を指摘している。

#### 4. 研究の意義に関して

ペルシア語と日本語に関しては、並列研究をはじめとして多くの分野でいまだ対照研究がおこなわれておらず、今後両言語の対照研究は双方の特性をより明らかにする一方、一般言語学や言語教育の分野にも貢献すると思われる。

また、諸言語を比較することの意義について角田(2009)のことばを引用する。

まず、言語普遍性を捜すには諸言語を比較しなければならない。そうしないと、或る特徴が世界の言語に共通のものであるか、ある言語に固有のものであるか、分からない。又、諸言語を比較してみると、ただ一つの言語を研究しているだけでは気が付かない法則性を発見することがある。(中略) 更に、他の諸言語と比較することによって、或る言語の特徴が浮かび上がって来る。

(角田 2009:1)

#### 5. 方法論

言語におけるある形態の本来の意味と役割を検討するには、その形態を統語論の枠組みだけではなく、意味論の枠組みからも検討する必要がある。それは、統語的に一つの役割をはたしているある要素には、場合によって二つ以上の意味役割があるからである。例えば、日本語における接続助詞「て」の意味を統括的にとらえるには「て」の統語的な機能をとらえるだけでは不十分であり、「て」の一つ一つの用法を確認して記述することが重要である。そこで、本論文では、並列詞を統語論からのアプローチとセマンティックスからのアプローチという二つの観点からとらえていきたい。術語の意味を明確にする必要があることから、本論文で扱う構文の並列にかかわるすべての機能語を「並列詞」と呼ぶ<sup>14</sup>。

---

<sup>14</sup> なお、この定義は、ペルシア語では構文の並列にかかわるゼロマーカ(∅)にも適用する。

統語論のアプローチから取り上げたのは Gapping である。Gapping は構文における動詞の省略であり、その生起にいくつかの規則が絡んでいる。Gapping に焦点を当てることによってそれぞれの言語内での処理の仕方の特徴が分かる。意味論の観点から取り上げたのは日本語の構文の並列に参与する「て」である。日本語の並列詞の中で「て」の使用頻度は極めて高く、意味のスコープも広い。また、意味論の観点から類似事態の出現において生起するペルシア語の連結詞 ham を取り上げ、日本語の「も」との対応関係を考察した。

## 6. 本論文の構成

第一章“序論”では本論文の枠組について述べ、用語の定義と説明を挙げ、本論文で扱う時系列的な現象としての、並列、省略の意味を説明した。また、日本語とペルシア語の構文の並列をどの範囲で扱うかについても説明し、並列に関する主な先行研究に触れた。さらに、並列によって言語に現れる類似事態や省略について説明し、三つの省略規則を挙げ、省略と並列詞の関係や省略に伴う Gapping の規則を紹介した。

また、本研究はペルシア語と日本語についての数少ない対照研究であり、ペルシア語を研究する日本の研究者からも、日本語を研究するイランの研究者からも参照される可能性があることを考え、第二章を設けた。第二章では、ペルシア語と日本語の基本的な構造や統語的な特徴、類型、表記、歴史について述べた。

第三章では日本語の「も」とペルシア語の ham との対照比較を行い、それぞれが指し示す意味範囲を把握するためにアンケートも用いた。ham は、構文の中で類似事態を指し示す「も」に対応する一方、並列を指し示す新たな構文を追加したり、補足したりするのにも用いられる。

第四章では日本語の意味がダイクシス的である並列の際、動詞につく接続助詞の「て」を取り上げてその意味と接続用法を挙げた。さらに、「て」の用法に対してペルシア語における使用頻度の高い3つの接続詞-o、 $\emptyset$ マーカ、ham の用法と意味を挙げ、それぞれが「て」のどの用法にどの範囲で対応するかを論じた。

第五章では、日本語とペルシア語の Gapping の仕組みを扱い、それぞれの言語における Gapping の制限と可能性を考察した。結論として、以下のことを強調したい。まず、ペルシア語では、原則としていかなる構文でも「抑制の力」を伴わない FG が網羅的に可能である。さらに、一致的な BG は元より、非一致的な BG も場合によって容認される。また、ペルシア語は単文では SOV であるが、複文や埋め込み文では SVO 的な特徴が強く、厳格な SOV ではない。したがって、FG が基本となっていると思われる。一方、



日本語の Gapping は厳格な BG であって、FG が一切容認されない。また日本語の V の活用には性や数に伴う変化がなく、人称による V の活用が限定的であることから非一致的な BG は生じにくい。

第五章では Gapping の現象をさらに分析し、ペルシア語や日本語における Gapping の現れ方の理由を追究した。ペルシア語における Gapping が主に FG である理由として、ペルシア語では動詞の上昇や人称が Gapping に関係していることが挙げられる。

第六章では、本論文で取り上げた章のまとめとして、日本語とペルシア語の構文並列の対照研究を扱った本論文がたどり着いた結論を述べた。

## **7. 本章の考察とまとめ**

本章ではこの研究で扱う概念や術語の説明を行った。また、本研究で対象としている構文の並列をどの枠組みの中で扱っているかを述べた。言語は時系列な現象であることから、発せられる構文が一つ一つ並列される。並列される構文では類似事態が出現する。繰り返す必要のない要素は省略される。並列詞と省略は共にこの現象にかかわる。また、この章では本研究の意義、方法論や構成について説明した。

## 第二章

### ペルシア語と日本語の構造概説

#### 1. ペルシア語の概説

##### 1.1. 系統と話されている環境

現代ペルシア語(زبان فارسی)はインド・ヨーロッパ語族, インド・イラン語派のイラン語に属する言語である。また, 現代ペルシア語はFarsi-ye dari (宮殿のペルシア語)とも呼ばれ, イラン, アフガニスタンやタジキスタンの公用語となっている。現代ペルシア語は中世ペルシア語<sup>1</sup>から, そして, 中世ペルシア語は9世紀まで古代イランの言語であった古代ペルシア語から派生している<sup>2</sup>。ペルシア語はそれぞれの国において, 相互理解の障害にならない程度に, 統語面・語彙面での方言的な相違が存在する。

なお, 現代ペルシア語はイランではペルシア語, アフガニスタンではダリー(دري), タジキスタンではタージーキー(تاجیکی)と呼ばれている。また, イランで話されているペルシア語にも主な方言としてイスファハーン方言, ヤズド方言, シーラーズ方言などがあるが, 本論文で扱っているペルシア語の例はすべてイランにおけるペルシア語の標準語としてのペルシア語テヘラン方言である。

##### 1.2. ペルシア語の歴史

現代ペルシア語は音声やシンタックスや語彙の面で中世ペルシア語と距離を置いている。また, 中世から現代にかけてアラビア語, トルコ語, モンゴル語, フランス語, 英語など諸言語からの多くの借用語がみられる。特に, 中世におけるイスラムの征服によって始まったアラビア語の影響が強い。現代ペルシア語におけるアラビア語の出現率は四割以上となっている<sup>3</sup>。

##### 1.3. 表記法

現代ペルシア語は, アラビア文字から取り入れた28文字と, それに欠けている四つの「پ (p)», 「چ (č)», 「ژ (z)» や「گ (g)» を追加して表記されている。<sup>4</sup>

---

<sup>1</sup> 中世ペルシア語は پهلوی (Pahlavi)とも呼ばれる。

<sup>2</sup> (1387) باقری (Bagheri)

<sup>3</sup> Jazayeri(1970)

<sup>4</sup> イランやアフガニスタンではアラビア文字, タジキスタンではキリル文字が使われている。

アラビア文字は主に子音を表記する文字であり、母音が表記されない場合もある。しかし、語の形がほとんど決まっており、語には表意文字的な特徴があることから母音表記がなくても外来語以外は語を正確にかつ速やかに読み取ることができる。母音が表記されない語で二通り以上の読み方がある場合、その意味から語の読み方を推測する必要がある。

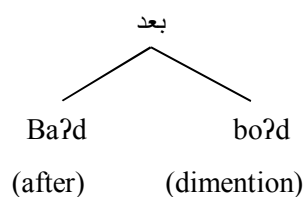


図1.

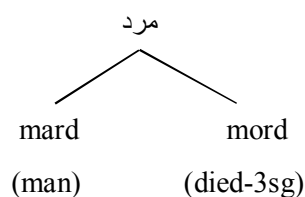


図2.

#### 1.4. 統語法

ペルシア語は屈折語(inflectional language)であり、現在や未来を表す(mi-)という接辞や未来を示す助動詞のxāh+人称代名詞が動詞の前に付く。また、動詞の現在形の子音・母音構成が過去形の子音・母音構成と異なる。

- |                            |                        |
|----------------------------|------------------------|
| (1) riz (pour- PRES STEM)  | rixt (pour-PAST STEM)  |
| (2) gūy (say- PRES STEM)   | goft (say- PAST STEM)  |
| (3) šenav (hear-PRES STEM) | šenid (hear-PAST STEM) |

また、ペルシア語では形容詞がほとんどの場合名詞の後に置かれるが名詞の前に生起する場合もある。以下、(4.b)のように、名詞の前に生起する場合、新たな語を形成する。

(4.a) mard-e bozorg.  
man-GEN great

(Great man)

(4.b) bozorgmard

great man

(Great man)

さらに、名詞を修飾する関係代名詞は英語と同様、名詞の後に置かれる。

(5) aks-e      Ali ke be-h-et nešān dād-am  
picture-GEN Ali which to you show gave-1sg  
(The picture of Ali which I showed you)

従来の伝統文法やLazard(1992), Taghvaipour(2004), Karimi(2005), Aghaei(2006), 吉枝(2011)などの先行研究では「ペルシア語は語順がSOV」とされている<sup>5</sup>。吉枝(2011:229)は、「単文の語順は日本語と同じで動詞は最後に置かれる」と述べている。

ペルシア語はSOV言語であり、主語には名詞(6), 代名詞(7), 数量詞(8), 不定詞(9)が生起する。

(6) Ali qazā miT-xor-ad  
Ali food PRES-eat-3sg.  
(Ali eats food.)

(Aghaei 2006:11)

(7) man xābid-am.  
I sleep-PAST-1sg.  
(I slept.)

(吉枝 2011:229)

(8) se kārgar kār mi-kon-and  
three workers work PRES-do-3pl.  
(Three workers are working.)

(Aghaei 2006:11)

(9) dars xānd-anT4T kar-eT5T ‘āsāni ‘ast  
lesson read-to job-EZ easy is-3sg.  
(Studying is an easy job to do.)

(ibid: 12)

しかし、ペルシア語のSOVという語順は厳格ではなく、特に会話ではかき混ぜ文がしばしば用いられる。Karimi(2005)はペルシア語のSOVという語順を認めながらも、かき

---

<sup>5</sup> Marashi(1970)はペルシア語の並列における最初の動詞を残して後の動詞を省略する Forward Gapping 現象に触れ、ペルシア語は SVO 言語と結論付けている。Darzi(1996)は「語順と Gapping の現れ方との間に関係がない」とし、Marashi(1970)の SVO 論を否定している。Darzi(1996)は SOV に反する用例を挙げながらも「どちらかと言えばペルシア語は SOV 言語だ」としている。

混ぜ文が多用されることに触れ、ペルシア語の語順について以下のように述べている。

ペルシア語では補文が動詞の目的語になる場合、補文は動詞の後に置かれるがそれ以外の場合、書き言葉では語順が厳格なSOVである。しかし、日常会話では配列の自由が優位的である<sup>6</sup>。

さらに、Lazard(1992)は「動詞が文の最後に生起する」という一般規則に触れ、規則からの逸脱もまれではないとしている<sup>7</sup>。ペルシア語の語順に関しては第五章でさらに詳しく述べる。

また、ペルシア語は空主語言語<sup>8</sup>(null subject language)であり、述語は常に名詞(句)の人称と数とが一致(agreement)しなければならない。動詞がすべての人称、つまり一人称、二人称、三人称×単数・複数の活用を示すことが主語省略を可能にする<sup>9</sup>。以下の表では定動詞に付く接尾辞を挙げる。

表1：ペルシア語の動詞による数と人称の活用語尾

	単数		複数	
	(present)	(past)	(present)	(past)
一人称	-am	-am	-im	-im
二人称	-i	-i	-id (in)	-id (in)
三人称	-ad	∅	-and (an) <sup>10</sup>	-and (an)

以下、raft (行くの過去の語幹) を用いてそれぞれの人称と数の活用を示す。

(10)raft-am	raft-i	raft-∅
I went	You went (2sg)	He went

<sup>6</sup> “Writing Persian exhibits a rigid SOV order, except sentential arguments of verb systematically appear in post-verbal position. The colloquial language, however allows a great degree of rearrangements.”

(Karimi 2005:3)

<sup>7</sup> “Deviations from the normal order are not rare, especially in colloquial; but they are not lacking, either in formal language.”

(Lazard 1992:208)

<sup>8</sup> このタームは千葉(1999)や荒木(2010)などでも用いられている。

<sup>9</sup> 過去形では、三人称単数がゼロマーカである。

(1) ū be madrase raft.

he to school went.

(He went to school.)

<sup>10</sup> 括弧の中の形態は会話で用いられる傾向が強い。

raft-im	raft-id(-in)	raft-an(d)
We went	You went (2pl)	They went

ペルシア語の助詞は基本的に前置詞だが、目的語の項を示す *rā* と本論文でも取り上げる並列詞の *ham* は名詞句に後置する<sup>11</sup>。

ペルシア語の単文では動詞が最後に生起することが一般的であるが、枠外配置の傾向も強く、埋め込み文では SVO となる。その場合、補文としての埋め込み文は連結詞 *ke* を伴い、*ke* 節が V の後に位置することになる。また、単文でも間接目的語の枠外配置や対格を後置した目的語の枠外配置もよくみられる<sup>12</sup>。

(11) Kimea az man xāhesh kard [CP ke nāme-hā-sh-o tāyp kon-am.]

K of me ask did-3sg that letter her *rā* type do-1sg  
(Kimea asked me to type her letter.)

(Karimi 2005:10)

## 2. 日本語の概説

### 2.1. 系統と話されている環境

日本語は約一億二千万人の母語話者を主に日本列島に有している。日本語の系統に関しては研究者の間で意見が一致しておらず、昨今論争が絶えない。多くの研究者により朝鮮語との類似点が指摘されている。角田(2009)では日本語の系統が「不明」とされている。一方、松本(2007)はタミル語と日本語の類似点を「偶然の一致」と見なし、大野(1995)の「タミル語と日本語の関係」論を全面的に否定している。松本(2007)は金田一(1938)に端を発した「日本語とアルタイ諸言語との共通点」を指摘する見解も否定し、朝鮮語、アイヌ語、ギリヤーク語からなる太平洋沿岸言語圏北方群との関係を強調している。芝(2008)は日本語の起源をアルタイ語、ドラヴィダ語、ポリネシ

<sup>11</sup> ペルシア語の対格(*accusative*)を表す形式は *rā* であり名詞(句)に後置される。*rā* は日常会話では *ro* や *o* になったりする。*rā* が後置される形態の最後の音が母音の場合 *ro*、子音の場合 *o* で生起する。

<sup>12</sup> 特に会話では SVO が頻繁に生起する。また、特にプロミネンスや主題化により語順の切り替えがみられる。

(1) A: *či-o dād-i be Ali?*  
what-ACC gave-2sg to Ali

(What did you give to Ali?)

B: *ketāb-o dād-am be Ali.*  
book-ACC give-1sg to Ali

(What I gave to Ali was the book.)

ア語という複数の言語の融合の結果であるとしている。

## 2.2. 日本語の歴史

日本語史はしばしば上代、中世、近世、現代に区分される。上代日本語の資料は『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』などに残されている。上代日本語を表記するために中国から導入された漢字音が用いられた。この文字は万葉仮名と呼ばれている。漢字を使うにつれ、平安時代に日本語独自の仮名が生まれた。

明治以降、西洋との接触によって新しい文化、思想に関する著作が翻訳され、数多くの和製漢語が生みだされた。「経済」、「文化」、「思想」、「心配」、「電話」などの語が明治時代に作られた。また、それまでに書き言葉と話し言葉がそれぞれ独自の発達を遂げてきたが、明治時代には言文一致が始まり、日本語は大きく変化した。

## 2.3. 表記法

現代日本語を表記するには漢字仮名交じりの表記法が使われている。漢字は表意文字だが、カタカナとひらがなは表音文字である。漢字を借用し、日本語に適用させて使用した表記法が、アラビア文字を借用して、そこに欠けている文字を付け加えて表記したペルシア語の場合と少し似通っている。漢字を取り入れたことで中国語の影響を強く受け、その結果日本語では漢語の同音異義語が数多く存在する。例えば、以下の(kyousei)は音声のみだと、少なくとも七つの意味が読み取れるのでどの意味が意図されるのか明らかではない。

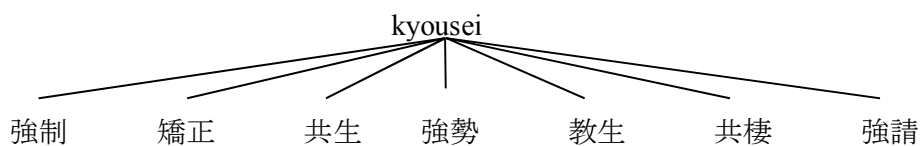


図 3.

漢字は5世紀に中国から取り入れられてから様々な変化を起こして今日に至っている。現在、日本語で用いられている漢字の意味と中国で用いられている漢字の意味との間には相違点が多い。



## 2.4. 統語法

日本語は単文、複文、埋め込み文でも一貫して SOV という語順を保ち、助詞は後置される<sup>13</sup>。以下 Miyagawa(2003)の例を挙げる。

- S            O            V
- (12) a. Zen'in-ga sono tesuto-o uke -nakat-ta (yo/to omou)  
all -NOM that test -ACC take-NEG-PAST  
“All did not take that test”  
\*not >> all, all >> not

- O            S            V
- (13) b. Sono tesuto-o<sub>i</sub> zen'in-ga t<sub>i</sub> uke -nakat-ta (yo/to omou)  
that test -ACC<sub>i</sub> all -NOM t<sub>i</sub> take-NEG-PAST  
“That test, all didn't take”  
not >> all, (all >> not)

(Miyagawa 2003:182-4)

また、かき混ぜ文では日本語の語順がかなり自由である。しかし、動詞が常に構文の最後に生起することは日本語の原則である。

- (14) a. John ga Mary ni Tom o syookaisita.  
b. John ga Tom o Mary ni syookaisita.  
c. Mary ni John ga Tom o syookaisita.  
d. ?Mary ni Tom o John ga syookaisita.  
e. Tom o John ga Mary ni syookaisita.  
f. ?Tom o Mary ni John ga syookaisita.

(Kuno 1978:57)

Kuno(1978)は会話では動詞以外の要素が動詞に後置されうることも指摘している。

- (15) a. Kimi (wa) kono hon (o) yonda ʔ.  
you (Theme) this book (Acc.) read

---

<sup>13</sup> Greenberg(1963), Ross(1970), Kuno(1978)

'Have you read this book?'

b. Kimi (wa) yonda ↗ kono hon (o) ↘.

you read this book

c. Yonda ↗ kimi (wa) kono hon (o) ↘.

read you this book

(Kuno 1978:58)

また、日本語は膠着語(agglutinative language)であり、述語の時制の変化は語幹の後に置かれる。インド・ヨーロッパ語にみられる人称や数、場合によっては性の区別による活用は日本語では見られないが、第五章で述べるように、述語と人称の一致が求められる場面も限定的ではあるが存在する。

例えば、澤西(2004)は「テイル形は基本的に三人称で用いられる形」だとしている。

(16)彼はその知らせを非常に喜んでいます。

(澤西 2004:25)

また、中崎(2006)は、「話し手主観性」と人称詞の関係性について、授受表現における以下の例を挙げている。

(17)あなたに助けてもらった。(いただいた)

(18)\*お前に助けていただいた。

(19)あの子にチョコレートを焼いてもらったのか (\*いただいたのか)

(20)彼女は君に助けてもらったそうだね (\*いただいたそうだね)

(中崎 2006:8)

さらに、益岡(2006)は「ほしい」、「寒い」、「痛い」のような日本語の感情形容詞は、人の内面の状態を表す点で主観性の強い表現だとし、「このような感情形容詞を述語とする文の主体は普通、1人称(疑問文では2人称)である。」と述べている。

(21)あなたは車がほしいですか？

(益岡 2006:21)

(22)? 太郎は車がほしい。

(ibid.)

表 2. 感情動詞と人称による制限

人称	ほしい
1	○
2	△ <sup>14</sup>
3	×

(Jahedzadeh 2013:57)

上記のような論拠に基づき、授受表現における人称の一致の要求が求められる非一致的な BG の例として以下のような例が挙げられる。例(24)では V が二つの S との一致を果たしていないので非文となる。

(23)? 私は車を，彼は自転車をほしがっている。

(24) \*彼は自転車を，私は車をほしがっている。

(25)? 誕生日に先生はチョコレートを，彼女はケーキをくれた。

ネイティブスピーカーにより、(24)は非文とされるが、(23)と(25)を認める人もいる。その理由として(24)では一致している要素同士がお互いに離れているからである。また、可能と見なされる(23)と(25)に関して、その理由として(23)では「彼」という S とその近くにある「ほしがっている」という V が、(25)では「彼女」という S と「くれた」という V が一致し、CCA 規則の「許可の力」が働いていることが挙げられる<sup>15</sup>。

<sup>14</sup> なお、疑問文では二人称も可能であることから△にした。

<sup>15</sup> また、文章や談話のスタイルによって適否に差異があると思われるが、本論文では談話や文章における動詞の問題を扱わないことにする。

表 3. 日本語における内外関係と敬語動詞の使用

対称	普通動詞	尊敬動詞	謙讓動詞
内	○	×	○
外	○	○	×

(ibid.)

また、表 4 からわかるように、人称による敬語動詞の使用にも制限があり、自分を含む「内」の人間に対しては尊敬語を、「外」の人間に対しては謙讓語を使うことができない。

### 3. 本章の考察とまとめ

本章ではペルシア語と日本語の構造を概説し、それぞれの話されている環境、歴史および表記法と統語論について述べた。ペルシア語の特徴として、SとVとの人称と数の一致、日本語の特徴として、授受表現におけるSとVの一致や感情動詞とSとの一致についても言及した。

## 第三章

### ペルシア語の ham (هم) と日本語の「も」の対照研究

#### 1. はじめに

ham はペルシア語の並列表現に、「も」は日本語の並列表現に頻繁に使われ、語と語、節と節、また文と文をつなぎ、談話の中で重要な役割を果たしている。本章ではペルシア語の連結詞(conjunction word)の ham と日本語の副助詞の「も」の対照研究を行った。本章の目的は、ham と「も」のそれぞれの並列の方法や出現するメカニズムの究明である。また、ham と「も」それぞれの共通点と相違点を明らかにし、それぞれの役割の範囲や制限を指摘することである<sup>1</sup>。

類似事態を指し示す ham と「も」はお互いにどこまで対応し合い、どこで異なるのか。また、それぞれが表す意味の範囲はどこまでかという疑問について考察を加えた。

序論でも述べたように、ham と「も」の二つとも類似事態の出現とそれに応じた省略プロセスに参加する語である。類似事態を参照し、省略された要素の復元を容易にする面では ham も「も」も同様な役割を果たしている。このような役割を英語では too, フランス語では aussi, トルコ語では de が担っている<sup>2</sup>。序論でも挙げられた次の例をもう一度参照されたい。「A: 海に行きたいなあ。B: 私も海に行きたい。」からもわかるように、参照を示す ham や「も」は VP を省略する。

#### 2. ペルシア語における ham の用法

ペルシア語の ham は、サンスクリット語の接頭辞 sam と同じ由来を持つ古代ペルシア語の接頭辞である。ham や sam に対応する接頭辞は、同じくインド・ヨーロッパ語族に属するギリシャ語では syn/sym, ラテン語では com/con であり、これらの接頭辞が、他の語と結合し、「共同」の意味を表す新たな語彙を作る点でも一致している。

<sup>1</sup> なお、現代ペルシア語では ham と平行して連結詞の「nīz」も用いられる。ham と比べ、その範囲も狭く本論文では扱わない。

<sup>2</sup> フランス語の例：(1) Michelle est partie? –Oui, Patrice aussi.

(ドルヌ 1995:153)

英語の例：(2) Did Michelle depart? – Yes! Patric did too.

トルコ語の例：(3) Mişel hareket ettimi? –Evet, Patrik de.

それぞれの言語での例を挙げると以下の通りである。

- (1)ペルシア語： hamapitā (兄弟)
- (2)サンスクリット語： samaka (同等)
- (3)ギリシャ語： symphōnīā (調和)
- (4)ラテン語： comparō (比較する)

古代ペルシア語では、ham はもっぱら接頭辞として使われていたが、現代ペルシア語の ham は、主に、「接頭辞」、「代名詞」、「連結詞」という三つの役割を果たしている。本章では、ham の「連結詞」としての用法を扱う。

表 1. 時代差による ham の用法

時代	古代ペルシア語	現代ペルシア語
ham の用法	接頭辞	接頭辞 代名詞 連結詞

### 3. ham の先行研究

ham についての先行研究には、کلباسی (Kalbasi)(1369)や ماهوتیان (Mahootian)(1378)がある<sup>3</sup>。しかし、これらの研究は ham を他の文法項目と一緒に扱い、詳しい分析を行っていない。

کلباسی (Kalbasi)(1369)は現代ペルシア語における ham が果たす幅広い役割について触れ、「累加」、「連結詞」、「強調」、「代名詞」としての用法を挙げている。

ماهوتیان (Mahootian)(1378)は ham の連結詞としての文法的な役割を挙げ、ham を用いてすべての名詞句を並列することが可能だとし、以下の例を挙げている。

(5) ham man va ham Iraj operā dūst dār-im.

too I and too Iraj opera like-1pl

(I and Iraj like opera.)

(ماهوتیان (Mahootian) 1378:83)

<sup>3</sup> なお、ペルシア語の資料に関しては、イラン歴をそのままを表記する。

しかし、ماهوتیان(Mahootian)(1378)の説は ham の「並列」や「累加」の役割についての記述にとどまっている。また、ペルシア語の百科事典 انوری(Anvari)(1383) では ham を「連結詞，接頭辞，累加や対照や強調に用いられる」と説明している。上記の ham についての先行研究をまとめると以下のようなになる。

### 3.1. 代名詞

ham の代名詞としての用法。

(6) har rūz     ham     rā     mibin-im.  
every day   each other ACC see-1pl  
(We meet each other every day.)

### 3.2. 接頭辞

接頭辞として他の名詞と結合し，新たな名詞を作る。

(7) ham + kār (work) → hamkār (colleague)

### 3.3. 並列詞

二つの名詞句を繋ぎ合わせるいわゆる二語並列詞として使用される。

(8) ham man va ham xāhara-m japoni mixān-im.  
too I and too sister-POSS Japanese study-1pl  
(My sister and I both learn Japanese.)

## 4. 本論文で指摘する ham の用法

本論文では、「連結詞」としての ham の四つの用法を指摘する。それらは、「基本的」「因果関係」，「補足」および「単純並列」の用法である<sup>4</sup>。ham の基本的用法は

4. 1. 「基本的 ham」において示されているように，前件と後件における類似事態を「関連性」に基づいて結び付ける用法であるが，ここでの「関連性」とは，前件，後件における二つの事態の間に，隣接性から生じる関係や，時間的な関係などがあ

---

<sup>4</sup> なお Jahedzadeh(2012)では「単純並列」の用法を「追加」と呼んでいた。



ることを意味する。しかし、「因果関係」、「補足」、「追加」という周辺の用法では前件の事態を参照し指し示す **ham** の基本的な意味とは異なり、「類似事態」は原因や含意といった「コト」である。以下、例を挙げながら詳しく分析していきたいと思う。

#### 4.1. 「基本的 ham」

#### 4.2. 「因果関係の ham」

前件の事態が原因やベースとなって、後件の事態が生じることを示す。

(9) mādar-am bā man davā kard. Man ham ġazā na-xord-am.

Mother-POSS with I quarreled I ? meal NEG-ate-1sg

(My mother quarreled with me, so I didn't eat my meal.)

(10) ū pūl-am rā pas nadād, Man ham šekāyat kard-am.

He money-POSS ACC back NEG-gave I ? sue did-1sg

(He didn't give my money back, so I sued him.)

ペルシア語における因果関係のマーカースとして、文頭に現れる *čon* (because) がある。「因果関係の **ham**」が多くの場合、*čon* とセットになって共起する。**ham** は常に二つ目の構文に現れ、最初の構文に生起することはない。

(11.a) A: čerā Ali ro zadi?

why Ali Acc beat-2sg

(Why did you beat Ali?)

(11.b) B: Ali be man tōhin kard, man ham zad-am-eš.

Ali to I insult did I ? beat-1sg-REF

(Ali insulted me, so I beat him.)

上でも述べたように、ある別の事態がきっかけになって「因果関係の **ham**」が生起することが常である。(11.b)ではきっかけになる事態が「アリに侮辱された」という事態である。同時に「因果関係の **ham**」が前の事態との関連を示している。

### 4.3. 「補足の ham」

前件への補足的な情報を含意する後件に生起する ham を「補足の ham」と呼ぶ。「補足の ham」が生起する後件は、前述の事態に関しての更なる情報と見なされる。

(12) emrūz be Tehrān barmigard-am. tanhā ham hast- am.

today to Tehran go back-1sg alone ? is-1sg

(I am going back to Tehran today alone.)

(13) sine-am dard mi-konad. xeyli ham dard mi-konad.

chest-POSS ache PRES-do much ? ache IPMF-do

(I have a terrible chest ache.)

たとえば、A という事態を描写する際、「補足の ham」が生起すれば、その文脈の中では、A について補足的な情報が提供される。これを図で示すと以下のようになる。

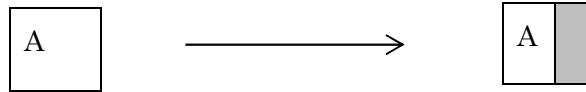


図 1. 「補足の ham」が同一の事態について補足的な情報を提供する。

### 4.4. 「単純並列の ham」

複数の構文を並列的に述べる際に生起し、構文の関連性を指し示す機能語である。

(14) man Tāhere hast-am, šōhar-am ham āqā karim-e. Īn ham doxtar Kūčik-am

I Tahere is-1sg husband-POSS ? Mr. Karim-is. This ? daughter little-POSS

Narges. Pesar-am ham ke kami xejalati-e esm-eš Mohammad-e rafte un otāq.

NargesSon-POSS ? that little shy-is name-POSS Mohammad-is has gone that room

(My name is Tahere, my husband is Karim. This is my little girl Narges. My son, who is a little bit shy, is Mohammad, and he is in that room.)

(15) man dār-am ketāb mixān-am. Ali ham dār-ad nāme mi-nevis-ad.

I have-1sg Book read-1sg. Ali ? have-3sg letter PRES-write-3sg

(I am reading a book, and Ali is writing a letter.)

ham が生起することによって、並列的な関係にある事態は互いに関係のある事態として描写される。

(16) man amū-yaš hast-am. išan ham pedar-ešān hast.

I uncle-POSS is-1sg he ? father-POSS is

(I am his uncle, and he is his father.)

(15)や(16)では ham を用いなくても二つの文を連続的に述べるのが不可能ではない。しかし、その場合、二つの文の関連性が薄くなり、それぞれ独立したコトになってしまう<sup>5</sup>。

以下の例では、複数の物（茶葉、ポット、砂糖）が存在する場所を共有していないにもかかわらず、最後の構文で ham が生起している。それは、並列的に述べられた構文が、互いに関係のあるまとまった事態であることを示している。

(17) čāy-e xošk tu qafase ast, qūri ru miz-e, šekar ham tu yaxčāl-e.

Tea of dry in cupboard is, pot over table-is sugar ? in Refrigerator-is

(Tea is in the shelf, the pot on the table, and sugar in the refrigerator.)

「単純並列の ham」が生起する条件として、複数の構文が並列すること、最初の構文とは生起しないこと、生起することで関連性が生まれる、などが挙げられる。

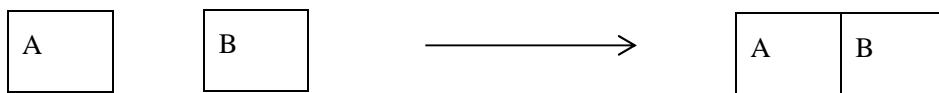


図2. 「単純並列の ham」が描写する事態

図2では A と B というそれぞれ独立した事態が、ham が生起することによって互いに関連を持つまとまった事態として把握される。

<sup>5</sup> 「並列詞省略 (Øマーカー)」によるイントネーションのみでの構文の並列が可能であるが、その場合、他の並列詞と組み合わせられて用いられることが多い。

(1) man amū-yaš hast-am. Ø išan pedar-ešān hast va in xānom ham mādar-eš-e.

I uncle-POSS is-1sg he father-POSS is and this lady ? mother-POSS-is

(I am his uncle, he is his father, and this lady is his mother.)

#### 4.5. ham の用法のまとめ

ペルシア語では類似事態を表すのが ham の中心的な用法である。先に述べられた先行するフレーズの中において参照される同じ要素が再度出現する場合に基本的な ham が生起し、その同じ要素は省略にもかかわる。しかし、周辺的な ham の場合、直接参照される同様な要素は先に述べられたフレーズの中には存在しない。つまり、周辺的な ham は類似事態を前述の事態との関連性の中で捉えて生起する。従って、中心的な ham の意味用法が拡張した結果、ham は周辺的な意味も表すようになったと考えられる。

- 1) 基本的な ham : 先述されたフレーズに参照される同様な要素が存在する。
- 2) 因果関係の ham : 前述の事態が原因やベースとなって、後述の事態が生じる。
- 3) 補足の ham : 前述の事態に関しての更なる情報である。
- 4) 単純並列の ham : 複数の構文を並列的に述べる際に生起する。

#### 5. 「も」の先行研究

「も」についてはこれまで多くの研究がなされているが、文脈での意味的な役割に従って定延(1995)および沼田(2009)が次のような分類を行っている。

定延(1995)は、心的プロセスからみた、「も」の意味の拡張を説明し、「も」を基本的な「も」、色々の「も」、通念の「も」、当たり前の「も」、意外の「も」、確定回避の「も」という 6 種類に分類している。

また、幅広い意味で用いられる「も」の性質を明確にするために「類似事態」という概念を用いている。「類似事態」というのは後続文脈における同様な事態の存在である。例えば、(18)では「田中が来る」が言表事態であり、「佐藤も来る」が類似事態である。

(18)田中が来る。佐藤も来る。

沼田(2009)は、「も」を大きく累加、意外および和らげの三つに分類し、「自者・他者」というタームを用いて「も」の意味を説明している。

沼田(2009)が「自者」としているものは定延(1995)の「類似事態」に似ている。つまり、例 (18) を沼田(2009)のタームで説明すれば、「田中が来る」が他者、「佐藤も来る」が自者に当たるのである。

「も」の周辺的な用法を扱った先行研究には、田野村(1991)、澤田(2004)、中尾(2008)、岡野(2010)がある。これらの先行研究で指摘されているのは「周辺的な用法」のそれぞれが異なる理由で「基本的な用法」と関係していることである。「周辺的な用法」を Comrie(1976)は以下のように定義している<sup>6</sup>。

ある形態に一つ以上の意味がある場合、普通その中の一つは中心的、且つ典型的である。この場合、中心的な意味を基本的な意味と解釈してよいであろう<sup>7</sup>。

Comrie(1976)の指摘する「二つ以上の意味」を ham も「も」も持っている。ただし、その「中心的な意味」が、いかに「周辺的な意味」とつながるのか、またその類似点は何なのかは重要な問題である。

以下、周辺的な用法を指摘している二つの先行研究の結論を紹介する。中尾(2008)は、「も」の周辺的な用法を大きく「典型例表示のモ」、「潜在的意識活性化のモ」、「解釈のモ」に三分類し、それぞれの用法と「基本のモ」との関係の説明し、「典型例表示のモ」は非典型的な例も想定させつつ典型例を示すため、「潜在的意識活性化のモ」は一般則と当該事態の合致関係を示すため、そして、「解釈のモ」は別様の解釈の可能性を暗ににおわせつつ語るために用いられている、つまり、それぞれが異なる理由で「基本のモ」と関係している、と結論付けている。

岡野(2010)は以下の例を挙げ、周辺的な「も」の説明を行っている。

(19)－先ほどの女性も怪しいもんですね。

－あれは違うよ。君もしつこいな。

(岡野 2010:3)

話者は発話場面において『先ほどの女性も怪しいもんですね』と言う、すべての人はしつこい」という評価基準を持ち、これに合致した「君」を「しつこい」と評価している。そこで(中略)厳密に表せば、「発話場面において『先ほどの女性も怪しいもんですね』と言う、君もしつこいな」となる。

(ibid.)

---

<sup>6</sup> 日本語訳は筆者が付けたものである。

<sup>7</sup> “When a form is to have more than one meaning, it is often the case that one of these meanings seems more central, more typical than the others. In such cases, it is usual to speak of this central meaning as the basic meaning.”

(Comrie 1976:11)

岡野(2010)の説明からもやはり「も」の使用にはなんらかの形で参照可能な類似事態が先行する構文にある,つまり参照される前例の要素の存在が窺える。しかし,その要素が音声言語になったものではないようである。

## 6. ham と「も」の基本的と周辺的な意味の場合

「も」は同様の述語や動詞を共有するという前件と後件の明確な類似性を求める。ham と「も」の基本的・周辺的な用法を見分けるのに以下の方式を立てるのが分かりやすいであろう。

(20) A は X。 B も X。 (基本的) X を共有して類似性がある。

(21) A は X。 B も Y。 (周辺の) 関連性があるが類似性がない。

(20)では X という参照可能な類似事態が先行する構文にあることから「B も X」という方式が自然に成り立つ。しかし, (21)では先行する構文に Y が参照可能な類似事態がないままで「B も Y」となっている。沼田(2009)のタームを借りれば, ham も「も」も, 基本的な用法では「他者」も「自者」も明確である。その「他者」が明確に存在せず, 自者が単独に現れるのは, それぞれの「周辺的な用法」に当たる。もし, ham と「も」の基本的・周辺的な用法が同様な方式で作られるのであれば, その共通点と相違点は何なのか興味深い問題である。

## 7. ham と「も」の対応

上述したように, 類似事態を参照する基本的な意味で「も」と対応するペルシア語の形式は ham である。

(22) Ali ham ketāb mixān-ad.

Ali too book PRES-read-3sg

(アリも本を読む／読んでいる)

(23) ham man ham Ali ketāb mi-xān-im.

too I too Ali book PRES-read-1pl

(私もアリも本を読む／読んでいる)

基本的な意味は, 類似事態が先述され, 参照する要素が存在する。しかし, 否定

文では基本的な意味の「～も～も V NEG」に対応するペルシア語の形式が *na~V*, *na~(V)*(24)で、全部肯定文の場合 *har~*(25), 全部否定文では *hič~*(26)である。

(24)彼も私も分からない。

(*na man mi-dān-am na u.*)

(25)このことはだれでもできる。

(*har kasi mi-tavān-ad in kār rā anjām dah-ad.*)

(26)このことはだれにもできない。

(*hič kasi in kār rā na-mi-tavān-ad anjām dah-ad.*)

これは、ペルシア語では *na* が動詞を否定にせず、命題を否定にするが、日本語では動詞が否定形になるからである。つまり、「も」は否定形に参与し、*ham* が参与しないということは、二つの語の統合的なステータスがそれぞれの言語では異なることを意味している。以下、「も」の様々な用法に対する *ham* の対応を見てみたい。

表 2. *ham* が対応する「も」の用法 (定延(1995)による分類)

	「も」の用法	<i>ham</i>	例文
基本的	「も」	○	太郎が来た。次郎も来た。 Tāro āmad. Jiro <u>ham</u> āmad.
周	意外の「も」	○	猿も木から落ちる。 meymun <u>ham</u> az deraxt mioftad.
	通念の「も」	○	春も半ばを過ぎました。 bahār <u>ham</u> az nime gozašt.
的	色々の「も」	○	その日は天気もよかったので講演は賑わっていた。 An ruz čon hava <u>ham</u> xūb būd park šulūg būd.
	当たり前の「も」	○	—ああ目が疲れた。 —一日中パソコンの画面を見たら目も疲れるだろう。 -ax češmam dard gereft! -hameye ruz o zol bezani be safheye kampioter češm <u>ham</u> dard migire!
	確定回避の「も」	×	あの時、学生は 30 人も来た。 ān mōqe 30 nafar āmad-and.

表2からもわかるように、ham は確定回避の「も」以外に、他の「も」の用法に対応しているのである。ペルシア語では対応形式のない確定回避の「も」をあえて表現するのであれば、ham を用いての表現は不可能であるから、例(27)のように文脈で表現することになる。

(27) ān mōqe āmadan-e si nafar dūr az entezār būd.

that time to come-GEN thirty person far from expect was

(あの時、学生が30人も来たことは予想外だった。)

しかし、後に述べるように、ほとんどの場合、対応したとしても、ham や「も」が生起するにもかかわらず、それぞれの要求する条件が異なる。

表3.hamの周辺的な用法

	ペルシア語 の形式	「も」 の用法	例文
周 辺 的	補足の ham	×	emrūz be tehran barmigard-am. Tanhā <u>ham</u> hast-am. 今晚テヘランに帰る。しかも一人で帰る。
	単純並列の ham	×	man amū-yaš hast-am. išān <u>ham</u> pedar-ešān hast. 私は彼の叔父で、この方は彼の父だ。
	因果関係 の ham	×	mādar-am bā man davā kard. Man <u>ham</u> ġazā naxord-am. お母さんが私と喧嘩したので、ご飯は食べなかった。

「も」と ham の基本的・周辺的な用法を対照することによって分かったことは主に以下の三つである。

第一に、「も」の基本的な用法に ham の基本的な用法が対応する。第二に、周辺的な用法では部分的に対応し合う。具体的に言えば、周辺的な用法では ham の場合直接参照できる要素が存在しなくても生起する。一方、「も」が生起するためには、参照する要素の存在が ham と比べて強く求められると言える。また、第三に、周辺的な用法では ham と「も」が対応し合わない場合、他の文法形式または語彙的な表現が用いられる。



## 8. 類似事態による「も」の生起

類似事態による「も」の生起に関するメカニズムはいかなるものであるかを調べるため、日本語母語話者に対してアンケートを取った<sup>8</sup>。

ham が生起する構文または談話を日本語に訳し、元のペルシア語の構文で ham が出現する部分を選択式の（「は」、「が」、「も」）にし、その中から「文脈にふさわしい助詞に丸を付け」てもらった。

回答者には「可能な限りの場面を想像し、幾つでも選択」するように説明した。51 人から回答を得た。アンケートの結果は以下の通りである。

### 8.1. 「補足の ham」の場合

(28)今まであまり病気になったことがないです。薬（は／が／も 30）あまり飲まないです。

(29)今、一人で生活しています。結婚（は／が／も 13）していません。

(30)そのとき、死にたいと思った。しかし、死ぬ勇氣（は／が／も 15）なかった。

### 8.2. 「因果関係の ham」の場合

(31)最近彼のほうから連絡がないので私（は／が／も 39）あえて連絡しません。

(32)お月様が言った「魚ちゃんよ、実は、私は自ら光りません。太陽が光をくれるんです。私（は／が／も 7）その光を地球に反射させるんです。

(33)彼がお金を返してくれなかったので、私（は／が／も 1）訴えました。

### 8.3. 「単純並列の ham」の場合

(34)私はケバーブのほうがいいわ。前菜（は／が／も 5）大麦のスープとサラダにしよう。

(35)私はタヘレで、夫はキャリームです。この子は次女のナルゲスです。それから恥かしがりやの息子のモハammad（は／が／も 17）その部屋にいます。

(36)私はアリ君の叔父です。こちら（は／が／も 0）アリ君の父です。

---

<sup>8</sup> アンケートは 2010 年 11 月から 2011 年 2 月まで近畿・中部地方で成人を対象に行ったもので、回答者の出身地を問わなかった。

アンケートを通してわかったことは、それぞれの文脈での「類似事態」の具体性や抽象度に従って「も」の使用度が増減することである。例えば、「補足」の ham の場合、例(28)と(29)では「も」の使用度は大きく異なっている。(28)に比べ(29)における「も」の使用度が減少するのは、その文脈に含まれる「類似事態」の明確度および抽象度というファクターと関連していると思われる。

「因果関係」の ham の場合、「も」が現れる文脈によって「も」の使用度のギャップが大きい。例(31)では 39 人が「も」を選択しているものの、例(33)では「も」を選んだ人は一人しかいない。例(31)では、前件、後件の述語に「連絡」という共通する語が入っていることから、回答者には明確な「類似事態」の存在が浮かび上がったことが推察可能である。

さらに、「単純並列」の ham の場合も「も」の選択が文脈によって大きく異なる。例 (35) で「も」が 17 人もの回答者によって選択されたのは、この談話の中における「モハメドも家族の一人」という抽象的な「類似性」に起因すると思われる<sup>9</sup>。

このように、ham との生起とは無関係に、文脈で「類似事態」が明確なほど、「も」の使用度が増し、「類似事態」が確認しにくいほど、「も」の使用度が減るのである。

以下、図 3 では、「類似事態」の出現と欠如による「も」の使用度の関係を示す。

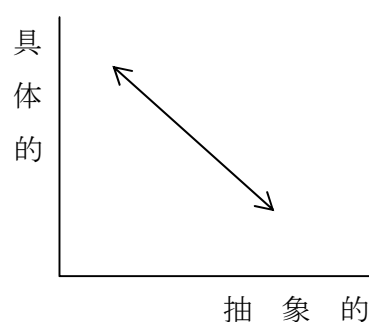


図 3. 「類似事態」の具体性および抽象性による「も」の使用度

(Jahedzadeh 2012:129)

<sup>9</sup> しかし、回答者が何を「類似事態」にしたかという大きな課題がまだ残る。構文の中の述語、名詞、形容詞、副詞などに参照される要素があればそれらが「類似事態」として捉えられる可能性も否定できない。

## 9. 本章の考察とまとめ

本章ではペルシア語の **ham** と日本語の「も」の対照比較を行い、それぞれの基本的・周辺の意味を対照した上で、構文に出現するメカニズムを探った。

対照比較によって、**ham** と「も」が部分的に対応し合うことが分かった。両者は省略のプロセスに参加し、参照を表す基本的な意味では役割が対応している。しかし、周辺の意味ではそれぞれの役割にずれがあることを示した。例えば、数量詞の後に生起する「確定回避」の「も」に **ham** は対応しない。さらに、**ham** には「因果関係」、「補足」、「単純並列」の用法があり、「も」が対応しないことが明らかになった。

また、**ham** と異なり、「も」の生起が無意識に「類似事態」に左右され、**ham** が生起するのに、「類似事態」の有無という制限がかからないことがアンケートを通して明らかとなった。つまり、「も」の取る「類似性」と **ham** の取る「類似性」の範囲に差異がある。「も」は同様の述語や動詞を共有するという前件と後件の明確な類似性を求める。これは、**ham** の範囲が「も」より広いということを示していると思われる。また、否定形では **ham** が出現せず、それぞれの統語的なステータスが異なるという点を指摘した。

## 第四章

### 「て」の並列方法とそれに対応するペルシア語の用法

#### 1. はじめに

本章では日本語の接続助詞である「て」<sup>1</sup>の意味用法および統語的な役割について考察を行う。さらに、日本語では構文における接続の役割を果たしている「て」の意味用法および統語的役割がペルシア語ではどのような意味用法および統語的な役割に対応するのかを考えてみる。

また、否定文における並列についても考察を行い、「て」が生起するのは肯定文・肯定文の並列と、肯定文・否定文の並列であるとする。「て」が構文のみの並列に用いられ、表す意味の範囲が広く、一方ペルシア語では「て」の表す意味をいくつかの要素が部分的に表している。

「て」は動詞の活用において用いられ、構文と構文の並列表現の役割を果たす助詞であり、日本語において使用頻度の高い形式である。「て」は「前の節と後ろの節をゆるやかに結びつけるのに用い」<sup>2</sup>られ、多くの意味を表している。また、「て」はその意味用法が幅広いことから、日本語教育において、習得しにくい文法項目の一つだと考えられている。日本語母語話者と比べ、日本語学習者の「て」形接続の予測がうまくいかないということも報告されている<sup>3</sup>。「て」そのものにはもちろん意味がなく、つなぎ合わ

---

<sup>1</sup> 「て」の異形態に「で」がある。名詞や形容動詞の場合、断定の「で」の形をとる。また、子音動詞連用形語尾が鼻音の「-n, -m, -b」の時は「で」になる。また、イ形容詞の場合「くて」、否定形では「なくて」または「ないで」の二つの形がある。本発表ではすべてを一貫して「て」と呼ぶ。

<sup>2</sup> グループ・ジャマシイ(1998)

<sup>3</sup> 松浦(1996)は日本語母語話者と日本語学習者の予測能力の一端を明らかにするために、テレビニュース文をテ形接続まで聞かせて後続部分を予測させる調査を行っている。調査の結果、日本語学習者の得点の平均が日本語母語話者のそれより低いことが分かっている。50ページの脚注の図を参照されたい。松浦(1996)の調査は、テ形の習得が意味内容の理解などの言語知識とも関係しており、そのような言語的要素と絡んだテ形の習得の難しさを浮き彫りにしている。

される構文において意味が生じることから、「て」はダイクシス的である。

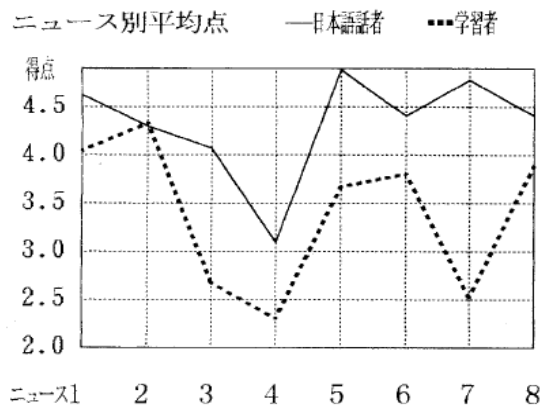
「て」は、下記の例にもみられるように、それ自体には意味がなく、前後する文脈によりその意味が異なって解釈される。

- (1)あわてて茶碗を落としてしまいました。(因果関係)
- (2)時間がなかったのであわてて会社に駆けつけました。(付帯状態)

第三章では「も」と ham が VP の省略にかかわることを述べた。「て」によって前後の構文が繋ぎ合わされると、前の構文の主語や主題、目的語が後の構文では省略される。「母はおせち料理を作って母はおせち料理を食卓に並べた」からも分かるように、二つ目の構文では主語と目的語が省略されている<sup>4</sup>。この種の省略は構文の並列によって生じるのであり、「母はおせち料理を作り、母はおせち料理を食卓に並べた」からも分かるように連用詞でも同様である。

先行研究では「て」の意味が 8 種類以上にも分類されることがある<sup>5</sup>。本論文では、まず、先行研究で取り上げられた「て」をめぐる用法と意味の整理を行い、「て」による日本語の構文の意味範囲を明確にしたい。また、先行研究でほとんど論議されていない「て」の様々な用法の「否定」形についても考察を行いたい。

さらに、ペルシア語の構文において意味的に最も「て」に対応する 3 つの最もプロト



(松浦 1996:48)

<sup>4</sup> なお、「て」による省略は強制的であり、任意的ではない。つまり、強制的な省略は復元された場合非文になる。「て」による省略は同一主語の場合生じ、目的語の代わりに、代名詞の「それ」が用いられることもある。また、同様な省略は連用形でも生じる。

(1)\*母はおせち料理を作って母はおせち料理を食卓に並べた

(2)母はおせち料理を作ってそれを食卓に並べた。

<sup>5</sup> 遠藤(1982)は 11 種類の手段・方法、様態、同時進行、継起関係、付帯状態、因果関係、評価、逆接、並列・累加、並列・対比、意味不明に分類している。

典型的な接続詞である-o(va), Øマーカ、ham を挙げ、それぞれの接続方法と表す意味範囲を明らかにしたい<sup>6</sup>。その上で、日本語における「て」が担う接続・意味用法はペルシア語でどのように示されるかを検討したい。系統的に異なっている両言語の構文の接続方法を見ることにより、それぞれの言語の並列方法がより鮮明に見えてくると思われる。

## 2. 「て」に関する主な先行研究

「て」の意味用法や統語的な役割については様々な研究がなされてきている。一部の研究では「て」の「最も普遍的と思われる意味用法」<sup>7</sup>として、「付帯状態」, 「継起用法」, 「因果用法」, 「並列用法」が取り上げられ論議されている<sup>8</sup>。以下は、「て」に関する主な研究である。

時枝(1954)は「て」は表現を中絶させる機能をもつものであり、「夜は暗くして, 道は遠し」(時枝 1954:249)のように、並列格を構成する場合と「雨降りて, 地固まる」(ibid.)のように条件格を構成する場合とがあると述べている。

森田(1980)は「て」を「ある叙述から次の叙述へと移る時の橋渡しとして用いられる繋ぎの語」とし、以下の8種類、つまり並列, 対比, 同時進行, 順序, 原因・理由, 手段・方法, 逆接, 結果の用法に分類している。

遠藤(1982)は「て」の意味を11種類、つまり手段・方法, 様態, 同時進行, 継起関係, 付帯状態, 因果関係, 評価, 逆接, 並列・累加, 並列・対比, 意味不明に分けている。さらに、その中の文法上共通点が多い用法をまとめて以下の3種類に大別している。

益岡・田窪(1992)は並列を順接的並列と逆接的並列に分けている。順接的並列とは、並列節が主節と対立することなく、単純に並ぶ関係にあるものを、逆接的並列とは、並列節と主節が互いに対立する関係にあるものだとしている。さらに、順接的並列には、総記の並列, 例示の並列, 累加の並列があり、接続の形式には主として、「述語の連用形とテ形」があるとしている。

<sup>6</sup> なお、本発表では「として」, 「について」, 「にしたがって」などのような複合助詞や、「てみる」, 「てやる」, 「てもら」, 「てみせる」などのような複合動詞にかかわる「て」を扱わない。

<sup>7</sup> 吉永(2012)

<sup>8</sup> 加藤(1995), 仁田(1995), 内丸(2006), 三原(2009), 吉永(2012)ではこの4種類のみ取り上げられている。

表 1. 遠藤(1982)による「て」の用法による分類

副詞的役割	論理的推移	文法的・意味的同じ重み
手段・方法	継起関係	並列・累加
様態	付帯状態	並列・対比
同時進行	因果関係	意味不明
	評価	
	逆接	

益岡・田窪(1992)は、連用形並列が文語的、テ形並列が口語的で「時間的前後関係の意味が出やすい」と述べている。

仁田(1995)は「シテ」形接続の用法を節の従属度の高い順に大きく「付帯状態」、「継起」や「並列」の3種類に分ける。また、「継起」を「時間的継起」と「起因的継起」に下位分類し、それぞれのタイプの特徴、それらの実現する条件やつながりと移り行きに焦点を当てている。さらに「付帯状態」の従属度の低い節を「より副詞化したもの」として挙げている。

内丸(2006)は先行する記述的研究から得られた成果を出発点とし、生成文法の観点から「て」の統語的な分析を行っている。また、テストを行って、①付帯状態を表す「て」形節は、他の継起、原因・理由や並列の「て」形節とは異なる統語構造をとる、②テストから継起、原因・理由、並列を表すテ形節は同一の統語構造をとる、と述べている。

吉田(2011)は「て」を a.並列, b.対比, c.付帯状態, d.先行, e.手段, f.原因・理由, g.逆接, h.結果の8種類に分類し、文脈による意味のずれを指摘している。吉田は、様々な用法が生起するためのファクターを述べ、その中で「付帯状態」は「並列」、「時間的継起」「起因的継起」さらには「副詞」とも境界を接している、「いわば『ファジー』な性格を持って」(吉田 2011:58)おり、動詞によって「付帯状態」の「て」の指し示す意味が異なってくるとしている。さらに、連用形と「て」形を比較し、連用形を選ぶか、「て」形を選ぶかは「同じ形の連続は美しくないという修辭的なセンスによって決められる場合もあろう」(吉田 2011:26)とする。また、様々な用法は結局文脈による解釈の結果にすぎないと結論付けている。

吉永(2012)は「て」の「最も普遍的と思われる意味用法」として、「付帯状態」,「継起用法」,「因果用法」,「並列用法」を挙げそれらの意味を説明し,テの持つ時間性と接続性の両機能,即ち近い過去としてのテンスマーカと接続助詞的な膠着性の両面が,テ形接続の各用法に現れており,それぞれの中核的な意味において二つの「並列」タイプと「先後」タイプに整理できるとしている。

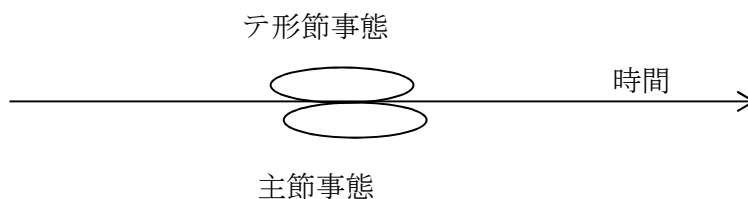


図 1. 吉永(2012)の提唱した「並列」タイプ



図 2. 吉永(2012)の提唱した「先後」タイプ

(吉永 2012:119)

### 3. 「て」の意味

上記先行研究は「て」の様々な意味の間にあるわずかな違いをとらえようとして詳細な分類を行っているものもあるが(特に遠藤(1982)),お互いに若干の差異があるものの,その主な用法を主に以下の8種類にまとめることが可能である。

#### 3.1. 付帯状態

前件と後件が同時に起きていることをあらわす。動詞の種類によって他の用法に移行しやすい。「～した状態」で他の行為を行うことや、「ながら」の意味を表す場合が多い。

- (3)時間がなかったのであわててて会社に駆けつけた。
- (4)酔って書いたブログは,翌日読むと恥ずかしい。
- (5)首からカメラをぶら下げてて散歩に行った。

吉永(2012)は先行研究も踏まえ,「て」形について以下のように述べている。



「主節の内容を付帯状況的に修飾・説明するという用法は、前述の様にテの持つ膠着的な性格と時間的な緊密性によるものと判断され、多くの研究が一致して挙げている事は、前後節の主語や時間の一致である。」

(吉永 2012:114)

また、吉田(2011)や吉永(2012)が指摘しているように、「付帯状態」の「て」と他の用法の境があいまいな場合があり、このように「て」はダイクシスの用法では、文脈によって意味が異なる。例えば、以下の例は「付帯状態」とも「継起・順序」とも解釈できる。

(6)お父さんが笑ってて答えた。

(7)グリル野菜は、黒オリーブを付けてて食べてもおいしい。

例(6)は「お父さんが笑ってから答えた」とも「お父さんが笑いながら」答えたとも解釈できる。また、例(7)を「グリル野菜は、黒オリーブを付けてから食べる。」という継起の順番として捉える解釈も可能である。

また「て」の「付帯状態」の用法の中で副詞化したものも多く、この用法はほとんどの先行研究において指摘されている。

(8)慎吾がだまってて水を汲んできた。

(仁田 1995:103)

(9)太郎は歩いてて学校に行く。

(吉永 2012:113)

### 3.2. 因果関係

「て」形節が原因・理由になって主節事態が生じる。また、論理的な関係にある前後節は入れ替え不可能である。森田(1980)によれば、「て」による原因・理由説明は「ので」などとは異なり、はなはだ情的なあいまいな説明法である。

(10)注射を打って死んだ。 { 自殺..... (手段)  
事故死.... (原因)

(11)注射を打ってもらって

{	治した.... (手段・方法)
	治った.... (原因・理由)

(森田 1980:318)

例(10)は手段・方法と原因・理由という二つの解釈が可能である。また(11)では最後の動詞によって「て」の意味が異なってくる。

また、吉田(2011)によると、動詞が意志的な動作を表すのか、それとも非意志的な動作を表すのかによって「て」の指し示す意味が異なってくる。意志的な動作では「て」が手段を、非意志的な動作では原因を示す。

(12)屋根から飛び降りて死んだ。(手段)

(13)屋根から落ちて死んだ。(原因)

「テ形節や主節が無意志動詞や心理表現、状態述語などの場合には、因果解釈が強くなる」と(吉永 2012:115)も同様な指摘をしている。

(14)木の実はだんだん重くなって落ちて来ました。

(15)その俳優は映画の主演が決まって有名になった。

(ibid.)

時間的前後関係があっても、無意志的事態の連続の場合は意志制御されないので、事態連続の解釈は積極的な動作連続ではなく、「～の結果、～になった。」という因果的事態連続のほうが優勢となる。また、心理・感覚的な事態も因果解釈に傾きやすい。

(16)子供たちは喜んで、走り回った。

(17)大きな音でドアが閉まって、びっくりした。

(ibid: 116)

さらに、「て」の「因果関係」の用法では「て」節と主節の主語が同一でも異なっても構文が成り立つ。

(18)新幹線が止まって出張できなくなった。

(19)朝寝坊して学校に遅れた。

### 3.3. 継起・順序

後件が前件に次いで起きる場合の用法で、「て」の頻繁に出現する用法の一つである。また、前件が、時間的な関係の中で後件より先に生じたという意味を表している。

(20)弁当を作って売った。

(21)朝起きて、朝ご飯を食べて会社に向かった。

(22)食べて寝ると牛になる。

(23)こぼれたリンゴを集めて袋に入れた。

例(20)は、弁当を作ってから売ったという意味であり、売る行為は作る前に生じることはありえない。さらに、例(21)、例(22)と例(23)でも、前件と後件が時間的に起きた順番によって並べられていることが伺える。

### 3.4. 並列

前件と後件の構文の統語的なつながりを担い、意味論的に特別な意味を持たない。つまり、二つの事柄は同時に述べられないことから、それらが前後するのは言語の線条的な特徴に由来する<sup>9</sup>。

(24.a)雅子がピアノを弾いて明子が歌を歌った。

(吉永 2012:113)

(25.a)新しく出来た商業施設の品物は目新しいものが多くて、値段が安い。

(吉永 2012:118)

---

<sup>9</sup> 線条性は言語にとって宿命的な制約だが、言語は現実の世界をそのまま反映させ表現するのみではない。例えば、「図書館に行って新聞を読んだ。」は出来事の順序と表現の順序が同様だが「図書館に行く前に新聞を読んだ。」のように実際の出来事の順序と違う順序での表現も可能である。このように、何を並列して述べるかによって「て」の指し示す意味が異なる。時間軸に沿って生じる事柄の表現は「継起・順序」、一定の時間内に生じるか、あるいは存在する事柄の表現は「並列」の用法になる。

「て」が生起することによって、上記の例では前件と後件の構文がつながれている。並列の「て」の特徴として、「て」節と主節が時間的または論理的な関係によって結び付けられていないことから、前後の構文を入れ替えても両方の意味に変化が生じないことが挙げられる。

(24.b) 明子が歌を歌って雅子がピアノを弾いた。

(25.b) 新しく出来た商業施設の品物は値段が安くて目新しいものが多い。

### 3.5. 対比

前件と後件の主語が交替し、互いに対比関係にある。「けど」や「が」に置き換えられる場合が多い。中俣(2009:306)は対比を「主題が異なり、さらに、別の要素が最低1つ異なる状態のことである」と述べている。

(26) 南の国は暑くて、北の国は涼しい。

(27) おじいさんが山へ行って、おばあさんが川へ行ったのです。

(28) 日本海側は雪が降っていて、太平洋側は晴れています。

(森田 1980:315)

### 3.6. 手段・方法

前件が手段となって後件が生じる。前後節の入れ替えが不可能である。

(29) 日本の支援者とはインターネットなどを利用してて連絡を取り合っている。

(30) 注射を打ってもらって風邪を治した。

(31) 仮病を使って、学校を休んだ。

例(29)では日本の応援者と連絡を取る手段はインターネットであることがうかがえる。例(30)では風邪を治した方法として注射を打ったことがあげられている。また、例(31)では、学校を休んだ方法は仮病だということが読み取れる。

### 3.7. 逆接

森田(1980)によると、前件の示す状況から予想される結果に反する事態が後件に生じる場合に逆接が成立する。また、前件が後件の成立状況を示す点では他の用法と異なるところがない。

(32)いじめられている子がいると分かったなら、見て見ぬふりをしないこと。

(33)これは、一見矛盾するようであって、決してそうではない。

(34)彼はそのことを知っていて言わない。

(森田 1989:756)

### 3.8. 結果・評価

前件の結果後件が起きる。森田(1980)によると、「…した場合」, 「…すれば」, 「…した結果」や「…したので」の意味を表す。

吉田(2011)は、「て」の「結果」の用法が生じる条件を、「前件が有界的, 後件が評価的な述語の場合」としている。

(35)彼が参加して五人になる。

(森田 1980:318)

(36)梅雨があけて夏となった。

上記のように、日本語における「て」の様々な用法を整理し、確認した。「て」は一つの形式でありながら日本語においていかに意味の幅が広く、構文と構文をつなぎ合わせるのか一目瞭然である。日本語における「て」がダイクシス的になったのは、おそらく日本語は英語の「and」に当たる構文と構文をつなぎ合わせる要素がなく、動詞の変形に頼ったからである。言い換えれば、これは、Stassen(2003)が名付けた With-Language の特徴かもしれない<sup>10</sup>。以下 And-Language であるペルシア語の構文と構文を繋ぐ方法を見ていく。

## 4. ペルシア語における構文の並列

### 4.1. 先行研究

ペルシア語では構文の並列に関わる接続形は表 2(p.60)に挙げた接続(助)詞である。その中、代表的で頻繁に用いられるのは-o や va, Ø, ham である。本発表ではまずこれ

---

<sup>10</sup> 同じく With-Language であるトルコ語では動詞の接尾辞の-ip が「て」に似たような役割をはたしている。-ip に関して栗林(2006)を参照されたい。

(1) Ali gel-ip Hasan git-ti  
come-GER went

「アリが来て、ハサンが行った。」

(栗林 2006:29)

らの並列詞の意味と並列方法を確認し、日本語の「て」の用法をカバーする領域と「て」の用法とは異なる領域を明らかにしたい。

## 4.2. -o による並列方法とその意味<sup>11</sup>

### 4.2.1. -o の統語的な並列方法

ماهوتیان(Mahootian)(1378)は-o を用いた構文の並列には限りがないと述べ、-o を談話的だと述べている。また、-o による並列の意味として「因果関係」と「時間的継起」を挙げている。以下単純並列の例である。

(38) man bālā ro tamiz mi-kon-am-o širin pain-o(ro)

I up ACC clean PRES-do-1sg-and Shirin down-ACC

(I will clean upstairs, and Shirin downstairs.)

ماهوتیان(Mahootian)(1378) はまた、二つ以上の構文が並列された場合、最初の構文の後に少し沈黙があり、二番目と三番目の構文の間に *va* が生起するとしている<sup>12</sup>。

(ماهوتیان (Mahootian) 1378:79)

(39) man bālā ro tamiz mi-kon-am, širin pain-o(ro) morattab mi-kon-e va Fereidū

I up ACC clean PRES-do-1sg Shirin down-ACC clear PRES-do-3sg and Fereidun

hayāt-o(ro) mi-šūr-e.

yard-ACC PRES-wash-3sg

(I will clean upstairs, and Shirin downstairs. Fereydoon will mop the yard.)

(ibid.)

二つ以上の構文の場合-o が生起しないという ماهوتیان(Mahootian)(1378)の指摘は疑わしい。以下にその反例をあげる。

<sup>11</sup> Kent(1953)やانوری(Anvari)(1388)によると-oは古代ペルシア語の *utā*, 中世ペルシア語では *ud*, 近代ペルシア語では *u* になり、さらに現代ペルシア語の-oに変化したものである。

<sup>12</sup> 13世紀のイランの詩人サーディには有名な一句がある。

(1) abr-o bād-o mah-o xoršid-o falak dar kār-and, tā to nāni be kaf ār-i-o be ġeflat na-xor-i.  
cloud-o wind-o moon-o sun-o earth in work-is3pl so you bread to palm bring-2sg-o in neglect  
NEG-eat-2sg

(Clouds, wind, the moon, the sun, and the earth are working for you. Beware not to spoil your effort.)

この句は韻文であり、韻律を保つために-oは4回も用いられているが決して非文ではない。

(40) super market raft-am-o šir xarid-am-o bargāšt-am xord-am.  
 super market went-1sg and milk bought-1sg-and came back-1sg ate-1sg  
 (I went to supermarket, bought (some) milk, came back, and drank it.)

表 2. ペルシア語における主な並列詞

並列詞	並列方法
...va...(Arb.)	A and B
...-o...(Per.)	A and B
...ham(Per.)	A, B and C (also)
hamčenin...	A and B
...yā...	A or B
yā inke...(Per.)	A or maybe B
...hamrāh...(Per.)	A alongside of B
ammā...(Arb.)	A but B
valeykan...(Arb.)	A but B
vali...(Arb.) (valeykan の略)	A but B
be lāve...(Per./Arb.)	A also B
baqqd(Arb.)	A then B.
ke (Per.)	A then B

このように、-o が二つ以上生起しても構文は非文にならない。

#### 4.2.2. va による並列と-o との相違点

-o はペルシア語独自の並列詞だが、va はアラビア語からの借用語である。並列詞-o は常に他の要素に接続する付属的な接続詞であるのに対して va は独立した接続詞である。

なお、ペルシア語ではこの二つの並列詞の表記は「و」であり、テキストでは、しばしば-o なのか、それとも va なのか識別するのは困難である。名詞レベルの並列で、二つの語の結合からなるセット語彙では-o のみ生起する<sup>13</sup>。また、どちらかといえば-o は

<sup>13</sup> 例えば、siyāh-o sefīd, sar-o sūrat, zan-o mard, gol-o bolbol, sūxt-o sūz など。これらの語彙は一つの単位としてある程度形が決まっていて定着している。

談話的である。さらに、*va* は独立した並列詞であるのに対して、*-o* は常に並列される語彙や構文の語の最後に結びついて次の語彙や構文の並列を表す。

*va* と *-o* における並列について Stilo(2004)は *va* がすべての構文の最初に生起できるという自由な動きを見せるが *-o* は自らの前の構文の最後の語に付くと述べている。また、شعبانی(Shabani)(1389)はペルシア語における一番頻度の高い接続詞は *-o* だと述べ、*-o* は自らの前の語に付属する Stilo(2004)の指摘が正しいとしている。

(41.a) A: Ahmad xeyli bāhūš-e.

Ahmad very clever-is

(Ahmad is very clever.)

B: va xeyli āqel!

and very wise

(And very wise)

(شعبانی (Shabani) 1389:140)

上記の例では A と B の文がそれぞれ異なった話者によって発話されている。話者 B が *va* を用いて新たな要素を話者 A の文に付け加えている。このような独立した付け加えは独立形態素である *va* のみに可能であり、*-o* では不可能である。

(41.b) A: Ahmad xeyli bāhūš-e.

Ahmad very clever-is.

B-B: \*o xeyli āqel!

and very wise

特に、インフォーマルな会話では *-o* の使用頻度が高い。しかし、話者が発する構文のレベルでは並列詞の *-o* が生起するのか、*va* が生起するのか、それとも並列詞省略で並列されるのかは、事象の経過、二つの構文の結びつき、談話の進み方などが関係している。話者が自らの発話を一旦終えてから更なる構文を並列的に付け加えるのであれば、*-o* は使えず、独立した並列詞 *va* を使うことが予想される。本論文では *va* と *-o* を *-o* のみに統括して論じることとする。



### 4.2.3. -o の表す意味

#### 4.2.3.1. 並列

-o による基本的な用法は「並列」である。「て」の並列的な用法と同様、前件と後件が時間的な関係なしに-o によって並列され、前後しても意味に変化が生じない。

(42.a) emrūz xarid kard-am-o be dūst-am sar zad-am.

today shopping did-1sg-and to friend-POSS met-1sg

(42.b) emrūz be dūst-am sar zad-am-o xarid kard-am.

today to friend-POSS met-1sg-and shopping did-1sg

(43.a) Ostād Hasani dah ketāb nevešt-o čand maqāle čāp kard.

prof Hasani ten book wrote-and some thesis published

(Professor Hasani wrote ten books and published some papers.)

上の例の構文を前後しても意味の変化は生じない。

(43.b) Ostād hasani čand maqāle čāp kard-o dah ketāb nevešt.

prof Hasani some thesis published-and ten book wrote

(Professor Hasani published some theses and wrote ten books.)

(44) dar tasādof-e emrūz do nafar košte-vo<sup>14</sup> se nafar zaxmi šod-and.

in accident-GEN today two person die-and three person wounded-3pl

(In today's accident, two people died and three people were wounded.)

#### 4.2.3.2. 継起・順序

-o が構文の中で示している意味は前件と後件が時間的な順序の中で生じていることであり、前件に次いで後件が起きたことを表す。

(45) sobhāne xord-am-o lebās-am rā pūšid-am madrase raft-am.

breakfast ate-1sg-and clouth-POSS ACC wore-1sg school went-1sg

(I ate breakfast, put on my clothes and went to school.)

---

<sup>14</sup> なお、-o が付く前の語の最後の音が母音の「ā, i, ū, e, o」の場合、子音の v が間に入る。

(1) Āmrīka-vo Jāpon.

America and Japan

(America and Japan)

(46) šām xord-o raft xābid.

dinner ate-and went slept

(He ate his dinner left and slept.)

(47) man rā sedā kard-o hāl-am rā porsid.

I ACC called-and situation-POSS ACC asked

(He called me and asked if I was fine.)

#### 4. 2. 3. 3. 因果関係

-o による「因果関係」の用法をماهوتیان(Mahootian)(1378)も指摘している。

(48) raft-am šenā-o sarmā xord-am.

went-1sg swimming-and could ate-1sg

(I caught a cold because I went swimming.)

(ماهوتیان (Mahootian) 1378:79)

構文における-o による因果関係の意味を以下の構文から読み取ることができる。

(49) bārān bārid-o barf-hā rā āb kard.

Rain rained-and snow-pl ACC melted.

(Rain melted the snow.)

(50) sarmā xord-o na-tavānest sar-e kār be-rav-ad.

Cold caught-and NEG-could work SUBJ-go-3g

(He caught a cold and could not go to work.)

(51) yek golūle xord-o oftād mord.

one bullet hit-and fallen died

(He was hit by a bullet and died.)

(52) moddat-e vizā-yam tamām šod-o majbūr šod-am bargard-am kešvar-am.

time-GEN visa-POSS finished-and had to go back-1sg country-POSS

(My visa duration expired, and I had to go back to my country.)

(53) enqelāb šod-o rejim avaz šod.

revolution became-and regime changed

(The revolution changed the regime.)

以下の例のように、文脈によって「因果関係」とも「継起・順序」とも読み取れることがある。

- (54) saratān gereft-o mord.  
cancer caught-and died  
(He died of cancer.)

「因果関係」を示したいのであれば理由の意味を特定する助詞を使えばよい。-oよりも直接的で強い「因果関係」を示すには助詞の「čon」がある。

- (55) čon saratān gereft mord.  
Because cancer caught died  
(He died because of cancer.)

また、例(56)は「継起・順序」にも読み取れる「因果関係」の用法である。

- (56) zemestān āmad-o havā sard šod.  
winter came-and weather cold became  
(Winter came, and it became cold.)

#### 4. 2. 3. 4. 対比

-oの対比の用法を指摘しているのは、شهیدی(Shahidi)(1385)である。しかし、شهیدی(Shahidi)(1385)の提示する例は現代ペルシア語の例ではない。対比の用法では前件と後件の主語が同一である。以下、現代ペルシア語における-oによる「対比」の例を挙げる。

- (57) bāzār ham raft-i-o peste na-xaridi?  
bazar too went-2sg-and pistachio NET-bought-2sg  
(If you went to Bazar, why didn't you buy Pistachio?)  
(58) Hasan šāḡel ham šod-o sar-e kār na-raft.  
Hasan employ too became-and to-GEN work NEG-went  
(Hasan was employed but did not go to work.)

#### 4.4. Øマーカーによる並列方法

ペルシア語では Asyndetic (並列詞省略) による構文の並列が一貫して可能である。日本語と違ってペルシア語では二つ以上の構文をØマーカーにより並列させることが可能である。以下、Øマーカーの意味範囲を見ていきたい。

##### 4.4.1. 「並列」の用法

Øマーカーの基本的な用法は「並列」である。-o と同じく、前件と後件の主語が同一である。

(59) ostād Hasani dah ketāb nevešt čand maqāle čāp kard.

prof H ten book write some thesis published

(Professor Hasani wrote ten books and published some papers.)

(60) dar tasādof-e emrūz do nafar košte šod-and se nafar zaxmi.<sup>15</sup>

In accident-GEN today two person died-PASS -3Pl three person wound

(In today's accident, two people died and three people were wounded.)

##### 4.4.2. 「継起」

以下はØマーカーの時間的継起用法である。

(61) šām xord Ø raft Ø xābid.

dinner ate went slept

(He ate his dinner left and slept.)

(62) name rā nevešt Ø dar pākat gozāšt Ø post kard.

letter ACC wrote in envelope put post did

(He wrote the letter, put it in the envelope, and sent it.)

(63) čand jeld ketāb xarid Ø be ketābxāne šahr hedye kard.

some QUAN book bought to library city present did

(He bought some books and presented them to the city library.)

---

<sup>15</sup> このような場合、FG (構文における二つの同様な動詞の後方省略) が生じる可能性が高くなる。FG については第五章で詳しく述べる。

#### 4.4.3. 「因果関係」の用法

以下は前節が後節の原因となる場合である。

(64) xaste būd Ø zūd xāb-aš bord.

tired was soon sleep-REF-took

(He was tired, so he fell asleep soon.)

(65) pūl-am kam-e māšin na-mi-tun-am be-xar-am

money-POSS little-is car NEG-PRES-can-1sg SUBJ-buy-1sg

(I only have a little money, so I can not buy a car.)

#### 4.4.4. 「対比」の用法

対比の用法では解釈の揺れが生じることがある。下記例(66)は並列の用法と解釈しても差し支えない。

(66) Tehrān barf mi-āyad, Tabriz āftābi-e.

Tehran snow PRES-come Tabriz sunny-is

(It is snowing in Tehran, but sunny in Tabriz.)

(67) Hasan zahmat kešid, Ali naf-eš-o bord.

Hasan effort pulled Ali benefit-Ref took

(Although Hasan made an effort, but Ali received the benefits.)

#### 4.5. ham の用法

ham の用法についてはすでに第三章で触れたが、ここで再び-o, va との対比でその用法を列挙する。ham はペルシア語において構文の並列に参与する連結詞(conjunction word)である。ham は並列を示すとともに、因果関係、補足、単純並列の意味も表す<sup>16</sup>。

##### 4.5.1. 「並列」の用法

前後の構文ともに ham が生起し、一致的な並列が生じる。ham の並列用法では二語並列詞使用が行われる。

---

<sup>16</sup> ham の用法に関しては第三章で詳しく述べたので、ここでは繰り返しを避けるために、例文のみを挙げることにする。

(68) in kif ham bozorg-e ham sangin.

this bag too big-is too heavy

(This bag is big and heavy.)

この例を日本語に訳した場合、以下のように「並列」の「て」が生起する。

(69)この鞆は重くて大きい。

(70) emsāl ham šāgel šod ham ezdevāj kard<sup>17</sup>.

This year too employ became too marry did

(This year, he was employed and got married.)

#### 4.5.2. 「因果関係」の ham

(71) mādar-am bā man davā kard. Man ham ġazā na-xord-am.

mother-POSS with I quarreled I ? meal NEG-ate-1sg

(My mother quarreled with me, so I did not eat the meal.)

上記の例を日本語に訳した場合、「お母さんが私と喧嘩したので、私は晩ご飯を食べなかった。」のように原因を表す「ので」が用いられる。

(72) ū pūl-am rā pas nadād. man ham šekāyat kard-am.

He money-POSS ACC give back NEG-gave I ? complain did-1sg

(He did not give my money back. So I sued him.)

#### 4.5.3. 「因果関係」の ham における主語の問題

「因果関係」の ham は前後の構文が因果関係にある上、主語が異なった場合にしか生起しない。つまり、後件は前件の行為の結果、または前件に対してリアクションを取ることにより生じ、前件とは異なる主語を必要とする。

例(73)の ham が用いられた構文では前件と後件の主語が異なるが、前件は後件に

---

<sup>17</sup> ham の生起によって二つ目の構文で emsāl が類似事態として (emsāl ham šāgel šod, ~~emsāl~~ ham ezdevāj kard.) のように、省略されている。日本語でも (今年は、就職も (したし) 結婚もした。) のように同じく助動詞 (する) の省略が行われている。しかし、ペルシア語の場合、šāgel (就職) と ezdevāj (結婚) の助動詞はそれぞれ kard-an (する)、と šod-an (なる) であるので、Gapping が生じていない。Gapping については第五章を参照されたい。

働きかけているのでもなく後件は前件に対してリアクションを取っているのでもない。したがってこの種の **ham** は「単純並列」の意味を表している。

(73) emrūz tasādof kard-am mādar-am ham bastari šod. (単純並列の **ham**)

today accident did-1sg mother-POSS ? hospitalized

(Today I had an accident and my mother was hospitalized.)

#### 4.5.3.1. 異主語の例

以下の例では前件と後件の主語が異なる。

(74) sobh mādar-am bidār-am na-kard man ham kelās-am ra az dast dād-am.

Morning mother-POSS wake-REF NEG-did I ? class-POSS ACC missed-1sg

(I missed my class because my mother did not wake me up this morning.)

#### 4.5.3.2. 同一主語の例 :

以下の例では前件と後件の主語が同一である。例(75)では最初の構文の主語が一人称単数である。後件の構文での主語の生起が余分な要素となるので非文である。

(75)\* sobh dir bidār šod-am, man ham kelās-am ra az dast dād-am.

morning late woke up-1sg I ? class-POSS ACC missed-1sg

(I missed my class because I woke up late this morning.)

例(76)では **ham** が目的語の *kelās-am rā* に付いて、累加の意味を表している。しかし、すでに失ったものとして類似事態が存在していないことから累加の意味も曖昧となって非文とされる。

(76)? sobh dir bidār šod-am, kelās-am rā ham az dast dād-am.

morning late woke up-1sg class-POSS ACC ? missed-1sg

(I woke up late this morning and I also missed my class.)

#### 4.5.4. 「補足の **ham**」

以下は補足の **ham** の例である。

(77) emrūz be Tehrān barmigard-am. Tanhā ham hast- am.

today to Tehran go back-1sg alone ? is-1sg

(Today I will go back to Tehran alone.)

(78) ine-am dard mi-konad, xeyli ham dard mi-kon-ad.

chest-POSS ache PRES-do much ? ache PRES-do-3sg

(My chest hurts very badly.)

#### 4.5.5. 「単純並列の ham」

以下は単純並列の ham の例である。

(79) man ketāb mixān-am. Ali ham nāme minevis-ad.

I book read-1sg. Ali ? letter write-3sg

(I am reading a book. Ali is writing a letter.)

(80) man amū-yaš hast-am. išān ham pedar-ešān hast.

I uncle-POSS is-1sg he ? father-POSS is

(I am his uncle and, he is his father.)

(81) Hasan šāḡel šod. Ali ham be dāneḡqāh raft.

Hasan employ became Ali too to University went

(Hasan was employed, and Ali entered University.)

上記例(80)を日本語に訳した場合、「私は彼の叔父で、彼は彼の父である。」となることからわかるように、「単純並列」の **ham** が日本語の「並列」の「て」に対応する場合がある。

#### 5. 「て」に対応するペルシア語の並列方法

以上は日本語の構文における「て」の意味用法とそれに対応するペルシア語の形式と用法をまとめたものである。「て」に対応するペルシア語の形式がほとんど「最も普遍的な意味用法」に集中していることがうかがえる。また、**ham** の場合、「並列」の用法では「て」に対応するが「因果関係」の用法では「主語」が同一かそうでないかによって「て」との相違を見せる。また、**ham** には「て」に対応しない意味範囲も備わっている。



ることが分かる。

表3. 「て」の用法とそれに対応するペルシア語の並列方法の対応

	付帯	継起	因果関係	並列	対比	手段	逆接	結果	補足
て	■	■	■	■	■	■	■	■	
-o		■	■	■	■				
∅		■	■	■	■				
ham			■	■					■

これまで見てきたように、日本語の構文に現れる「て」やペルシア語の構文の並列における-o、∅マーカー、hamのような並列詞は複数の意味範囲を示している。つまり、これらの要素は多義的であり、場合によって異なった意味を表すのである。それゆえ、互いに意味をカバーするところもあれば、カバーしないところもある。例えば、「て」の「付帯」、「手段」、「逆説」、「結果」の用法にペルシア語の挙げた要素が対応しない。一方、ペルシア語のhamの「補足」の用法には「て」が対応しないのが窺える。

## 6. 否定文における並列

これまで、肯定文においてのみペルシア語と日本語の並列詞の出現をみてきたが、ここでは、否定文において両言語の並列詞の出現する形式の可能性を考える。肯定文と否定文の並列形式を想定した場合、並列詞の出現する可能性のある構文は以下の3通りとなる。

### 1) 肯定文と否定文 (肯否文)

(82) ? 朝ごはんを食べて学校に行かなかった。

(83) 朝ごはんを食べたが学校に行かなかった。

### 2) 否定文と肯定文 (否肯文)

(84) 朝ごはんを食べないで学校に行った。

### 3) 否定文と否定文 (否否文)

(85) 朝ごはんも食べなかったし、学校も行かなかった。

## 6.1. 肯否文における並列

肯否文は最初の事柄が生じるが二つ目の事柄が生じない構文の例である。この場合、構文の意味が逆接に転じる。「逆接」を想定して同様な文を発する場合は、逆接の意味を強く表す「が」や「けど／けれど」が用いられると考えられる。

(82) ? 朝ごはんを食べて学校に行かなかった。

(83) 朝ごはんを食べたが学校に行かなかった。

ペルシア語でも同様に肯否文では逆接を指し示す *vali* や *ammā* が生起する。

(86) Ahmad sobhāne xord vali be madrase na-raft.

Ahmad breakfast ate but to school NEG-went

(Ahmad ate his breakfast but did not go to school.)

## 6.2. 否肯文における並列

否肯文は、ペルシア語でも日本語でも付帯状態として解釈されやすい構文になる。

例(87)では食べないままの意味を表しているのが付帯状態を表している。同じく、ペルシア語でも否肯文では完了形容動詞<sup>18</sup>の否定形が出現し、文法的な役割が副詞に転じてしまうのである。

(87)朝ごはんを食べないで学校に行った。

(88) Ahmad sobhāne na-xorde be madrase raft.

Ahmad breakfast NEG-ate to school went

(Ahmad went to school without eating breakfast.)

両言語とも否肯文が副詞に転じてしまうのは、最初の事柄が実行されないまま二つ目の事柄に移ったという意味が読み取れるからである。つまり、実行されていない事柄を実行された事柄と並列的に述べることは不可能だからである。

## 6.3. 否否文における並列

否否文では「て」による並列は不可能であるが、「し」や連用形による並列が行われる。また、動詞は否定形になり、前の構文との否定という「類似事態」を表す「も」が現れる。

---

<sup>18</sup> 完了形容動詞はペルシア語で動詞の完了形に「e」を付け加えることによって作られ、構文の並列や形容詞として用いられる。

(1) xor                      xord                      xord-e  
eat-STM                      ate                      ate(eaten)/ADJ

なお、完了形容動詞は肯肯文の最初の構文で出現するとともに副詞の意味を表し、構文として扱えない。

(2) nešaste rūzname mī-xand.

sit down newspaper IND-read

(He was reading newspaper while sitting down.)

しかし、以下の(3)のように構文の並列に参加することもあるが、現代ペルシア語ではほとんど用いられない。

(3) lebās rā pūšide birun raft.

clouths ACC wear out went

(S/he wear his/her clouths and left.)

(فرشیدورد (farshidvard) 1383:144)

- (89) 朝ごはんは食べなかった。学校も行かなかった。  
 (90) ? 朝ごはんは食べないで学校も行かなかった。  
 (91) 朝ごはんは食べず，学校も行かなかった。  
 (92) 朝ごはんは食べなかったし，学校も行かなかった。

(90)に?マークが付くのは，前件と後件の統語的なステータスに差異があるからである。前件は副詞化していて主節である後件の従属節となっているが，主節では行為の実行が否定されていて意味的に合理性に欠けている。本来なら，「朝ごはんを食べないで学校に行った」ことが一番に連想される。

ペルシア語の場合，動詞は肯定形のまま生起するが，二つの事柄を否定する並列詞の *na~na~* がそれぞれの節の前に生起する *bisyndetic*（並列詞二語使用）である。

(93) Ahmad na sobhāne xord, na be madrase raft.

Ahmad no breakfast ate no to school went

(Ahmad neither ate his breakfast nor went to school.)

二つの言語を比較する際，音声であれ，語彙であれ，文法機能であれ，完全に一致する二つの要素を探り出すのはほとんどの場合不可能である。それは，*macrocomparative*<sup>19</sup> となる日本語とペルシア語の要素の比較であればなおさらである。例えば，英語の *of* とフランス語の *de* が両方とも属格を表す機能語であるが，互いに対応しない側面も備えている。以下の例のように *de* の場合，形容詞を後置することはできない。

(94) \*tout le monde de célèbre (all the world of famous)

(Kayne 2005:20)

このように，二つの言語の要素を対照比較した場合，互いに対応する側面と，対応しない側面を備えていることが明らかになる。この特徴を以下の図で示す。

<sup>19</sup> *macrocomparative* については第一章を参照されたい。

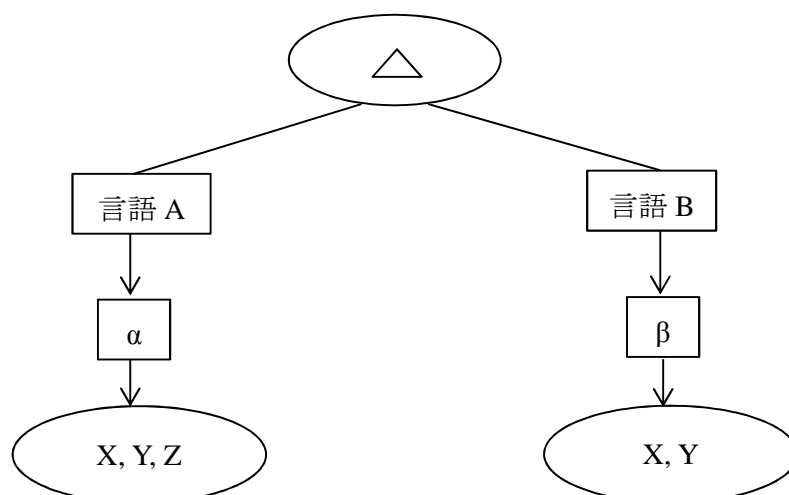


図 3. それぞれの要素に異なった中身がある。

上記の図で、ある概念、例えば $\Delta$ を二つの言語でそれぞれ表すとしよう。そこで、ある言語では $\Delta$ を $\alpha$ で、別の言語では $\beta$ で表すと仮定しよう。言い換えれば、 $\alpha$ と $\beta$ の共通点は $\Delta$ である。しかし、 $\alpha$ と $\beta$ にはさらにそれぞれ他の機能や意味があり、 $\alpha$ と $\beta$ が必ずしも機能が一致するとは限らない。言語間のこのような要素の類似点と相違点は音声や語彙、文法のレベルで生じる<sup>20</sup>。

<sup>20</sup> サビア(1921)は個別言語の音声的習慣について興味深いことを述べている。

理論的には、二つの言語が、そっくり同じ子音と母音の系列から成り立っていないが、しかもなお、まったく異なった聴覚的効果を生じることがある。一方の言語は、音声要素の長さ、すなわち、「音量」にいちじるしい変異を認めないのに対して、もう一方の言語は、このような変異にこの上もなく几帳面に注意していることもある。(おそらく、大多数の言語では、長母音と短母音とは区別されていない。また、多くの言語、たとえばイタリア語、スウェーデン語、オジブウェー語などでは、長子音は短子音とは異なるものとみなされている。)

また、一方では、たとえば英語のように、強勢の強弱にきわめて敏感な言語もあれば、他方では、たとえばフランス語のように、強勢がきわめて瑣末な問題であるような言語もある。あるいは、また、言語の実際の使用からは分離できないピッチの差異が、語そのものには影響せずに、英語のように、多少ともでたらめであったり、せいぜい、修辭的な現象にすぎないこともあるし、これに対して、他の言語では、スウェーデン語、リトアニア語、中国語、タイ語、および、アフリカの大多数の言語のように、ピッチの差異がいっそう細かく段階づけされ、語そのものの不可欠の特徴と感じられていることもある。分節法が種々に異なることも、また、いちじるしい聴覚上の差異の原因となる。なかでももっとも重要なのは、おそらく、音声要素を結合する可能性の多種多様性であろうか。どの言語にも、それぞれ、特異性が見られる。たとえば、ts という結合は、英語にもドイツ語にも見出されるが、英語では語末にしか生じない(hats のように)のに対して、ドイツ語では心理的に単一の音の等価物[音素]として自由に生じる。(Zeit (時間), Katze (猫) のように)。

## 7. 本章の考察とまとめ

並列される構文では「て」が主語や主題の省略にかかわる統語的な役割を果たしている。これは並列される構文の現象であり、-o の場合でも同様なことが生じる。しかし、意味論の面では「て」の表す意味のスケールは広く、ペルシア語のいくつかの接続詞がそれに対応する。

また、-o や「て」の表す意味に関係なく、文脈による解釈は日本語でもペルシア語でも重要なファクターである。両言語における「て」、-o や ham はそれぞれが指し示す意味の範囲が異なり、ダイクシス的であるが、「から」、「ので」、「それから」、baʔd, čon などは特定の意味を持つ。意味が特定している並列詞の場合両言語で互いの指し示す意味をカバーする範囲が広い。

さらに、「て」にも ham にも「因果関係」を表す用法があるが、「て」の場合、前件と後件は同一主語か異主語か関係なく「因果関係」の「て」が生起する。「因果関係」を表す ham の場合、異主語でなければならない。

また、日本語の「て」には構文の並列以外に、アスペクトマーカ―やモダリティとして機能する用法が、-o や ham には名詞の並列を行う機能が備わっている。このように、これらの要素には多くの場合、複数の意味や機能の中から一部分だけが対応している。

## 第五章

### 日本語とペルシア語における Gapping の仕組み

#### 1. はじめに

序論でも述べたが、Gapping は、構文における省略(ellipsis)の一種で、任意的である。Gapping は、同じ動詞を持つ二つの構文が並列された場合、二つの動詞のいずれかが省略される現象のことであり、普遍的な言語現象である。ellipsis については、並列する完全な前文 A と後文 B がまず存在し、Gapping によって A あるいは B どちらかの要素が省略されるという考え方と、最初からすでに A あるいは B どちらかの要素が省略された文がラングの中に存在するという 2 つの異なった考え方があるが、本論文では前者の見解に従うことにする<sup>1</sup>。

第三章で、参照を指し示す「も」や ham は VP まで省略することや第四章では「て」や-o が主題や主語、目的語の省略にかかわることを述べた。Gapping は、「友達は山に行きました、私は海に行きました」のように、V のみを省略する現象である。

本論文では、二つの構文における同一の V が関与する Gapping の際、主題や主語(S)の人称が同様の場合一致的、異なった場合非一致的な Gapping とする。

ペルシア語における非一致的な BG に関しては、ネイティブスピーカーによって容認度に差がある。ペルシア語の非一致的な BG における容認度の違いの理由や日本語の非一致的な BG がなぜ生起する可能性が低く、限定的であるのか。また、ペルシア語における FG がなぜ一般的なのか。日本語では FG がなぜ不可能か、ペルシア語で非一致的な BG にかかる「許可の力」と「抑制の力」の本質は何かという疑問を考察したい。

#### 2. Gapping における先行研究

並列による省略に関する考察は Ross(1970)、に始まり、後に Jackendoff(1971)や Maling(1972)において発展した。この現象を Gapping と命名したのも Ross(1970)である<sup>2</sup>。Ross(1970)はいくつかの言語における FG と BG を観察し、言語における Gapping

<sup>1</sup> Hennig(2013:7)を参照されたい。

<sup>2</sup> “A term coined by Ross(1970) to describe a **transformation** which creates gaps in a sentence after a conjunction by deleting a verb which would otherwise reappear, e.g. *Caroline plays the flute and Louise (plays) the piano*. Gapping can work forwards, as above, or backwards as in the deletion of the first mention of the word.”

の普遍性を強調した。また、「構文における類似事態(Identical Elements)が左枝(left branches)に現れた場合は FG, 右枝(right branches)に現れた場合は BG が生じるとしている。さらに、どの言語にも Gapping が起きるとし、世界のあらゆる言語における Gapping の現れ方の可能性を以下のように分類している。

表 1. Ross(1970)による様々な言語における Gapping の可能性<sup>3</sup>

A	SVO + SO
B	SOV + SO
C	SO + SOV
*D	SO + SVO

Ross(1970)によると語順が自由な言語であるロシア語やドイツ語のような言語では FG も BG も可能だが、語順が SOV である日本語では BG である C タイプのみ可能となる<sup>4</sup>。以下、Ross(1970)が挙げる日本語の例である。

(1.a) Watakusi wa sakana o tabe, Biru wa gohan o tabeta.

I (prt) fish (prt) eat, Bill (prt) rice (prt) ate

(1.b) Watakusi wa sakana o, Biru wa gohan o tabeta.

I (prt) fish (prt), Bill (prt) rice (prt) ate

(Ross 1970:251)

Ross(1970)の Gapping の表れと語順との関係を Maling(1972)が不適切として否定している。

### 3. ペルシア語における Gapping

Marashi(1970)はペルシア語の正確な語順を扱う際に、ペルシア語における Gapping

(Hadumod 1996:449)

<sup>3</sup> D はいかなる言語でも起きないタイプとされている。

<sup>4</sup> “a. Gapping is a single rule which operates forward and backward. The direction of gapping depends on the input phrase structure configuration: forward if the identical elements are on left branches, backward if they are on the right branches.

b. Languages whose deep structure order is SOV always have the verb in clause-final position.

c. Gapping is an anywhere rule in any language in whose grammar it appears.”

(Ross 1970: 251)



の表れにも触れている。Marashi(1970)によると、ペルシア語では Gapping が FG でも BG でも可能であるとして、以下の例を挙げている。なお、(2.a)は FG の例、(2.b)は非一致的な BG の例である。

(2.a) /mæn ostād-e tarix-ra mišenasaem vae šomā ostād-e fizik ra./

I professor history I know and you professor physics-OM  
(I know history professor, and you the physics professor.)

(Marashi 1970:36)

(2.b) /mæn ostād-e tarix-ra vae šomā ostād-e fizik ra mišenasid./

I professor history and you professor physics know [2pl]

(ibid: 37)

Marashi(1970)は BG については「非文法的ではないが一般的ではない」<sup>5</sup>と述べている。Marashi(1970)の「BG は一般的ではない」という言い方を裏返せば「FG が一般的」ということになる。本論文で、筆者は「FG が一般的」という Marashi(1970)の立場と同様の立場に立つ。しかし、Marashi(1970)はなぜ FG が一般的で BG はそうでないかという疑問について一切触れていない。それどころか、Marashi(1970)自身が BG の例としてあげている(2.b)を認めないネイティブスピーカーも多く、彼の主張には多くの問題がある。

まず、ペルシア語で FG が基本的といえるのは、いかなる人称や数の並列でも FG が可能であり、FG に制限が一切かからないからである。以下の例を参照されたい。

(3.a) man čāy nūšid-am

I tea drank-1sg

(I drank tea)

(3.b) ū qahve nūšid.

he coffee drank

(He drank tea)

(3.c) man čāy nūšid-am, ū qahve (∅)

I tea drank-1sg, he coffee

---

<sup>5</sup> “in backward gapping, the final output though not totally ungrammatical is not common”

(Marashi 1970:38)

∅ = nūšid (drank)

(I drank tea and he coffee.)

これを Ross(1970)の表で表すと B タイプの(SOV) + (SOV) = (SOV) + (SO)となる。

例(3.c)では、並列された二つの構文における V の人称が異なっているが FG には制限がかかっていない。仮に、この構文を BG で表現すると、容認しにくくなり、ネイティブスピーカーの中には容認しない者もいる。

(3.d) ?man čāy, ū qahve nūšid (∅)

I tea he coffee drank-(3sg)

(I drank tea, and he coffee.)

BG に関しては、同じ人称同士の並列となる一致的な Gapping であれば許される。(4)では人称が二つとも三人称単数(3sg)であることから V とそれを満たすべき二つの S との間に等位性が保たれていて、並列には制限がかからない。

(4) Ali be mašhad va Hasan be Tehrān raft-and.

Ali to Mashhad and Hasan to Tehran went-3pl

(Ali went to Mashhad, Hasan to Tehran.)

上記の例では、BG により二つの S が一つの V で締めくくられている。語尾が三人称複数を示す raft-and (they went)の V が二つの S、つまり、Ali と Hasan という複数の S の素性と一致して複数で表れている。このように、ペルシア語では語順に関して SOV + SOV が SOV + SO となる場合が基本的であり、SO + SOV も等位的な場合によっては抽出可能である。上記の例では、二つの S とも三人称単数であり、V は二つの S とも一致している<sup>6</sup>。

(SOV) + (SO)では最初の V は最初の S を満たせば十分であるが、(SO) + (SOV)では主要部後置(以下 head-final)となる V が二つの S とも満たすことが要求されている。

---

<sup>6</sup> 行き先を示す二つの名詞句が異なるこの構文で共通しているのは raft (went)のみである。従って、以下のように二つの構文に分けて、構文の類似性により ham を導入して言い表すことも可能である。

(1) Alī be mašhad raft, Hasan ham be Tehrān.

Ali to Mashhad went-3sg Hasan ? to Tehran

(Ali went to Mashhad, and Hasan to Tehran.)

図 1(p.80)では V が head-final となっているので二つの S も満たしているが、図 2 では先行する文の V が省略された後続の文にコピーを送るのである<sup>7</sup>。

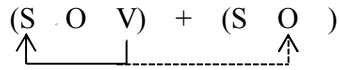


図 1.

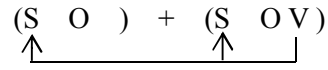


図 2.

上でも述べたように、ペルシア語では FG (図 1) がいかなる構文においても可能であるという意味で網羅的である。BG (図 2) は非一致的な二つの S の場合 Gapping が容認しにくいので限定的である。

しかし、なぜペルシア語は FG が一致的でも非一致的でも可能であるのに対して、BG は一致的な場合のみに許可されるのか興味深い疑問である。以下、ペルシア語における Gapping の仕組みをさらに詳しく分析し、この問題の答えを探してみたい。結論からいうと、FG が一般的なのは Gapping には SVA の「抑制の力」がかからないからであり、FG が可能なのは SVO 語順の特徴も備えているからである。

### 3.1. ペルシア語での BG における制限

ペルシア語では V が人称や数の活用を行い、FG では他の要素による制限がかからないのに対し、BG では人称や数による制限がかかり、自由な Gapping が不可能となる。つまり、二つの構文の人称が異なった場合 BG の許可が困難となる。以下の構文ではそれぞれの構文の V の人称が異なることから Gapping が容認しにくくなる<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> Oku(2000)は Gapping が FG である英語の用例に関して、省略されない部分が省略された部分に LF(Logic Form)のコピーを送ると述べている。また、Repp(2009)は最初の構文が発せられてから copying が行われるとしている。

(2) Bill [<sub>VP1</sub> admires himself], and John does [<sub>VP2</sub> admires himself] too.

| \_\_\_\_\_ LF Copy \_\_\_\_\_ ↑

(Oku 2000:181)

(3) Mary will [<sub>VP1</sub> wash {3<sup>rd</sup> person, feminine, singular} car], and

|  
LFCopy

↓  
John will [<sub>VP1</sub> wash {3<sup>rd</sup> person, feminine, singular} car] too.

(Oku 2000:183)

<sup>8</sup> ただし、談話では並列される構文の容認度が上がることが予想される。特に、一人称の V が Gapping によって省略される場面で、ネイティブによって容認度が上がったことを筆者は確認している。

以下の例のように S が異なる非一致的な BG がネイティブスピーカーに認められる場合もある。

(3) man xarboze ∅ va ānhā hendevāne xarīda-and.

(5)? to čāy (∅) ū qahve nūšid. ⇒人称が一致しない

you-sg tea he coffee drank

(You drank tea, and he coffee.)

(6)? mā čāy (∅) ū qahve nūšid. ⇒人称も数も一致しない

we tea he coffee drank

(We drank tea, and he coffee.)

(7)? šomā čāy (∅) ū qahve nūšid. ⇒人称も数も一致しない

you-pl tea he coffee drank

(You drank tea, and he coffee.)

(8)? anhā čāy (∅) ū qahve nūšid. ⇒数が一致しない

they tea he coffee drank

(They drank tea, and he coffee.)

並列された二つの構文の間をボーダーとすれば、BG では後述の V の活用形式が前述の構文の S 素性と一致するかしないかは問題である。つまり、Gapping により省略された V の人称まで満たすことができるかできないかで、Gapping の容認が左右されるのである。

ペルシア語の動詞には 3 つの人称と、2 つの単数と複数の活用語尾があり、それぞれの人称の単数・複数と他の人称の並列を合計すると約 30 通りの非一致的な BG が出現する可能性がある。たとえば、一人称単数と一人称複数、また、一人称単数と二人称と三人称のそれぞれの単数と複数を想定すれば、他の人称の非一致的な Gapping の可能性が把握できる<sup>9</sup>。

このような非一致的な BG が容認されたり、容認されなかったりする理由を CCA 規則や SVA 規則によって説明することが可能である。

---

I melon and they watermelon bought-3pl

(I bought melon and they watermelon.)

∅: = xarīdam

<sup>9</sup> 一致的な BG の構文並列は三人称のみ可能である。

(1) Alī be mašhad va Hasan be Tehrān raft-and.

Ali to Mashhad and Hasan to Tehran went-3pl

(Ali went to Mashhad, Hasan to Tehran.)

主語が同様の場合、va や-o によって名詞句が並列される。

(2) man be Tehran va Tabriz raft-am

I to Tehran and Tabriz went-1sg.

(I went to Tehran and Tabriz.)

## 4. Agreement と語順の問題

### 4.1. Agreement の問題

Agreement とは言語における様々な要素の素性の一致のことである。Corbett(2006)によると Agreement は「範囲が広く、多種多様な類を持ち、世界の一部の言語では顕在的、一部の言語では潜在的」<sup>10</sup>である。多くのインド・ヨーロッパ語では S と V との間の人称と数の一致が求められる。さらに、スペイン語、フランス語、ポルトガル語など、言語によっては人称と数の一致に加えて性の一致も求められることがある。本論文では、Corbett(2006)の図を引用し、Agreement にかかわる用語の説明を控えて SVA 規則と CCA 規則のみの説明にとどめたいと思う。

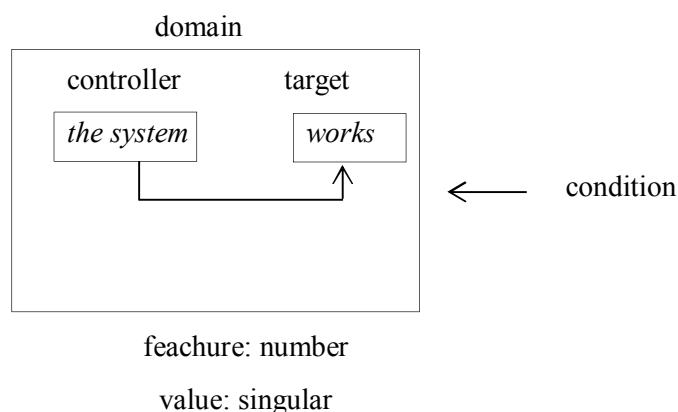


図 3. Agreement の提示と用語の説明

(Corbett 2006:5)

#### 4.1.1. SVA 規則

SVA 規則は Agreement 規則の基本的な規則の一つである。この規則によると、構文の中の V の活用形式が S の数、性、人称と一致しなければならない。たとえば、構文の S が単数であれば、その構文の述語となる V も単数、構文の S が複数であれば、V も複数形式を示さなければならない。

ペルシア語では V と S が性の一致を必要としないが、人称と数の一致を要求する。

<sup>10</sup> “Agreement is a widespread and varied phenomenon. In some of the world’s languages it is pervasive, while in others it is absent.”

(Corbett 2006:1)

表2：動詞による数と人称の活用語尾（括弧の中は口語的）<sup>11</sup>

	単数		複数	
	(present)	(past)	(present)	(past)
一人称	-am	-am	-im	-im
二人称	-i	-i	-id (in)	-id (in)
三人称	-ad	∅	-and (an)	-and (an)

なお、興味深いことに、限られた場面においてではあるもののペルシア語では SVA 規則が守られないこともある<sup>12</sup>。

以下、上でも挙げた(3.a)では、S の素性と V の活用形式が一致を果たしているのが正しい文とされるが、(9)は一致していないので非文とされる。

(3.a) man čāy nūšid-am

I tea drank -1sg

(I drank tea.)

(9) \*man qahve nūšid

I coffe drank

(Intended meaning: I drank coffee.)

<sup>11</sup> 括弧の中の形態は会話で用いられる傾向が強い。

<sup>12</sup> Sedighi(2006)はペルシア語での SVA 規則に違反する例を挙げている。その一つは無生の複数の S に対して単数の V が生起する例である。

(1) in šaye?e-hā mardom rā [azord- ∅]  
this rumours-pl people Acc. hurt-3sg  
(these rumours hurt/disappointed people.)

(Sedighi 2006:8)

上記の例では S となる šaye?e-hā (romours) は複数で述べられているのに対して、V となる azord (hurt) は単数で生起し、S との一致を果たしていない。仮に、この場合 V が複数で生起すると構文は誤用となる。Sedighi (2006)はこの現象が impoverishment によって生じるとしている。

さらに、ペルシア語における SVO 規則に従わないもう一つの例は、心情動詞の S と一致しない例である。

(2) ma æz u xoš-eman amad- ∅  
we from her/his pleasure-1pl came-3sg  
(We liked her/him (She/he appealed to us.))

(Sedighi 2006:9)

上記の例では S となる ma (we) は複数であるのに対して、V の amad (came) は単数で述べられている。(1)と同様、V の複数形は誤用となる。

また、日常会話では二人称複数の V が単数で生起することもある。

(3) man xūb-am šomā četor-i/(id).  
I fine-is1sg you-pl how-is-2sg/2pl  
(I am fine, how about you?)

次の例(10)では人称や数の異なった二つの S を一つの V で締めくくる際（非一致的な BG），V が片方の S しか一致を満たさなくなる。従って，S と一致しない V 構文の容認が難しくなり Gapping に「抑制の力」がかかることになる。

(10)? man sib, (∅) ū portaqāl xarid.

I apple he orange bought-3sg

(I bought an apple, and he an orange.)

例(10)では，V が三人称単数(3sg) の S と一致し，一人称単数(1sg)との一致を果たしていない。このようにして，S と V の項が一致しない構文がネイティブスピーカーによって非文とされることになる。つまり，SVA により「抑制の力」が働き，上記のペルシア語の例文では非一致的な BG が容認されにくくなる。

#### 4.1.2. CCA 規則

CCA 規則は並列される要素とその構文の中にある一番近い項との一致の理論である。言語によって一致が求められる場面が異なることから，非一致的な並列の場合 CCA 規則が現れる場面にも差異がある。以下にいくつかの言語における CCA 規則の例をあげる。

以下，Morgan(1984)のあげた英語の例である。

(11.a) There was/\*were a man and two women in the room.

(11.b) There were/\*was two women and a man in the room.

(Morgan 1984:235)

英語では単数と複数の一致が求められる場合がある。一致が求められる場面では，複数名詞と単数名詞の並列が非一致的な並列になる。そこで，上記の例のように V に一番近い S と一致する。また，日本語の例として，以下の例文があげられる。

(12.a) ?私は車を，彼は自転車をほしがっている。

(12.b) \*彼は自転車を，私は車をほしがっている。

上記の日本語の非一致的な並列の例では、どちらかといえば(12.a)のほうがネイティブスピーカーによって認められるであろう。一方(12.b)では構文内の遠い要素が一致を果たしているので Gapping によって並列するのは不自然になっている。

また、筆者の母語であるアゼルバイジャン語の以下の文では、最後の V に「ケーキ」が近いとき「yemek (食べる)」が、「紅茶」が近い時は「içmek (飲む)」が要求されることになる。

(13.a) gel gidek çay-la kek yiyək/\*içək

come go-1pl tea- with cake eat-1Pl/drink-1pl

(Let's go and eat cake and tea.)

(13.b) gel gidek kek-ile çay içək/\*yiyək.

come go-1pl cake-with tea drink-1pl/eat-1pl

(Let's go and eat cake and tea.)

ロシア語における Gapping の現れ方に関して、Ross(1970)は以下の例を挙げている。

(14.a) ja pil vodu, i Anna pila vodku.

I drank water and Anna drank vodka.

(I drank water, and Anna vodka.)

(14.b) ja vodu pil, i Anna vodku pila.

I water drank, and Anna vodka drank

(I drank water, and Anna drank vodka.)

Ross(1970)によると上記の例から以下の例が抽出可能である。

(15.a) ja pil vodu, i Anna vodku.

I drank water and Anna vodka.

(15.b) ja vodu, i Anna vodku pila.

I water, and Anna vodka drank

(I drank water, and Anna vodka.)

(Ross 1970:251)

さらに、性的一致が求められるポルトガル語では以下の例で CCA 規則の存在が確



認できる。以下、Villavicencio(2005)の例をあげる。

(16) Todo o constrangimento e a dor sofridas.  
all.MSG the.MSG embarrassment.MSG and the.FSG pain.FSG suffered.FPL  
(All the embarrassment and pain suffered)

(Villavicencio 2005:7)

上記の(15.b)や(16)は本章でいう非一致的なBGに当たる。この例でもペルシア語と同様な原理が働くと予想される。したがって、(15.b)にはSVA規則の「抑制の力」とCCA規則の「許可の力」がかかっていることになる<sup>13</sup>。

等位的な並列は以下の形式で説明できる。

(17.a) A は X  
(17.b) B は X  
(17.c) A は X+B は X

} ⇒ A と B は X`

CCA規則による非等位的な並列の形式は以下のようなになる。

(18.a) A は X  
(18.b) B は Y  
(18.c) A は X+B は Y

} ⇒ A と B は Y

以下、例(17)に相当する具体的な例である。

(17.a`)山田は日本人だ。  
(17.b`)田中は日本人だ。  
(17.c`)山田と田中は日本人だ。

以下例(18)に相当する具体的な例である。

<sup>13</sup> なお、(15.b)を二人のロシア語の母語話者に提示し、正誤判断を求めたところ、「意味が通じることは通じるが、(15.a)が正しい文である」というコメントをもらった。よって、Ross(1970)の(15.b)は?付きの用例であると思われる。この例は、人称の不一致に由来する非一致的なBGであることから、ネイティブスピーカーには認めにくくなっていると思われる。

- (18.a') ケーキは食べ物だ。  
 (18.b') コーヒーは飲み物だ。  
 (18.c') \*ケーキとコーヒーは飲み物だ。

ここでもう一度 **3.1.** のペルシア語における非一致的な BG の例を挙げたい。

- (5)? to čāy (∅) ū qahve nūšid. ⇒ 人称が一致しない  
 you-sg tea he coffee drank  
 (You drank tea, and he coffee.)
- (6)? mā čāy (∅) ū qahve nūšid. ⇒ 人称も数も一致しない  
 we tea he coffee drank  
 (We drank tea, and he coffee.)
- (7)? šomā čāy (∅) ū qahve nūšid. ⇒ 人称も数も一致しない  
 you-pl tea he coffee drank  
 (You drank tea, and he coffee.)
- (8)? anhā čāy (∅) ū qahve nūšid. ⇒ 数が一致しない  
 they tea he coffee drank  
 (They drank tea, and he coffee.)

ペルシア語でこの種の例が認められるのは CCA 規則により「許可の力」がかかり、その結果、並列が容認されるからだと考えられる。一方、容認されにくくなる場合は「抑制の力」として SVA 規則の力が存在する。また、ペルシア語で FG が基本的となっているのは SVA 規則と CCA 規則が大きな原因であると考えられる。動詞が最後に残る BG では二つの人称との一致が V に求められるが、FG ではその制限がない。言い換えれば、ペルシア語では人称の不一致から逃れるために FG の Gapping が用いられるのである。

## 4.2. 語順の問題と Gapping の出現

序論でも触れたように伝統文法や先行研究では「ペルシア語は語順が SOV」とされている<sup>14</sup>。確かに単文ではペルシア語は SOV であるが、複文、知覚動詞、ムードを表す

<sup>14</sup> Soheili-Isfahani(1976), Lazard(1992), Taghvaipour(2004), Karimi(2005), H. Taleghani(2006), Aghaei(2006), 吉枝(2011)など。

動詞では SOV 語順から逸脱し、動詞が先に置かれる場合が多い。下記の例を参照されたい。

(19.a) Hasan xāne sāxt.

Hasan house built

(Hasan built house.)

(19.b) \* Hasan sāxt xāne.

Hasan built house

(20.a) Ali mi-dān-ad [ke Hasan xāne sāxt].

Ali PRES-know-3sg that hasan house built

(Ali knows that Hasan built a house.)

(20.b)\*Ali [ke Hasan xāne sāxt] mi-dān-ad.

Ali that Hasan house built PRES-know-3sg

上記の例(19.a)は単文であり、主語、目的語と動詞といった語順に従っており、正しい文となっている。SVO の語順を示す(19.b)は非文である。一方(20.a)では補文が主節の外に置かれ、動詞が上昇し、枠外配置で処理されている。付属節が構造内に置かれた(20.b)は非文となっている。

#### 4.2.1. 語順に関する先行研究

多くの研究者はペルシア語の語順を SOV としているが、ペルシア語の補文が枠外配置の語順を示すことに触れている研究者も多い。Marashi(1970)はペルシア語における Gapping に触れ、ペルシア語は Gapping が FG だから語順は SVO であると結論付けている。Vennemann(1974)はアラビア語との接触によってペルシア語は SVO 化しつつあったがそのプロセスが完了しないままになっていると述べている<sup>15</sup>。

Darzi(1996)は「語順と Gapping の現れ方との間に関係がない」として、Marashi(1970)の SVO 論に異を唱え、SOV・SVO 両語順説に対しても反対意見を述べている。Darzi(1996)は SOV に反する例をあげながらも「どちらかと言えばペルシア語は SOV 言

---

<sup>15</sup> Vennemann(1974)のいうアラビア語の影響については以下のように反論することができる。

まず、アラビア語の影響によってペルシア語が SVO 化したとしたらなぜほとんど知覚動詞だけがその変化を被ったのであろうか。さらに、CP を枠外配置することは他のインド・ヨーロッパ諸語にも見られ、アラビア語の影響の結果とは考えられない。また、アラビア語の影響下にあったペルシア語の場合と同様に、日本語も一世紀以上中国語の影響下にあったが、SVO 型にはならなかった。従って、ペルシア語の SVO 化は本来的であると判断することができる。

語である」としている。

Dabir moghaddam(2001)はペルシア語の語順に関する通時的な研究において、ペルシア語は SOV から SVO への変化段階にあると指摘している<sup>16</sup>。Karimi(1989)および Karimi(2005)もペルシア語の語順を SOV とするが SOV から逸脱する掻き混ぜ文 (scrambling)や補文の ke 節の枠外配置についても触れている。Ramsay(2005)は一步先に踏み出して「ペルシア語は語順がかなり自由である」としている<sup>17</sup>。H. Taleghani(2006)はモダリティを示す動詞に関して SVO 形式や ke 節による CP の枠外配置に触れているが最終的に SOV 語順の立場に立つ。Aghaei(2006)もペルシア語における ke 節構造内や枠外配置節の動詞の位置について議論している。Karimi(2007)はペルシア語を「SOV 言語で、語順がかなり自由」とであると記述している<sup>18</sup>。

#### 4.2.2. SOV から逸脱するケース

##### 4.2.2.1. ke節によるSVO

ke は関係代名詞として、埋め込み文に生起する。従属節に生起する ke には「修飾節、理由、前件の説明、結果、唐突、時間、強調や軽視<sup>19</sup>」の意味がある。ke 節が生起する複文では動詞が上昇し、ke 節が動詞の後に置かれる<sup>20</sup>。

(21.a) ketāb-i [ke dūst-am dāde būd] rā xānd-am.

book-INDF that friend-POSS has given ACC read-1sg

(I read the book that my friend had given to me.)

(21.b) ketāb-i rā xānd-am. [ke dūst-am dāde būd]

book-INDF ACC read-1sg that friend-POSS has given

(I read the book that my friend had given to me.)

---

<sup>16</sup> “Persian has been in the process of a syntactic change though not from a fixed type but from a free word-order type in OP towards a more configurational and VO type in contemporary Persian.”

(Moghaddam 2001:21)

<sup>17</sup> “Persian word order is fairly free. In particular, the major constituents of a sentence may be permuted into a variety of orders, some of which more marked than others but all of which are permissible.”

(Ramsay 2005:412)

<sup>18</sup> “**Persian, an SOV language with fairly free word order**, neither exhibits obligatory single wh-movement comparable to English, nor obligatory multiple wh-movement observed in Bulgarian.”

(Karimi 2007:167)

<sup>19</sup> شهیدی(Shahidi)(1385)

<sup>20</sup> استاجی(Ostaji)(1389)は ke を通時的に観察し、「現代ペルシア語における ke は古代ペルシア語の疑問詞の ke から派生した」と述べている。

#### 4.2.2.2. tā 節による SVO

tā 節は ke 節と同様枠外配置される節である。tā は「理由」や「時間」の意味を表す。理由を表す tā 節が枠外配置されるのは強制的であるが、時間を表す tā 節が構造内で生起することも可能である。

理由を表す tā 節の例：

(22.a) pul jam? mi-kon-am [tā māšin be-xar-am.]

money gather PRES-do-1sg in order to car SUBJ-buy-1sg

(I am saving money to buy a car.)

(22.b)\*[tā māšin be-xar-am.] pul jam? Mi-kon-am.

(23.a) in qors ro boxor [tā sar dard-et xūb še!]

this pill ACC eat in order to headache-POSS2sg good become

(Take this pill to relieve your headache.)

(23.b)\*[tā sar dard-et xūb še!] in qors ro boxor.

時間を表す tā 節の例<sup>21</sup>：

(24.a) sabr mi-kon-am tā to bi-ā-i.

wait PRES-do-1sg until you SUBJ-come-2sg

(I wait until you come.)

(24.b) tā to bi-ā-i sabr mi-kon-am.

until you SUBJ-come-2sg wait PRES-do-1sg

(I wait until you come.)

#### 4.2.2.3. 一部の知覚動詞による SVO

ペルシア語では複文における知覚動詞の SVO が定着しており、SOV の配列は不可能である。以下 xāheš kardan. (ask/request), fekr kardan (to think), xāstan (to want), entezār dāštan (to expect) の例をあげる。なお、これらの補文では ke が省かれることは可能である。

---

<sup>21</sup> なお、(24.a)と(24.b)を二人のネイティブに提示したところ、「二つとも正しいが、(24.a)の方が分かりやすい」というコメントをもらった。筆者も同感である。

◆ xāheš kardan. (ask/request)

(25.a) Simin az man xāheš kard [(ke) nāme-ha-š-o tayp kon-am.]

Simin from I ask did that letter-pl-REF-ACC type do-1sg

(Simin asked me to type her letters for her.)

(25.b)\* Simin az man [(ke) nāme-ha-š-o tayp kon-am] xāheš kard.

◆ fekr kardan (to think)

(26.a) fekr kard-am [(ke) to rafti.]

think did-1sg that you went-2sg

(I thought that you had gone.)

(26.b)\* [(ke) to rafti.]fekr kard-am.<sup>22</sup>

◆ xāst-an<sup>23</sup> (to will/to ask sb)

(27.a) xāst-am [(ke) māšin be-xar-am] pūl na-dāšt-am.

wanted-1sg that car SUBJ-buy-1sg money NEG-had-1sg

(I wanted to buy a car, but I had no money.)

(27.b)\* [(ke) māšin be-xar-am] xāst-am, pūl na-dāšt-am.

◆ entezār dāšt-an (to expect)

(28.a) entezār dāšt-am [(ke) be didan-e man bi-ā-i.]

---

<sup>22</sup> 上記の用例は ke 節を名詞化して述べると可能となるが意味が変化してしまう。

(1) man be [raftan-e to] fekr kardam.

I to going-of you think did-1sg

(I thought about your action of going.)

ただし、(2)と(26.a)の構文は同様な意味を表さない。

<sup>23</sup> Vahedi Langrudi(2002)は現代ペルシア語における要求動詞 xāstan の統語機能の文法化について述べている。Vahedi Langrudi(2002)によると、ペルシア語では xāstan には3つの統語役割がある。一つは他動詞としての意味(1)、二つ目は補文の事態を要求する意味(2)、三つ目は構文における本動詞に前置し、未来を表す意味である(3)。

(1) Ali ketāb mi-xāhad.

Ali book PRES-read

(Ali wants a book.)

(2) man mi-xāst-am (ke) Ali be-rav-ad.

I PRES-will-1sg that Ali SUBJ-go-3sg

(I wanted Ali to go.)

(3) man xah-am raft.

I will-1sg go

(I will go.)

Vahedi Langrudi(2002)は、xāstan の二つ目の意味と三つ目の意味が一つ目の本動詞から拡張したとしている。

expect had-1sg that to see-GEN I SUBJ-come-2sg  
 (I expected you to come and visit me.)  
 (28.b)\*[(ke) be didan-e man bi-ā-i.] entezār dāšt-am  
 That to see-GEN I SUBJ-come-2sg Expect had-1sg

補文(complementizer phrase (CP))が枠外配置される他の動詞

◆◆ goftan (to say)

(29.a) Kimia goft [(ke) parviz xūne nist.]  
 Kimia said that Parviz home NEG-is.  
 (Kimia said that Parviz was not at home.)

(Karimi 2005:8)

(29.b)\* Kimia [(ke) parviz xūne nist.] goft.

Kimia that Parviz home NEG-is said  
 (Intended meaning: Kimia said that Parviz is not at home.)

◆◆ neveštan (to write)

(30.a) dar nāme be doxtar-aš nevešt [ke dūst-aš dār-ad.]  
 in letter to daughter-POSS wrote that love-REF have-3sg  
 (He wrote to his daughter In the letter,that he loved her.)

(30.b)\* dar nāme be doxtar-aš [ke dūst-aš dār-ad] nevešt.  
 in letter to daughter-POSS that love-REF have-3sg wrote

以上, fekr kardan (to think), goftan (to say), neveštan (to write)などのような動詞は補文を伴う動詞である。知覚動詞や neveštan (to write), goftan(to say), didan(to see)のような CP を伴う動詞が CP の量が拡大したことによって構造内で処理が困難となり, その結果 V の上昇によって CP が枠外配置されたと考えられる。CP を伴わない xordan (to eat) や xaridan(to buy) のような動詞には同じような動きを確認することができない<sup>24</sup>。

<sup>24</sup> 回帰的な埋め込み文や制限のない接続を繰り返すことは論理上可能ではあるが, 記憶力の制限で処理が不可能になってしまう。なお, 回帰性と処理の問題に関しては中井(2004)や外池(2011)を参照されたい。

#### 4.2.2.4. ムードを表す動詞の上昇

ペルシア語ではムードを表す「momken ast ... (it is possible...), (dorost ast ke... (it is correct that...(but)..., majbūr būdan...(to be obliged...))などのような助動詞も上昇し、付属節の枠外配置が生じる。

◆ lāzem būdan (it is possible)

(31) bačče-hâ lāzem-e (ke) bištar dars be-xūn-an.

child-pl necessary-is. (that) more lesson Subj-read-3pl.

(Literal meaning: It is necessary that children will study more.)

(H. Taleghani 2006:42)

◆ momken būdan (to be possible)

(32) Sārā momken-e (ke) mariz bā-š-e.

S. possible-be-3rdsg (that) sick-Subj-is.

(Sārā may be sick.)

(H. Taleghani 2006:43)

◆ ehtemāl dāštan (to be probable)

(33) ehtemāl/emkân dār-e (ke) Sârâ be in konferâns bi-y-âd.

possibility/probability have-3sg. (that) Sara to this conference Subj.Prs-come-3rdsg.

(It is possible that Sârâ will come to the conference.)

(ibid: 58)

#### 4.2.2.5. 掻き混ぜ文で上昇する動詞

特に会話では、掻き混ぜ文で動詞が上昇し、目的語は動詞の後に置かれる。述語文ではコピュラが上昇し、名詞（句）は枠外配置されることがある。以下の例を参照されたい。

(34) in bude ast natije-ye adam-e tavajjoh be zabān-e fārsi kea az badv-e dowlāt-e āl-e saljuq dar iran ruy dād.

(Such (lit., this) was the result of the lack of attention [given] to the Persian Language which was prevalent (lit., was produced) in Iran from the beginning of the reign of Saljuks.)



さらに、Vが上昇している例文を以下にあげる。

(35.a) šōhar-am doktor-e.

husband-POSS doctor-is.

(My husband is doctor.)

(35.b) doktor-e šōhar-am.

doctor-is husband-POSS

(36.a) hava sard-e

Weather cold-is

(It is cold.)

(36.b) sard-e hava.

cold-is weather?

(It is cold.)

上で見たようにペルシア語ではVが上昇し、CPや主題や目的語がVの後に置かれることが多い。特に、複文ではその傾向が強いと思われる。ペルシア語のGappingがFGとなっているのはこの特徴も影響していると考えられる。

#### 4.2.2.6. 枠外配置が可能または不可能な目的語

主語、目的語、動詞が生起する文では間接目的語であれば、格の有無に関係なく枠外配置されるが、直接目的語の場合、対格が後置される目的語のみ枠外配置が可能である。

以下、間接目的語の例文である。

(37.a) Hasan dirūz (be) Ālmān raft.

Hasan yesterday (to) Germany went

(Yesterday, Hasan went to Germany.)

(37.b) Hasan dirūz raft (be) Ālmān.

Hasan yesterday went (to) Germany

(Yesterday, Hasan went to Germany.)

以下、直接目的語の例文である。

(38.a) bačče ġazā-š-o xord.

child meal-REF-ACC ate

(The child ate his/her meal.)

(38.b) bačče xord ġazā-š-o.

child ate meal-REF-ACC

(The child ate his/her meal.)

一方、対格表示を伴っていない直接目的語を枠外配置で述べることができない。

(39) \*bačče xord ġazā-š.

child ate meal- REF

(The child ate his/her meal.)

このように、複文での動詞の上昇、SVOで定着している知覚動詞やムードを表す動詞などもあり、ペルシア語は語順が単純にSOVとは言い切れない。動詞を先に置くという性質はGappingでも現れ、ペルシア語ではFGが基本となるもう一つの理由だとと思われる<sup>25</sup>。

---

<sup>25</sup> 同じくSOV言語のアゼルバイジャン語ではBGもFGも可能だがFGのほうが一般的である。

(1) men Gəncə-də işlir-əm, Vaqif Baki-da(∅).

I Ganja in work-1sg V Baku-in

(I work in Ganja, Vaqif in Baku.)

(2) men Gəncə-də(∅), Vaqif-isə Baki-da işlir.

I Ganja in Vaqif-CON Baku-in work-1sg

(I work in Ganja, Vaqif in Baku.)

一方、SOV言語であるトルコ語の4人の母語話者に以下のFGの用例と非一致的なBGの用例を確認したところ、4人ともどちらとも正しいという答えをした。では、どちらが一般的でよく用いられるかという質問に対して、2人は非一致的なBGが、もう1人はFGが、残りの1人はFGにも非一致的なBGにも文法的な誤りがあるから、それぞれの人称に一致する動詞を省略しない文を作るべきだという判断を下した。

(3) ben İstanbul-da, abla-m ise Ankara-da çalışıyor. (非一致的なBG)

I İstanbul-in brother-POSS CON Ankara- in work

(I work in İstanbul, my brother in Ankara.)

(4) ben İstanbul-da çalışıyor-um, abla-m ise Ankara-da. (FG)

I İstanbul-in work-1sg brother-POSS CON Ankara-in

(I work in İstanbul, my brother in Ankara.)

## 5. 日本語での Gapping

日本語では FG が許可されないので，Gapping は BG のみ可能である<sup>26</sup>。

(40.a)私はお茶を飲んだ。

(40.b)彼はコーヒーを飲んだ。

(40.c)私はお茶を(∅)彼はコーヒーを飲んだ。

∅=飲んだ

FG で省略された以下の例文は談話では認められたとしても正式な日本語では認められない。

(41)\* Taroo ga Amerika ni {ik-i/ itta,} Hanako ga Huransu ni (∅).

(Kuno 1978:132)

例(41)では，文が未完全で放置され，二つ目の構文の S を満たす V が存在しない。この場合，先行する構文の V が後続の構文の S まで満たすことは不可能である。日本語で (SOV) + (SOV) = (SOV) + (SO) が許可されないのは，並列した構文の前の V が構文のボーダーを越えて後の V の分まで満たすことができず，二つ目の構文の V を満たす成分がなくなるからである。結果として，FG に SVA の「抑制の力」がかかり，FG が不可能となる。



図 4. 二つ目の構文の V を満たす成分がない。

言い換えれば，日本語は厳格な主要部後置(head-final)言語であることから，V が必ず文末に生起しなければならない。Shibatani(1990)も同様な理由によって日本語が

<sup>26</sup> Kuno(1978)のように，一部の先行研究は日本語や朝鮮語の Gapping を Right Node Raising (RNR)として捉えられている。

(5) Taroo ga Amerika ni, Hanako ga Huransu ni itta.

(Kuno 1978:132)

しかし，Node Raising は動詞以外の要素も省略し，動詞のみを省略する Gapping と機能が異なるため，Kuno(1978)の指摘には問題がある。

Backward Gapping しか許さないとしている<sup>27</sup>。

(42a.) Taro ga ringo wo tabe, sosite Hanako ga mikan wo tabeta.

Apple eat and orange ate

(Taro ate an apple, and Hanako ate an orange)

(42b.) Taro ga ringo wo  $\emptyset$ , sosite Hanako ga mikan wo tabeta.

(lit.) (Taro an apple, and Hanako ate an orange)

(42c.) \*Taro ga ringo wo tabe, sosite Hanako ga mikan wo  $\emptyset$ .

(lit.) (Taro ate an apple, and Hanako an orange.)

(Shibatani 1990:259)

## 5.1. 日本語における非一致的な BG

### 5.1.1. 感情動詞と S との一致

日本語では感情を表す動詞と S の素性の一致が要求される。「欲する」、「嫌がる」、「恋しがる」、「さびしがる」などは三人称の場合と一人称と二人称との場合で生起する形態が異なる。以下 Iwasaki(1993)の例をあげる。例(43.a)は S と V が一致しているので正しい文であるが、(43.b)はそれが一致しないとして非文とされる<sup>28</sup>。

(43.a) watashi wa kanashikatta.

I TOP sad.PAST

(I was sad.)

(43.b) \*meri wa kanashikatta.

Mary TOP sad.PAST

(Mary was sad.)

(Iwasaki 1993:3)

益岡(2006)は、「ほしい」、「寒い」、「痛い」のような日本語の感情形容詞は、人の内面の状態を表す点で主観性の強い表現である述べている。したがって、「このよう

---

<sup>27</sup> "...verb-final requirement has a significant repercussion in the word-order-related phenomenon of "Gapping", in which repeated constituent are deleted or "gapped". Since the verb-final requirement must be satisfied, gapping cannot take place in the forward direction, which would have the effect of gapping the repeated verb of the second conjunct clause; only backward gapping, which guarantees a verb-final structure, is permitted in Japanese."

(Shibatani 1990:259)

<sup>28</sup> 物語文ならば例(15)が正しく思われる場合があるが、それは物語文では語り手が自ら目撃した現象を語りかけているような語り方で描写するからであると思われる。

な感情形容詞を述語とする文の主体は普通、1人称（疑問文では2人称）である。」  
(益岡 2006:21)

(44)あなたは車がほしいですか？

(45)？太郎は車がほしい。

(ibid)

表 3. 感情動詞と人称による制限

人称	ほしい
1	○
2	△ <sup>29</sup>
3	×

仮に、以下の例のように、感情動詞が Gapping に現れるとしたら、日本語では非一致的な BG が出現することになる。

(46.a)？私は車を、彼は自転車をほしがっている。

(46.b)\*彼は自転車を、私は車をほしがっている。

ネイティブスピーカーにより、(46.b)は非文とされるが、(46.a)を認める人もいる。その理由は、(46.a)では「彼」という S とその近くにある V 「ほしがっている」が一致し、CCA 規則の「許可の力」が働いているからだと思われる<sup>30</sup>。例(46.b)では V が遠い S としかの一致を果たしていないので非文となる。

### 5.1.2. 授受表現における S と V の一致

日本語では授受表現が頻繁に用いられ、文の表層に動作主を明示しなくても、動作の方向性を確認できる。話し手の主観性により「もらう」「くれる」「あげる」といった授受動詞の出現が異なってくる。したがって、授受表現でも S と V の一致が重要なファクターとなっている。それゆえ、方向性を示す動詞は Gapping によって省略されるのであれば、非一致的な Gapping が出現する可能性がある。

<sup>29</sup> 感情動詞が二人称では疑問詞の「か」と生起すると可能になるので△にした。

<sup>30</sup> なお、文章や談話のスタイルによって適否には差異が生じられると思われるが、本論文では談話や文章における動詞の問題を扱わないことにした。

また、序論でも挙げたが、中崎(2006)は授受表現の観点から人称の選択について論じている。中崎(2006)は、「話し手主観性」と人称詞の関係性について以下の例を挙げ、授受表現における。

(47)あなたに助けてもらった。(いただいた)

(48)\*お前に助けていただいた。

(49)あの子にチョコレートを焼いてもらったのか(\*いただいたのか)

(50)彼女は君に助けてもらったそうだね(\*いただいたそうだね)

(中崎 2006:8)

以上の例に関して中崎(2006)は次のように述べている。

「\*」の文や語句では、(中略) ((1)自称詞と対称詞のペアにおいて適合性がなければならない(2)人称名詞と敬意語「いただく」との整合性も考慮されなければならない) の2点で、不適切が生じているといえよう。「私とあなた」「僕と君」「俺とおまえ」等の自・対称詞のペアは、特別なことのない限り一般に同格性を基本とし、かつ、人称詞の待遇レベルと等価の「もらう」または「いただく」の選択をしなければならないと考えられよう。

(ibid)

このように、授受動詞は以下のような構文では非一致的な Gapping として出現する可能性が存在する。

(51)?誕生日に先生はチョコレートを、彼女はケーキをくれた。

### 5.1.3. ムードを表す動詞と主語との一致

日本語では動詞の「ている」形はSの素性がVの活用形式との一致を要求する場合がある<sup>31</sup>。澤西(2004)は、ムードと人称に関して以下のことを述べている。

---

<sup>31</sup> なお、人称の一致を要求するのはムードの「ている」形であり、アスペクトの「ている」形ではない。たとえば、以下の例の「ている」はアスペクトを示しているのであり、人称に関係なく構文に現れる。

(1) A: 今何をしていますか?

B: 本を読んでいます。

談話レベルでは典型的には、感情や心理・生理的な状態を表す動詞群、特性や関係あるいは物や人に対する評価を表す動詞群、そして動作・作用を表す動詞においても、三人称にはテイル形やテイタ形が選択されるという現象が見られ、そのことから、テイル形は基本的に三人称で用いられる形であり、このことはアスペクト的意味以外に、テイル形に客観的に対象物（者）を描写、提示する《客観性》という特性があり、更にそれをムードとしても表しうる場合がある。

(52)彼はその知らせを非常に喜んでいます。

(澤西 2004:25)

ムードを表すテイル形により非一致性が出現するかどうかもう少しの考察が必要である。

#### 5.1.4. 敬語動詞と主語との一致

印欧諸語における人称、数、性の一致は日本語にはない。日本語における敬語は「語用論的・社会言語学的側面が関与するだけではなく、文法的な側面も関与する。それは、敬語の表現が述語の形などに、組織的に組み込まれているためである。」(益岡 2009:3)

益岡(2009)も指摘しているように、敬語表現は文法的に日本語に組み込まれており、尊敬構文の構造によって出現する尊敬動詞が異なってくる。以下の例の意味はほとんど同じであるが、能動的な捉え方か受動的な捉え方かの点で異なるだけである。

(53.a)先生に教えていただいた。

(53.b)先生が教えてくれました。

また、名詞句の並列でも非一致性が生じる可能性がある。

(54.a)太郎君は若い。

(54.b)山口先生はお若い。

(54.c)? 太郎君も山口先生もお若い。

表 4. 日本語における内外関係と敬語動詞の使用<sup>32</sup>

対称	普通動詞	尊敬動詞	謙譲動詞
内	○	×	○
外	○	○	×

また、表 4 からわかるように、人称により敬語動詞の使用にも制限があり、自分を含む「内」の人間に対しては尊敬語が、「外」の人間に対しては謙譲語が使えない。

以下(55)では尊敬を示すべき存在としての「総理大臣」という S と敬語を使わなくてもよい S との並列が非一致的となり、SVA 規則により「抑制の力」が容認度を下げる。

(55) ? 私たちは歩いて、総理大臣は専用車でスタジアムに向かわれた。

#### 5. 1. 5. 掻き混ぜ文における語順

掻き混ぜ文は日本語でも可能だが、語順が掻き混ぜ文では OSV も可能となる。しかし、V が必ず構文の最後に要求されるので V が上昇しない。

(56) Dareka -ga hotondo-no uta -o utatta

someone-NOM most -GEN song-ACC sang

(Someone sang most of the songs.)

some >> most, \*most >> some

(57) Hotondo-no uta -oi dareka -ga ti utatta

most -GEN song-ACCi someone-NOM ti sang

(Most of the songs, someone sang.)

some >> most, most >> some

(Miyagawa 2003:178-9)

日本語の人称制限は印欧語の一致のように形態的な性格の強いものではなく、述語の意味的特性やムードなどによるものである。人称という範疇における日本語とペルシア

<sup>32</sup> ○は可能，×は不可能を示している。



語の性質が違うものの、これらの要素の一致を Agreement カテゴリーとして扱ってよいと思われる。

日本語でも S と V の一致は求められるが、限定的である。つまり、V は性と数との一致を果たさず、限られた場面で人称のみと一致を果たすのである。日本語の V の人称の一致がすべての人称に行き届いていないことから、V と S との人称の一致は限定的である。そこで S の素性と V の活用形式が一致しない非一致的 BG がほとんど生起せず、限定的となってしまう。

上記のような非一致的な並列の例は、曖昧な表現として話者によって避けられることが予想できる<sup>33</sup>。

以下の表は、日本語とペルシア語の Gapping の仕組みをまとめたものである。

表 5. 日本語とペルシア語の Gapping の仕組み

Gapping	日本語	ペルシア語
一致的な BG	網羅的に許される	網羅的に許される
非一致的な BG	限定的で認定に差異がある	制限的で認定に差異がある
一致的な FG	一切許されない	網羅的に許される
非一致的な FG	一切許されない	網羅的に許される

<sup>33</sup> 筆者が日本語のネイティブスピーカーに非一致的な BG の構文を提示し、正誤判断を求めた際、提示された非一致的な BG を一致的な表現に直されたり、Gapping を避けた表現で言い直されたりしたことがある。

(1)彼は自転車をほしがっている。私は車がほしい。

## 6. 本章の考察とまとめ

本章では日本語とペルシア語における Gapping の仕組みの対照比較を行った。ペルシア語では、原則としていかなる人称を伴う構文の並列でも「抑制の力」を伴わない FG が網羅的に可能である。また、一致的な BG は元より、非一致的な BG も場合によって容認される。ペルシア語で非一致的な BG が容認されたり、されなかったりするのには、SVA 規則の「抑制の力」と CCA 規則の「許可の力」がかかり、二つの力が拮抗しているからである。

さらに、ペルシア語では Gapping が FG となっている理由として、人称と数の不一致の制限と、複文における V の上昇の例を挙げて分析を行った。

一方、日本語に関しては、Gapping が厳格な BG であって、FG が一切容認されない。これは、並列された構文の前の V が構文のボーダーを越えて後の V の分まで満たすことができず、二つ目の構文の V を満たす成分がなくなるからである。つまり日本語では、FG に SVA 規則の「抑制の力」がかかり、厳格な head-final 言語であることから CCA 規則の「許可の力」がかからない。

また、日本語における非一致的な BG の可能性に触れ、ムード表現、授受表現や敬語の仕組みから生じ得る非一致的な Gapping を分析した。日本語の V の活用には性や数に伴う変化がなく、人称により V の活用が限定的であることから非一致的な BG の並列は生じにくい。従って、非一致的な BG に関して、日本語は限定的で現れにくく、ペルシア語では制限的である。また、両言語でも非一致的な BG の認定に差異がある。

## 第六章

### 結論

本論文では、日本語とペルシア語における構文の並列の比較をテーマに、ペルシア語の ham (هم) と日本語の「も」、「て」の並列方法とそれに対応するペルシア語の用法、日本語とペルシア語における Gapping の仕組みや語順の問題と Gapping の現れ方について考察を行った。

並列は線条性によって生まれ、言語の構成を支配している。構文の並列によって、類似事態が生じ、繰り返しが不要になる要素は省略される。本論文で扱った要素はすべて異なった形で省略現象にかかわるものである。第三章で扱った「も」と ham が、VP の省略に、第四章で扱った「て」や-o が目的語、主題や主語の省略に、そして、第五章で扱った Gapping 現象が V の省略にかかわっていることに触れた。これらの要素はそれぞれ機能がことなり、構文において果たしている役割が異なっている。以下、それぞれの章の結論を列挙し、これを最終的な結論としたい。

第三章のペルシア語の ham と日本語の「も」の対照研究では、ham と「も」の様々な意味用法を分析し、お互いの指し示す意味のスコープに焦点を当てた上、どの程度意味が共通しているかについて調査を行った。その結果、前件の事態を参照し指し示す基本的な意味では ham と「も」が同様の役割を果たしていることが判明した。しかし、周辺的な用法では ham が関連事態の類似性のスコープを広く取り、この点において「も」と差異があることが分かった。つまり、周辺的な ham は前件の構文を類似事態として捉えて生起するのに対して、「も」は同様の述語や動詞を共有するという前件と後件の明確な類似性を求める。

また、否定文における二つの語の機能を比較し、「も」が否定形に生起するのに対して、並列詞二語使用の場合、ham が生起しないことを指摘した。これは、両言語における二つの語の果たす統語的なステータスが異なるからであると結論付けた。

第四章では日本語の接続助詞である「て」の接続・意味用法について考察を行い、「て」の指し示す意味や統語的な役割をペルシア語の ham, o-, Ø マーカーとの対応を通じて探り、以下の結論を得た。まず、「て」が表す意味のスケールは広く、ペルシア語のいくつかの接続詞がそれに対応する。さらに、「て」および-o, ham は語彙的に特別な意味を持たない機能語として文脈によって意味が異なるが、このダイクシスの用法は日本

語でもペルシア語でもこれらの接続詞の重要なファクターとなっている。このように、両言語における「て」、ham、-o はそれぞれが指し示す意味の範囲が異なり、ダイクシス的で複数の意味を持つ上位範疇レベルに属し、「から」、「ので」、「それから」、「baʔd」、「čon」などは特定の意味しか持たず、下位範疇レベルに属する機能語である。特定の意味をもつ並列詞の場合、両言語で互いの指し示す意味をカバーする範囲が広い。

さらに、「て」にも ham にも「因果関係」を表す用法があるが、「て」の場合、前件と後件は同一主語か異主語かに関係なく「因果関係」の「て」が生起する。一方、「因果関係」を表す ham の場合は異主語でなければならない。また、日本語の「て」には構文の並列以外に、アスペクトマーカ―やモダリティとして機能する用法が、ham や-o には名詞の並列を行う機能が備わっている。

第五章では、ペルシア語と日本語における Gapping に焦点を当てた。ペルシア語では Gapping が FG、日本語では BG であるが、ペルシア語では一致的な BG も出現可能であると述べた。日本語は厳格な SOV 言語であり、常に構文の最後に V が求められることから FG は不可能となる。また、両言語における非一致的な BG が出現する可能性を分析した。ペルシア語では人称と数に由来する非一致的な BG の出現可能性を明らかにした。非一致的な Gapping では SVA 規則の「抑制の力」と CCA 規則の「許可の力」が拮抗し、ネイティブスピーカーによって認められたり認められなかったりする原因となっていることを指摘した。

さらに、ペルシア語における語順の柔軟性に触れ、SVO の出現する範囲について例を列挙し、複文での V の上昇が Gapping の現れ方に影響している可能性を指摘した。

ペルシア語と日本語の構文の並列にはそれぞれの構文並列ストラテジーがあり、処理の仕方が異なる。ペルシア語と日本語の構文の並列を対照研究して、少なくともこの二つの言語の並列ストラテジーについて次のことを断言することが可能である。すなわち、片方の言語である形式を用いて表された特定の意味は、もう片方の言語では別の方法や形式を用いて完全に表現できるとは限らない。例えば、当然ではあるが、日本語における「て」の統語的なステータスとペルシア語における-o の統語的なステータスは異なっている。また、各言語ではそれぞれ指し示す意味に一致する部分もあれば一致しない部分もあり、それによってずれが生じるのである。

さらに、それぞれの言語では構文の現れ方にかかわってくる文法的な規則が普遍的なものがあれば個別的なものもある。普遍的な規則は言語普遍的なものであり、原理的である。個別的な規則はその言語内の統語的な構造からくるものである。

また、本研究は構文における「も」や ham の出現する条件や Gapping の現れ方に関

して一致する Gapping と一致しない Gapping の仕組み, それに, ペルシア語の FG や BG の出現する状況を分析し, それぞれに絡んでくる様々な要素を究明したことで一般言語学や言語教育の分野に貢献できたと思われる。

本研究では, ペルシア語と日本語の構文並列に関わっている要素の代表的なものを対象としたが, 構文の並列に参加する他の要素の比較まで及ばなかった。今後, 他の構文並列に関わる要素や名詞句の並列の対照研究が必要であり, またその余地が残されていると思われる。

## 参考文献

- ابوالقاسمی، محسن. 1388. «راهنمای زبانهای باستانی ایران» (جلد اول)، تهران، انتشارات سمت.
- Aghaei, Behrad. 2006. "The Syntax of Ke-Clause and Clausal Extraposition in Modern Persian". Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.
- انوری، حسن. احمدی، گیوی. (Anvari Hasan). 1385. «دستور زبان فارسی 2» (ویرایش سوم). ناشر: مؤسسه فرهنگی فاطمی، تهران.
- 荒木直樹. 2010. 「普遍文法：プロブレムかミステリーか？」，広島工業大学紀要研究編 44: 361-368.
- باطنی، محمدرضا. (Bateni Mohammadreza). 1386. "توصیف ساختمان دستوری زبان فارسی"، مؤسسه انتشارات امیر کبیر، تهران.
- باقری، مه‌ری. (Bagheri Mehri). 1387. "تاریخ زبان فارسی"، مجموعه فنون و مفاهیم ادبی-1، نشر قطره، تهران.
- 千葉修司. 1999. 英語の非対格動詞の第一・第二言語習得，神田外語大学 COE 1999 年度報告書，第3年度 B: 357-396.
- Chomsky, Noam. 1965. "Aspects of theory of syntax", Cambridge, MA: MIT Press.
- Comrie, Bernard. 1976. "Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems", New York: Cambridge University Press.
- Corbett, Greville, G. 2006. "Agreement", Cambridge: Cambridge University Press.
- Dabir Moghaddam, Mohammad. 2001. "Word order Typology of Iranian Languages", The International Journal of Humanities. 8(2): 17-23.
- Darzi, Ali. 1996. "Word order, NP movements, and opacity conditions in Persian", Ph.D. Dissertation. University of Illinois at Urbana-Champaign.
- ドルヌ・フランス. 1995. 「AUSSI フランス語の「同/他の論理」『「も」の言語学』つくば言語文化フォーラム編.
- 石綿敏雄・高田誠. 2005. 『対照言語学』. (12). おうふう.
- 遠藤裕子. 1982. 「接続助詞「て」の用法と意味」『音声・言語の研究』第二号 東京外国語大 230 エクス 言語文化論集 学部創設 70 周年記念論文集.
- エドワード・サピア著. 1921. 安藤貞雄訳. 1998. 『言語—ことばの研究序説』岩波書店.
- فرشیدورد، خسرو. (Farshidvard Khosro). 1383. "فعل و گروه فعلی و تحول آن در زبان فارسی"، پژوهشی در دستور تاریخی زبان فارسی، انتشارات سروش. تهران.
- Jackendoff, Ray. S. 1971. "Gapping and related rules". Linguistic Inquiry 2: 21-35.
- Jahedzadeh Shorblagh, Behnam. 2012. 「ペルシア語の ham と日本語の「も」の対照研究—並列的な用法を中心に—」『KLS. The Kansai Linguistic Society』 32: 121-132.

- Jahedzadeh Shorblagh, Behnam. 2013. 「日本語とペルシア語における並列－両言語における Gapping の仕組み－」『イラン研究』, 大阪大学大学院言語文化研究科. 9: 44-60.
- Jazayery, Mohammad Ali. 1970. “The Arabic Element in Persian Grammar: A Preliminary Report”, Iran. 8: 115-124.
- Hadumod, Bussmann. 1996. translated and edited by Gregory Trauth and Kerstin Kazzazi, “Routledge Dictionary of Language and Linguistics”, Routledge. London and New York.
- حسن انوری، احمد گیوی. (Anvari Hasan, Givi Ahmad). 1388. "دستور زبان فارسی(2)" ویرایش سوم. ناشر: موسسه فرهنگی فاطمی.
- حسن انوری. (Anvari Hasan). 1383. "فرهنگ روز سخن"، به سرپرستی حسن انوری، تهران: انتشارات سخن.
- Hasegawa, Yoko. 1996. “A Study of Japanese Clause Linkage”. The Connective TE in Japanese. Tokyo. Kurosio & Stanford: CSLI.
- Haspelmath, Martin. 2004. “Coordinating Constructions: An Overview”, John Benjamins. 3-41.
- Hasumod, Bussman. (ed). 1996. “Routledge Dictionary of Language and Linguistics”. London, Routledge.
- Hennig, Mathilde (Ed.). 2013. “Die Ellipse – Neue Perspektiven auf ein altes Phänomen”, de Gruyter Berlin/ Boston.
- H. Taleghani, Azita. 2006. “The Interaction of Modality, Aspect and Negation in Persian” PhD Dissertatin, the University of Arizona.
- Iwasaki, Shoichi. 1993. “Speaker and Subjective Phenomena”. Subjectivity in grammar and discourse. 1-15.
- Gilbert, Lazard. 1992. “A Grammar of Contemporary Persian”, Mazda Publishers in association with Bibliotheca Persica, Costa Mesa, Calif.
- Greenberg, J. H. 1963. “Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements”. In J. H. Greenberg (Ed.), Universals of Language. Cambridge, MA: MIT Press. 40-70.
- Gross, Thomas Michael. 2002. “Coordination as a linguistic speed-up mechanism”, 『言語と文化』, 愛知大学. (7) (34): 39-68.
- グループ・ジャマシイ. 1998. 『教師と学習者のための日本語文型辞典』 くろしお出版.
- 金田一京助. 1938. 『国語史』 東京：刀江書院(=『金田一京助全集』 1: 311-433
- کلباسی، ایران. (Kalbasi Iran). 1369. "نقشهای «هم» در فارسی امروز"، مجله زبانشناسی، مرکز نشر دانشگاهی، س7، ش2، ص 56-58.
- Karimi, Simin 1989. “Aspects of Persian Syntax, Specificity, and the Theory of Grammar”.

- Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Karimi, Simin. 2005. "A minimalist approach to scrambling: evidence from Persian". Mouton de Gruyter.
- Karimi, Simin and H. Taleghani, Azita. 2007. "Wh-movement, interpretation, and optionality in Persian". In Phrasal and Clausal Architecture: Syntactic derivation and interpretation. In honor of Joseph E. Emonds, Karimi, Simin, Vida Samiian and Wendy K. Wilkins (eds.). 167-187.
- 加藤重広. 2006. 「線条性の再検討」, 峰岸真琴(編)『言語基礎論の構築へむけて』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 1-25.
- 加藤陽子. 1995. 「テ形節分類の一試案: 従属度を基準として」『世界の日本語教育』国際交流基金日本語国際センター. 5: 209-224.
- Kayne, R. S. 2005. "Some Notes on Comparative Syntax, with Special Reference to English and French". In G. Cinque & R. Kayne (eds.) *The Oxford Handbook of Comparative Syntax*. Oxford: OUP. 3-69.
- Kent, Roland G. 1953. "Old Persian". New Haven, American Oriental Society.
- Krestin, Schwabe and Ning, Zhang. 2000. "Arbeiten, Ellipsis in conjunction", Edited by Krestin Schwabe and Ning Zhang. 179-194.
- 久野暲. 1978. 『談話の文法』大修館, 東京.
- Kuno, Susumu. 1978. "Japanese: A Characteristic OV Language.", In Winfred Lehmann. ed. *Syntactic Typology: Studies on the Phenomenology of Language.*, Austin: University of Texas Press. 57-138.
- 栗林裕. 2006. 「トルコ語の複合動詞と文法化」『Asian and African Languages and linguistics. 1: 25-44.
- Lazard, Gilbert. 1992. "Grammar of Contemporary Persian". Publisher: Mazda.
- Lehman, Winfred P. 1973. "A Structural Principle of Language and its Implications". *Language: Journal of Linguistics Society of America*, Los Angeles. 49: 47-66.
- Lightfoot, David. 2006. "How New Languages Emerge", Cambridge University Press, Cambridge.
- ماهوتیان، شهرزاد. 1378 (Mahootian Shahrzad). «دستور زبان فارسی از دیدگاه رده شناسی» ترجمه مهدی سمائی، تهران، نشر مرکز، چاپ پنجم.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法改訂版』くろしお出版.
- Maling, Joan. 1972. "On gapping and the order of constituents". *Linguistic Inquiry*. 3: 101-108.



- Marashi, Mehdi. 1970. "The Persian Verb: A Partial Description for Pedagogical Purposes", The University of Texas at Austin. Ph.D. Dissertation.
- Martinet, André. 1967. "Éléments de linguistique générale". Paris: Armand Colin. 『一般言語学要理』三宅徳嘉訳. 1970.
- 益岡隆志. 2009. 「日本語の尊敬構文と内・外の視点」坪本篤朗他編『「内」と「外」の言語学』, 開拓社. 3-22.
- 益岡隆志・田窪行則. 2006. 『基礎日本語文法改訂版』くろしお出版.
- 松本克己. 2007. 『世界言語の中の日本語：日本語系統論への新たな地平』東京, 三省堂.
- 松浦恵津子. 1996. 「ニュース文聴解における予測能力 —テ形接続を中心とした日本語母語話者と日本語学習者との比較—」『言語文化と日本語教育』お茶の水女子大学言語文化学会. 12: 46-57.
- Marjorie, J. McShane. 2005. "A theory of Ellipsis". Cary, NC (USA): Oxford University Press.
- 三原健一. 2009. 「テ形節の統語構造」大阪大学大学院前期授業資料.
- Mithun, Marianne. 1988. The grammaticalization of coordination. In John Haiman and Sandra A. Thompson (eds.), *Clause combining in grammar and discourse*.
- Miyagawa, Shigeru. 2003. "A-movement scrambling and options without optionality". *Word Order and Scrambling*, ed. S. Karimi, Oxford: Blackwell. 177-200.
- مقدم کیا، رضا. (Moghaddam kia Reza). 1383. «بعد»، نقش نمای گفتار در زبان فارسی، زبان و ادبیات، نامه فرهنگستان، تابستان 1383 - شماره 23: 81-98.
- Morgan, Jerry L. 1984. "Some Problems of Agreement in English and Albanian". *Proceedings of the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society (1984)*. 233-247.
- 森田良行. 1980. 『基礎日本語 2』角川書店.
- 森田良行. 1989. 『基礎日本語辞典』角川書店.
- Munn, Alan. 2000. "Three Types of Coordination Asymmetries," *Ellipsis in Conjunction*, ed. by Kerstin Schwabe and Ning Zhang, Max Niemeyer Verlag, Tübingen. 1-22.
- 中井悟・上田雅信. 2004. 『生成文法を学ぶ人のために』, 世界思想社.
- 中尾有岐. 2008. 「並列事態が想定しにくいモについて」『日本語文法』8-1: 36-52.
- 中俣尚己. 2009. 『日本語並列表現の体系と記述』博士論文, 大阪府立大学大学院.
- 中崎温子. 2006. 「「もらう」系コミュニケーションにおける「話し手主観性」と人称詞ハイアラーキー」, 愛知大学言語学教育研究室紀要『言語と文化』15: 1-20.
- Nariyama, Shigeko. 2004. "Ellipsis and Reference Tracking in Japanese". Amsterdam: John

Benjamins.

- 仁田義雄. 1995. 「シテ形接続をめぐって」. 仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』くろしお出版. 87-126.
- 沼田善子. 1995. 「現代日本語の「も」—とりたて詞とその周辺—」『「も」の言語学』つくば言語文化フォーラム編. 13-58.
- 沼田善子. 2009. 『現代日本語取立て詞の研究』ひつじ書房.
- 岡野ひさの. 2010. 「助詞「も」の周地的用法はなぜ周地的なのか—「も」の文の論理的解釈をもとに考える—」『福岡大学研究部論集. A, 人文科学編』10(7): 213-222.
- Oku, Satoshi. 2000. "Definite and Indefinite Strict Identity in VP-Ellipsis," in K. Schwabe and N. Zhang (eds.). *Ellipsis in Conjunction*. Tübingen: Niemeyer. 179-194.
- استاجي، اعظم (Ostaji Azam). 1389. "بررسي تاريخي کارکردهاي چندگانه «که» در فارسي امروز"، *زبان شناسي و گويش هاي خراسان (مجله دانشکده ادبيات و علوم انساني مشهد)*; 2: صفحه 1-13.
- Ramsay, A M. Ahmed, Najmeh. Mirzaiean, Vahid. 2005. "Persian word-order is free but not (quite) discontinuous", 5th International Conference on Recent Advances in Natural Language Processing (RANLP-05); 2005. p. 412-418.
- Repp, Sophie. 2009. "Negation in Gapping", Oxford University Press. Published in the United States.
- Ronald G. Kent. 1953. "Old Persian Grammar, Texts, Lexicon", 2nd rev. ed., American Oriental Society, New Haven.
- Ross, J. R. 1970. "Gapping and the Order of Constituents". In: M. Bierwisch and M. Heidolph (eds.): *Progress in Linguistics*. The Hague: Mouton. 249-259.
- 定延利之. 1995. 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」, 『日本語の主題と取り立て』(益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)) くろしお出版. 95-137.
- サピア・エドワード. 1921. 著安藤訳. 1998. 『言語，ことばの研究序説』岩波文庫.
- 澤田恵美子. 2004. 「いわゆる詠嘆の「も」について—対象の再認識という心的処理—」『日本語文法』4-2: 153-168.
- 澤西稔子. 2004. 『人称との関連からみるテイル形の特徴・ムード：談話レベル・新聞記事での考察を通して』日本語・日本文化. 30: 21-40
- Sedighi, Anousha. 2006. "Agreement Restrictions in Persian", Portland State University.
- Sedighi, Anousha. 2010. "Agreement Restrictions in Persian", Leiden University Press.
- شهیدی، سید جعفر (Shahidi Seyed Jafar). 1385. "فرهنگ متوسط دهخدا" به کوشش: دکتر غلامرضا ستوده، دکتر ایرج مهرکی، اکرم سلطانی. ، ناشر: مؤسسه انتشارات و چاپ دانشگاه تهران.

- شعبانی، منصور. (Shabani Shabani) عالیہ کرد زعفرانلو، کامبوزیا. آقاگلزاده، فردوس. گلفام، ارسلان. 1389. "ساخت همپایگی: با نگاهی به زبان فارسی"، ادب پژوهشی، شماره سیزدهم. صفحات. 131-156.
- 芝罘. 2008. 『日本語の起源：その具体的全体像』，三一書房.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. "The Languages of Japan", Cambridge University Press.
- 外池俊幸. 2011. 「回帰性と可能な文の数について」，『言語文化論集』名古屋大学大学院国際言語文化研究科. 33(1): 99-110.
- Stilo, Donald. 2004. "Coordination in three Western Iranian languages: Vafsi, Persian and Gilaki". In Martin Haspelmath (ed.). 269-332.
- Stassen, Leon. 2003. "Noun phrase conjunction: the coordinative and the comitative strategy". In Plank, Frans (ed.) *Noun phrase structure and the languages of Europe*.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. "The Languages of Japan". Cambridge: Cambridge University Press.
- Soheili-Isfahani, Abolghasem. 1976. "Noun phrase complementation in Persian". Ph.D. dissertation, Department of Linguistics, University of Illinois at Urbana.
- Stassen, Leon. 2000. "And-languages and With-languages". *Linguistic Typology* 4. pp.1-54.
- Taghvaipour, Mehran. 2004. "An HPSG Analysis of Persian Relative Clauses" University of Essex, CLSI Publications.
- 田野村忠温. 1991. 「「も」の一用法についての覚書「君もしつこいな」という言い方の位置づけ一」『日本語学』明治書院. 10-9: 80-86.
- Tang, Sze-Wing. 2001. "The (Non-) Existence of Gapping in Chinese and its Implications for the Theory of Gapping". *Journal of East Asian Linguistics* 10: 201-224.
- 角田太作. 2009. 『世界の言語と日本語：言語類型論から見た日本語』改訂版. 東京：三省堂.
- 時枝誠記. 1954. 『日本文法』岩波文書全書 183.
- 豊田豊子. 1978.a. 「接続助詞『と』の用法と機能(1)」『日本語学校論集』5: 28-46.
- 豊田豊子. 1978.b. 「接続助詞「と」の用法と機能(III)」『日本語学校論集』6: 92-110.
- 豊田豊子. 1979. 「発見の「と」『日本語教育』36: 91-105.
- 豊田豊子. 1982. 「接続助詞「と」の用法と機能(IV)」『日本語学校論集』9: 1-16.
- 豊田豊子. 1983. 「接続助詞「と」の用法と機能(V)」『日本語学校論集』10: 1-24.
- 内丸裕佳子. 2006. 「形態と統語構造との相関-テ形節の統語構造を中心に-」博士論文，筑波大学大学院.
- Vahedi Langrudi, Mohammad Mahdi. 2002. "A Syntactic Analysis and Grammaticization of

- Simple Future with XAST-AN in Persian” *The International Journal of Humanities*. 9(2): 21-36.
- Vennemann, Theo. 1974. “Topics, subjects, and word order; from SXV to SVX via TVX” J.M. Anderson, C. Jones (Eds.), *Historical linguistics*, North-Holland, London. 339-376.
- 渡辺眞一郎. 2010. 「言文一致について－西洋言語との接触による日本語への影響－」, 『ことばの対照』, 岸本秀樹, くろしお出版. 337-530.
- Wesche, Birgit. 1995. “Symmetric coordination: An alternative theory of phrase structure”. Tübingen: Niemeyer.
- Yatabe, Shuichi. 2001. “The syntax and semantics of left-node raising in Japanese”. In *Proceedings of the 7<sup>th</sup> International Conference on Head-driven Phrase structure Grammar*.
- 吉田妙子. 2011. 「日本語動詞テ形のアスペクト」 晃洋書房.
- 吉枝聡子. 2011. 『ペルシア語文法ハンドブック』, 白水社.
- 吉永尚. 2012. 「テ形節における統語的考察」『園田学園女子大学論文集第』 46: 113-123.
- Zhang N, Ning. 2010. “Coordination in syntax”. (*Cambridge Studies in Linguistics* 113) Cambridge: Cambridge University Press.
- Villavicencio, Aline. Louisa, Sadler and Doug Arnold. 2005. “An HPSG Account of Closest Conjunct Agreement in NP Coordination in Portuguese”, In Stefan Mueller, editor, *Proceedings of the HPSG05Conference*, CSLI Publications. 427-447.

## 謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々のお力添えをいただきました。まず、論文の執筆およびその完成はご指導をいただいた齋藤治之先生のご助言のおかげです。

また、言語学の世界に誘ってくださった大阪府立大学の張麟声先生や例文のネイティブチェック、調査、参考文献の提供にご協力いただいた方々、提出書類作成の際お世話になった京都大学人間・環境学研究科事務室の職員の方々に心からお礼申し上げます。さらに、在学中に文部科学省やロータリー財団から奨学金をいただき、京都大学から学費の負担を和らげていただきました。それらすべてが勉強の支えとなりました。最後に、大学院での生活を有意義なものにしてくれた齋藤研や河崎研の院生諸氏にも感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

2013年11月

Jahedzadeh Shorblag Behnam